
坂田探偵事務所リリカル奇譚

一二三みかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坂田探偵事務所リリカル奇譚

【Nコード】

N8881K

【作者名】

一二三みかる

【あらすじ】

「銀魂、リリカルなのはの二次創作作品です。原作の設定を大きく変えています」

高町夫妻が営む喫茶店「翠屋」の二階に事務所を構えるぐーたら探偵 坂田銀時。

彼の有能な助手で唯一の従業員フェイト・T・ハラウオン。

甘味をいつも出前してくれる翠屋の看板娘、高町なのは。

そして事務所に入り浸る神出鬼没の少女、八神はやて。

どこかで見たことあるけど何だか違う四人は聖王教会のカリムをストーキングする帝都警察「真撰組」局長 近藤、情報屋の長谷川、更には「怪盗カッラ」らとハチメチャで騒がしい毎日を送っていた。だがある日、「魔導師」を名乗る四人の少年少女が現れ……

プロローグ

神秘と怪異に魅入られた街、アーカム帝都は海鳴。

この街の一画、壁一面に張られた赤茶色した煉瓦が特徴的な喫茶店「翠屋」はあった。

商店街にも程近いこの店、決して大きいとはいえないが放課後ともなると付近にある「聖王教会附属ミッドチルダ学院」の女生徒達で賑わう隠れた名店である。

だが、今語るべきは翠屋ではなく、その二階。

階段をあがると見えてくる、「万事屋銀ちゃん」と書かれた貼り紙——正確には、「坂田探偵事務所」と彫られた金属プレートの上に——張られたドアが。

当物語の主人公、坂田銀時のねじろであり物語の舞台でもある「坂田探偵事務所（万事屋銀ちゃん）」

では、ドアを開いてみよう——

その男、坂田銀時

壁に『糖分』とデカデカと書かれた額がある以外はいたって普通の事務所。

接客用のテーブルを挟むように設置してある二つのソファー、窓際……糖分の額の下にはデスク——と銀魂本編と代わり映えない内装。

＋＋＋

チツク チツク チツク

時計の針が動く音だけが部屋に響く。

ソファーに赤いシャツに黒いベスト、ベストと同色のパンツ。一見するとホストか探〇物語の松田〇作のコスプレに見えないこともない格好の男が顔を少年ジャンプで覆って眠りこけていた。

ジャンプから覗く白髪——そう、彼がこそがこの物語の主人公、私の上司であり雇い主の坂田銀時だ。因みに私は、彼の有能な助手でありこの探偵事務所唯一の従業員、フェイト・T・ハラウオン（20）である。

因みに、今は昼休みや休憩時間といったものではなくバリバリの営業時間内であつたりする。

因みに、客はまだ来ていない。

因みに、昨日から来ていない。

因み——

「因み因みウツセーんだよコノヤロー！お前は“ちなみちゃん”か！？」

銀時が顔のジャンプを剥ぎ取りながら飛び起る。

「銀時、私はちなみちゃんじゃなくてフェイトだよ」

タイプライターの打つ手を止め、ソファアの銀時の方を向くフェイト。

窓から差し込む日の光を浴びて、彼女の金髪が美しくきらめく。

「わーってんだよんなこたア！… ったく、人が気持ちよく寝てりやア ぶつくさ言いながらカッチカチカッチカチ… で、何やってたんだお前？」

欠伸をしつつ白髪の天然パーマ頭を掻きながらフェイトを見やる。その目は、相変わらず死んだ魚の様に生氣を感じさせない。

「報告書だよ。暇だったから」

「報告って… 依頼なんざここ最近入ってねーだろーが」

「暇潰しに。この小説風にまとめた報告書をいつか出版するのが私の夢… そう、タイトルは探偵物語——」

「あるから！ それ既にあるから！ タイトルそんなだと銀さんベスパに乗ったり工藤ちゃーんて呼ばれたりしないといけなくなるから！」

どこかうつとりとした顔で語るフェイトに焦りながら突っこむ。それはもう色々と焦りながら

「銀ちゃーん！」

「ほら呼ばれた！……て——はやてじゃねーか。どうした？」

銀時が声の方を振り向くと入り口には茶色いボブカットの少女、八神はやてが手にミストの縦長の箱を手にして立っていた。

「いやな、特に用ってほどでもないんやけど。あ、ちゃんとお土産もあるで！セイバーの後ろ髪が沢山！」

箱を開き、中に詰まったものを銀時達に見せる。

「確かに似てるけど！ポンディングそっくりだけどー！てか何でポンディングだけーッ！？」

「まあまあ銀時、落ち着こう。ほら、セイバー美味しいいいじゃない」

「よくねーよッ、つか“セイバー美味しい”って性的に聞こえるからやめてエエ」

銀時の悲しみの声がこだまする。
だが、それはまた別の話。

その男、坂田銀時（後書き）

いきなしのキャラ崩壊

不安だらけのはじまり

まだ見ぬトライヒロインの内が一人、高町なのは。
果たして、彼女は一体どんなキャラなのか!?

次回「パフェと看板娘」

銀時が飲む珈琲は、甘い

パフェと看板娘

そんなこんなで三人はソファに座ってポンドリングを食している
と、またも来客者が。

「あれ、何だか賑やかだと思ったらはやてちゃん来てたんだ」

サイドアップにした栗色のロングヘア。胸には「翠屋」のエプロン
やってきたのは翠屋の看板娘こと高町なのは嬢であった。

「おゝなのはちゃん、久しぶり」 元気にしとったか？」

「勿論」 はい、銀さん。いつもの“翠屋パフェ”」

銀時が“定期飲食”してる翠屋パフェをなのはは毎日届けてくれる。
尚、このデリバリーサービスは坂田探偵事務所限定でしか行っていない

「さんきゅ」

もきゅもきゅとポンドリングを頬張りながら片手をあげる銀時。
フェイトは既に3つも完食していた。

「ところでははやてちゃん今日はどうしたの？ 銀さんに依頼？」

「せやった！ あのなら銀ちゃん、カリムからの依頼で……」

『ストーカー！？』

はやて以外の声が重なった

「…ストーカーって、どうせ犯人は“真撰組”のゴリラだろ」

「私もはじめはそやかと思ったんやけど、カリムのお話を聞くとどうも違うみたいなんや」

^{アーカム}帝都警察庁武装特務課、通称“真撰組”をまとめる局長、猿人ゴリこと近藤勲は聖王教会に勤める“騎士”カリムにただならぬ想いを寄せ、自称“愛の狩人”というストーカーと化している。そのことについては周知の事実であり、カリムもまた鉄拳制裁によって近藤を追い返すのが日課となっていた。

「違うって、何でわかったの？」

なのはが不思議そうに聞く。カリム＋ストーカー” 〓 近藤という答えは、二人を知る人物なら誰しもが思いつく

「近藤さんにはアリバイがあったんやて」

「アリバイ？」

四つ目のポンディングを頬張りながらフェイトが顔をあげた。

「なんでも近藤さん、ここ最近出張中とかでしばらくカリムんとこに顔を出してないらしいんよ」

「はやて、それって確かなの？」

ボンディングを飲み込みながらはやてに質問する。

「土方さんに確認済みや」

「なんで其処であのマヨラーが出てくんだよ」

土方の名前を聞くと、銀時の表情が若干険しくなった

「まあ、それは――」

聖王教会に設置された小さな保育園。

そこではやての従者の一人であるシャルが保母のバイトをしている。

何日か前、聖王教会に偶然やって来た土方の口から彼女が聞いたのだという。

その証拠にカリムも近藤の姿をここ最近は見えていないらしい。

「偶然で…あのマヨ、確実にシャル目当てで教会に行ったんだろーが」

翠屋パフェを掻っ込みながら銀時が面白くなさそうに呟く。銀時は土方が嫌いと言うか軽く「いなくなないかな」。本当マジどっかに消えてくんない？このマヨネーズ馬鹿！？ 300円あげるから！あー死なないかな、あー死なないかな、頼むからさアッ！―という感じに嫌悪していた。

「銀さんと土方さん、本当に仲が悪いね」

「せやな」

なのはとはやてが苦笑する。

「取り敢えず、聖王教会に行つて詳しい話を聞かないと」

フェイトのその言葉に、はやては顔を輝かせて銀時を見やる。

「引き受けてくれるんか、銀ちゃん!？」

「久しぶりの依頼だからな」

パフェのグラスを空にした銀時は、コーヒーに角砂糖を大量に落とし込みながらけたるく答える。

ゴリラじゃないストーカー——まったく、変な依頼ばかりきやがる砂糖水と化したコーヒーを飲みながら銀時はそんなことを考えていた。

パフェと看板娘（後書き）

フェイトはクールボケ

シャマルは保母さん

妄想とキャラ崩壊が交差する

果たして、この作品にメガネの代わりはいるのだろうか！？

次回「眠らない聖王教会」

覗く双眼鏡から、カリムに熱い視線が突き刺さる

眠らない聖王教会

聖王教会。

聖王と名が付いているが、要するにちよつと規模がでかいかなーテヘッ てな教会である。

「さて…」

銀時が愛車であるミニクーパーから降りながら教会を見上げる。

因みに、愛車がミニクーパーなのは「シティーハンターだってミニに乗ってたんだからミニでいいじゃねーか」という理由だったりするが誰も知らない。

この世界の銀時は原付を所有していなかった。

「まずはカリムから話を聞くべき…なんだけど」

同じく教会を見上げてたフェイトがちらりと横を見る。

「ヴォエ ヴォロロロエ」

「大丈夫かえなのはちゃん!？」

乗り物に弱いのはが、はやてに背中を擦られながら吐いていた。

「だーッなんでオメーまで着いて来たんだよ!？こーなるって分かってたよね？自分が自転車にも乗れない位乗り物酔いしやすいって分かってたよねなのはさーんッ!？」

泣きながら銀時が突っこむ。そんな銀時を「よしよし」と頭を撫でながら宥めるフェイト。

「だって…ひとりは…いやだゲボロロアアッ」

か細い身体を痙攣させ吐瀉物を吐きながら銀時を潤んだ瞳で見上げ、口の周りを汚しながら甘い声をあげた。

因みに翠屋は高町夫妻が「美味いぞー」と叫ぶ謎の老人に促され彼が開催する料理選手権に出場するため2、3日休みとなったとか。どんな理由だよ

「田村ゆ〇りボイスで言われてもシチュエーション的に萌えらんねーよッ！…ったく。はやて、カリムは中に入るんだよね？」

「え、あ、多分おると思うけど…」

「はやてはそこでなのは見とけ フェイト、行くぞ」

「う、うん」

二人を残し銀時らはその場を去っていった。

＋＋＋

教会内、カリムの部屋。

「わざわざ有り難うございます銀時さん」

銀時らの前には金髪にカチューシャを付けた柔らかな女性、カリム・グラシアがにこやかな微笑みを浮かべて座っている。

「忙しいところをわざわざすまねエな万事屋」

銀時とフェイトに紅茶を出す人物——ツンツンと尖った頭に顎髭、特徴的な黒い制服……

「つて、ゴリーツ!? テメエなんでここにー!?」

「近藤さん!? 出張中でなかったのですか?」

件のストーカー事件の容疑者候補にあがっていた近藤勲が紅茶を入れたりお茶菓子を用意したりと家政婦ばりにカリムの世話をしていたのだ。

「カリムさんの危機に出張なんて行つてられるか! カリムさんの危機だぞ! 大事なことから二回言いました」

銀色のトレイを手に持ちながら胸を張る。

「だからって仕事をほっぽりだしてんじゃねーよ、ったく」

ため息混じりの男の声が部屋の後方より聞こえる。

「だーツ!? 土方コノヤロー!?」

銀時の天敵、真撰組副長・土方十四郎…通称マヨラー重度のマヨネーズジャンキーだ。

「なんでオメーら真撰組がいんだよコノヤロー」

「銀時、いちいち語尾にコノヤローって付けない」

「それは…」

カリムが近藤と土方に目配せすると土方はため息を吐きながら口を開いた

「怪盗カツラから予告状が届いただア!？」

銀時が呆れ半分に声をあげる。

怪盗カツラ。巷を賑わしている、ありとあらゆるモノを盗みだす怪盗——と言えばカッコいいが、実際盗む品々は名画と言ひ難い小学生の絵から美少女フィギュア、ツインファミコン、人妻モノのAVとくだらないものばかりだったりする。

そんな怪盗カツラだが、一部では義賊とも噂されている。

「…そうすると、数日のストーカー騒ぎは怪盗カツラが？」

フェイトが真剣な表情で思案する。カリムに対する近藤以外のストーカーは下調べをしていた怪盗カツラだと考えたのだ。

「その可能性がな」

フェイトの推理に土方が頷く。銀時はぐーたらでアレだが、フェイトの推理力には一目置いていた。

「で、肝心の盗むって予告してきたのは何なんだよ？」

怪盗カツラは予告状を必ず出し、事前に盗むものを予告する。今回もまた例外ではない

「それは――」

カリムが顔を赤らめた。

そんな頬の赤い彼女を遠くから眺める者が――

「うーむエリザベス、面倒なことになってきたぞ」

双眼鏡を目から離す。

着物を纏った長髪の男、隣には白い生物が木の上から部屋を覗く。

「にしてもカリム殿、本当に既婚暦はないんだろうか？あの身体つきはどう考えても“日本一有名な管理人さん（未亡人）”のソレではないか…ッ」

ふたたび双眼鏡から熱い視線を送る

眠らない聖王教会（後書き）

嘔吐するメインヒロイン

染まっていく銀魂スタイル

ゴリラとマヨラーの登場で恥ずかしい物語は加速する
果たして、次の被害者（リリカル勢）は誰なのか！？

次回、「眠らない聖王教会2 怪盗は二度笑う」

フェイトも巨大な不発弾。

自爆、誘爆、御用心

眠らない聖王教会2 怪盗は二度笑う

『今宵、月はどこを照らすの？ 厚い雲に覆われた空 今宵、君は誰に抱かれているのか？ 雨に一人泣こうか 恥ずかしながら今宵、カリム殿を含めたシスター達のパンティっというかブラジャーっというかパンティを頂きたいそうろうっ』

「う…うぜエエエッ！？ 色々突っこみどころあるけど何か、こう色々ウザイ！ そうろうとかウザイ！」

銀時が送られてきた予告状を読み終えると、こめかみに血管を浮かばせて予告状をビリビリに破り捨てた。

「ちょっと証拠破ンなよ…！ まったくはじめて予告状を読んだ時のトシと同じリアクションだな」

ビリビリに破れた予告状をセロハンテープで修復しながら土方を見る近藤。

「近藤さんも同じリアクションでしたよね？」

「あれ？ そうでしたっけ？ アッハハハ！」

カリムに突っこまれにこやかに笑う。

「あの、土方さん…アレ、本当にツラが？ あ、ツラって言っちゃった」

「ああ、恐らくはカツラのものじゃねーかって。以前送られた予告状との類似点も多々見つかったからな」

紅茶を一口飲みつつ、土方がフェイトの質問に答える。聖王教会は禁煙なのでヘビースモーカーの土方はタバコが吸えなくて机を指で叩く。

「怪盗つてか下着ドロじゃねーかつ！ 変態じゃん！」

銀時が呆れ半分に声を荒げた。自棄気味に茶菓子を口に詰め込み紅茶（案の定砂糖水と化している）で流し込んでカリムが何やらチラチラと銀時とフェイトを見てきた。

「あの銀時さん、不躰なのですが——その…わ、私たちの、パ、パンティの護衛をお願い出来ますでしょうか…？」

指先をモジモジと忙しなく動かし、顔を真っ赤にしながら懇願してきた。カリムの言葉に近藤はウンウンと頷き、土方は頭を押さえてうなだれる。

「ぶふうーッ！？」

「銀時汚い！」

「紅茶を嘔く程嫌でしたか！？ 私たちのパンティは汚いのですかッ！？ そんな汚いパンティは嫌いですか？ エマニエルですかッ！？」

「ちょ、ちよつと落ち着けカリム！ エマニエルって何だエマニエルって！」

噴き出した紅茶を拭きつつ慌てふためくカリムを宥める。

「万事屋、名誉なことじゃないか。カリムさんみたいな美女の汚れたパンティを護衛するなんて。あれ？ 美女の汚れたパンティって何だかエロい響きだな」

「テメーは黙ってる猿人ゴリツ！……あのな、カリム、俺はただの探偵だぞ？」

近藤を怒鳴りつけるとめんどくさそうにカリムの方を向きつつ弁明するが――

「けど万事屋って名乗ってるじゃん」

「うッ……」

フェイトの冷静な突っこみに文字通り「うッ」と焦りの表情を浮かべる

「それに、ここ最近まともな仕事なんて入ってきてないんだしこの際受けてもいいじゃない。寧ろ、受ける。銀時、お前に拒否権はない」

フェイトのその冷酷且つ無慈悲な物言いに一同が凍り付く。カリムは戦慄の表情で、土方は飲もうとした紅茶のカップを手元に落とし、近藤に至ってはズボンの股を濡らしてしまっている

「ちょ、一応ボク上司なんだけど、ちょエエエッ！？」という銀時の悲しい声だけが響き渡っていた

＋＋＋

時間は進み夜。

聖王教会大聖堂内、色とりどりの女性下着がかけられた物干し竿があるというシニールすぎる光景がそこにはあった。

教会の外には真撰組隊士が配置され、中では局長・近藤、副長・土方、一番隊隊長の沖田が怪盗力ツラが狙うシスター達の下着を方位していた。

「さあ来やがれ怪盗力ツラ！ カリムさん愛用のガーターは俺が死守する！」

「なあ、土方さん。俺たちや何が悲しくてパンティを囲んでんですかねエ？」

「総悟、もういいじゃねえかそんなこと……」

沖田総悟が分かり切った質問を投げ掛ける。

投げ遣りに答えた土方はというと「下着にタバコの匂いがついたらどうするんですか！ ヤニなんて外で吸ってください、このニコ中！」と女性陣（数十名）にきつく言われ、目尻に涙を蓄めて肩を落としていた。近年の禁煙運動により喫煙者は肩身が狭かった。

「なんでエ土方さん、落ち込んだんたったらそのまま死ねばいいのに。寧ろ死ねよ土方ア！！」

沖田が抜刀し土方に斬り掛かる。土方も腰の刀を抜き、迫り来る刃を受けとめた。

一番隊隊長・沖田総悟。副長の座につくべく土方の命を日夜狙っているドS。

「総悟デメエツ!？」

「おいお前ら、喧嘩なら外でやれ。カリムさんの豊満な胸をお守りする乳パッド（ブラジャー）が汚れるだろーが」

近藤に一喝され渋谷外に出ていく二人。土方はタバコを吸うため、沖田は一服中の土方の隙を突くため。

「相変わらずデメエんとは賑やかだな」

土方らと入れ違いで銀時、を先頭にフェイト、なのは、はやて、カリム、シスター・シャツハが入ってきた。

「ねえはやてちゃん、何で私達のも並べないといけないのかな?」

そわそわしつつ、頬を薄紅色に染めたなのはがはやてに質問する。

「親友のために決まってるやんか! それに、美少女の脱ぎたて水カホ力の下着に食い付かない下着ドロは絶対におらへん!」

拳を握り締めつつ力説する提案者。

尚、なのはらはちゃんとカリム達に下着を借りて身につけているが、勘違いした銀時と近藤はなのはらを見やると鼻血を垂らす。

女性陣の冷やかな視線に気付いた二人は鼻に手をあてがう。

「い、いやいや! 違うから! これは違うから、そう、チョコ! チョコを食べ過ぎただけだから!」

「そうそう! チョコを食べ過ぎただけ、な、万事屋!」

「あつたり前だよ近藤さん。俺たちアレだよ？断じて服の下が開放的になったとかの想像をしてた訳じゃ——はッ！？」

近藤と共に必死にあがくという名の弁明をしていると銀時は“ソレ”に気が付いた。

銀時の視界に飛び込んできたのは、一見すると黒髪を束ねた美人な喪服姿の未亡人に見えないこともない……だが、銀時はその顔を見間違えるはずがなかった。

「あー神様、旦那を早くに亡くしてしまい、この、この毎晩火照るからだぶりしゃッ！？」

直ぐ様、未亡人（？）に駆け寄り飛び蹴りを浴びせる銀時。

「何をなさいますのッ（裏声）！？」

未亡人（？）の胸元を掴みガクガクと揺さ振る。

「何じゃねーよ！何その格好！？なんなのその格好ッ！？気持ち悪ーいんだよ、裏声もその格好も！死んでくれない？頼むから死んでくれない、ツラアッ！？」

未亡人（？）の顔がふと真剣になる。

「ツラじゃない。…桂だ」

怪盗カツラの正体、ツラこと桂小太郎——銀時の学生時代の同級生であった。

「いや、万事屋にこんな美人な知り合いがいたとはな。あれ何処かでお会いしましたっけ？ てか…もしかして男？」

「シスター・シャツハ、お茶をお願いできるかしら？」

「あ、カリム殿そばをお願いできませんか」

「かしこまりました」

桂が和気藹々と宿敵である近藤らとお茶を飲みつつ話に花を咲かせている。

そんな桂らを尻目に、銀時と三人娘はコソコソと話し合っていた。

「……………何でバレてないんだよ。怪しめよ、全力で怪しめよ！」

「……………銀さん、桂さんのことって真撰組の皆さんに言った方がいいのかな…？」

怪盗カツラその人であるのに何でバレてないの？という会議をしていた。

銀時とフェイトは以前怪盗カツラと対峙し、驚愕の正体——かつての級友であること、盗みは弱き者、悪漢等にだまし取られたものを取り返すためにやっているということ——を知った。それから言うもの桂は銀時の事務所に遊び来たりしていた。

その経緯で、事務所に入り浸るなのはやても桂を知っていた。

「けど何かおかしくない？ 桂さんの盗むものは“奪われたモノ”。

今回の下着みたいに理由ない人からは盗まないはずじゃ」

フェイトはずっと彼が「下着を盗む」ということが気になっていた。フェイトの言葉に銀時も頷く。

「ああ、ツラは馬鹿だが“私利私欲の為のくだんない盗み”は絶対エにしないヤローだ」

「じゃあ…あん予告状は偽物！？ 誰がそないなことを…？」

銀時が談笑の輪を見やる。桂、近藤、カリム——！

「まさか…！？」

「どないした銀ちゃん？」

銀時が駆け出す。目指すはランジェリー畑。

だがその時、大聖堂内が暗闇が包みこまれた。

眠らない聖王教会2 怪盗は二度笑う（後書き）

ついに現われた沖田に桂

自重しない下ネタ

餌食となったのはカリム・グラシア

果たして、なのは達の下着の運命は!?

次回「眠らない聖王教会3 三人娘、飛ぶ」

近藤、敢えて火中の栗を拾うか？

眠らない聖王教会3 三人娘、飛ぶ

バリイーンッ

暗闇に包まれた聖王教会に硝子が割れる音が響く。

「フーッハッハハッハ!!」

気持ち悪い笑い声が響く。

銀時らが声の方を向くが侵入者と思う人物の姿は辺りは黒くて見えない。

「ちッ、近藤!」

「任せとけ!」

ランジェリー畑に先に駆け着けた銀時は近藤の名を呼ぶとこちらに人が駆けてくる音が聞こえる。

バタンッと勢い良くドアが開く。なのはが振り向くと異変に気付いた外にいた土方、沖田が隊士を引きつれて中に入ってくる。

「明かりをつける!」

土方の号令で隊士がライトで大聖堂を照らしだしていく。

カリムと共にいる喪服姿の桂。少し離れて、なのは・フェイト・はやて。ランジェリー畑の側に立つ銀時と近藤。

そして――

「!？」

ライトは浮かび上がらせる。

首に巻いたマフラーで口元を隠し、赤いふんどし一丁の男がパンティを被りながらランジェリー畑の下着を手に持った袋に入れていた姿を

もう一度言う、赤ふん一丁の男。

『きゃああああッ!!!!?』

『ぬうああああッ!!!!?』

女子の悲鳴、隊士の悲鳴がこだまする。

どう考えても変態がいるのだ、目の前に。しかもパンティを被った赤ふん一丁の。

「近藤、斬れ!この変態を斬り捨てろ!俺が許す!」

「わ、私のパンツー!？」

カリムが泣きながら叫んだ。

変態が被っているのは彼女のお気に入り、薄いブルーのややハイレグ気味のショーツ。ちよつと冒険してみようと思って購入した一品。アクセントの小さなりボンが揺れる。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうウウッ!!」

抜刀し泣きながら斬り掛かる。

電光石火の一撃、阿修羅すらも凌駕した。

だが、

……ひらり

ゆらりと緩やかに流れる水のように変態は近藤の一撃を避けた。

「何!？」

「近藤さんの剣を避けただとッ!？」

誰しもが驚いた。いくらストーカーでゴリラでフルーツチンポ侍だろつと、彼は精鋭真撰組の局長…實力は折り紙付きなのだ。

「甘い…伊達に下着ドロをやってる訳ではない…。ふんどしタイプ
ーんッッ!！」

変態が腰を目にも止まらぬ早さで、赤いふんどしを振るった。
ブオンツと風を切りながら近藤に襲い掛かる。

鞭と化した赤ふんは近藤を一撃のもと薙ぎ払った。

「ぐああアッ!？」

「最低なバトルものになってるウーッ!？」

「おい、あの変態切り捨てろぞ!」

近藤は床に叩きつけられ、銀時は啞然とする。土方らは局長をやられたことに激昂し、刀を手に変態に斬り掛かっていく。

「ふんどしスパイダー!」

右腕を某蜘蛛男が糸を出すように天井のシャンデリアに向けると、ピシューっと空を切る怪音と共に糸が伸び、変態は天井に逃げていく。

「最低や！ 最低のスパイダーマンや！」

「揺れるふんどしが憎らしいね」

「わ、私のパン…ッ」

「か、カリムさーんッ!？」

「氣を確かにカリム殿！」

お気に入りのショーツが空を飛んだショックにカリムは気絶。崩れる体をなのはが抱き留めた。

「おい、バズーカとかねーのかよ！ あの不愉快なシャンデリア今すぐ撃ち落とせ！」

「任せてくだせエ」

ブラブラと揺れる変態を指差し銀時は叫ぶと沖田が直ぐ様バズーカを構えて発砲する。

轟音が空気を揺らし、音速で弾丸が変態に向かい飛んでいく。

「ふんどしタイフーンッ！」

近藤を葬り去った技で弾をはじき返すと、弾は変態が割ったガラスから外に飛んでいった。

ドゴオオオオンツ！！と大きな音をたて爆発、教会全体が揺れる。

「ありやりや、弾かれちゃった」

冷静に変態を見やる沖田。

「おいおい、聖王教会は文化遺産だぞ。こんな危険なものの発砲はやめたまえ」

「紳士的な態度が逆にウザい！…な、なんとかならないの？」

「お手上げですねィ」

「さらっと言っんじゃねーよ…」

突っ込みに撤していた銀時が揺らめく。三人娘まで近づくと、はやての手首を掴み

「こちとら乙女という名の無敵な弾丸ミサイルがあるんじゃあああッ！！」

ブオンツ

はやてを変態目かけて分なげた

「にぎやあああッ！！！！？」

まさに弾丸となり、変態に向かい一直線に飛んでゆく。

「むッ！？ ふんどしスパイダー！ver・ネット！」

某（以下略）のように糸を網状にして飛んできたはやてを受け止め

る。

「た、助かった…」

泣きながら命の尊さを悟るはやてを余所に銀時は次弾を連続で発射！

フエイトなのは

「きゃああああッ!？」

「銀時、ちよつと頭冷やそうかアアアッ!！」

「ふんどしネット! ネット!」

再び変態の網に受け止められる二人。

「女子に対して何という仕打ち…貴様、それでも男子か!」
オノコ

変態の一喝。変態からのまっとうな説教。

何だろう…横で聞いていて色んな意味で泣けてくるのは…変態なの
に、となのは、フエイト、はやての三人は心底感じていた。

「ちッ…沖田君…やってくれ」

銀時は沖田に目配せをする。

「了解でさア、旦那」

ぐるんぐるんぐるんぐんっ

銀時の腕を掴み、砲丸投げでもするかのように沖田は回る。

「変態」

「狩りじゃああああアアッ!！」

ずぎゅうおおウツ!!

先ほどとは比べものにならない速度で飛んでいく。

言うなれば「弾丸ライダーキック」

ピンと伸ばした足が変態に迫る。

「ふんどし——」

「させるかッ!」

ふんどしネットを放つ前に土方が懐のマヨネーズを投げた。
むにゅるりと白黄色の軟体が飛び出し、変態に降り掛かる。

「ぬぐッ、目が!？」

「——あばよ、変態野郎」

変態のがら空きの胴に銀時の超・飛び蹴りが杭の如く突き刺さった。

「ぐはア!？」

ブツリと音をたてて糸が切れる。変態は重力に従って下へと……

「確保おおッ!」

土方の号令に隊士が落下してきた変態を取り押さえる。

——こうして、聖王教会の長い夜に幕を下ろしたのであった。

「こらー! 私たちを降ろさんかい!」

「銀時、殺す」

「銀さん、絶対に頭を冷やさせてあげる」

眠らない聖王教会3 三人娘、飛ぶ（後書き）

超人的な力を持った赤ふんの変態は登場と共に退場。

きつと再登場ないだろう…多分。

そして、シスター・シャツハ登場の意味はあったのだろうか？

次回「嵐」

はやては刻の涙を見る

嵐

聖王教会の事件から数日。

予告状を出したのがあの赤ふん——ふんどし紳士と名乗っていた——であり怪盗カツラではなかった。

あの場にいた桂は自分の無実を証明するため、ふんどし紳士の犯行を阻止するためにやって来たというが……結局、お茶を飲み、そばを食っただけで何の役にも立っていなかった。正直、空気だった。出てきた意味がなかった気がする。てか噛ませ犬？

そして主人公、銀時は三人娘にボッコボコにされた。

「ってーことがあったんだよ。全く、何でウチには碌でもない依頼しかこねーのかねえ」

銀時はとあるタバコ屋の前にいた。

銀時の行きつけ「タバコのマダオ」ありとあらゆる種類のタバコを扱い、この辺の喫煙者の間ではちよつと有名な店である。尚、土方もこの店の常連である。

「銀さんも大変だねえ」

店主、長谷川泰三がサングラスをかけたままにこやかに笑っていた。

「あ、ところで長谷川さん、例の情報ってどうなった？」

「ああ、あれかい？ちよつと待ってね。おーい、ヴィータちゃん——」

長谷川が店の奥に顔を引つ込めると「はい」という愛らしい声が。

しばらくしてやって来たのはオレンジ色の髪を三つ編みにした少女が大きな封筒を持って現れた。

「あ、銀時じゃねーか。ほら」

タバコのマダオ唯一の従業員・看板娘、ヴィータがぞんざいに手にした封筒を銀時に向かって投げ捨てた。

「おイイイツ!？」

「ちょ、ヴィータちゃん!? 情報は丁寧に扱ってよオオツ!」

実はこの小さなタバコ屋、裏の顔は「情報屋」。ありとあらゆる情報を扱っている。マダオのくせに生意気な設定だ。

「あ、そーだ銀時」

「んア何だ？」

「今回のお前の出番、ここまでだって」

「なんじゃそりゃアアア!？」

＋＋＋

聖王教会に設置されてる、聖王教会が経営する小さな保育園。シヤマルはそこでバイトをしていた。

「シャルせんせ、またね〜」

「はい、またね〜」

小さな女の子がシャルに手を振り、母親に手をとられながら去っていった。

「さて」

園内を見回す。粗方の園児達は帰っていったのだが…

「ぶうイーん、ぶうオーん！」

部屋の隅、おもちゃの飛行機で遊ぶ男の子が1人。

最近ここに入園してきた男の子。シャルは今日始めて出会った。確か、父子家庭で父親は遅くまで働いているとかで迎えには20時を過ぎないと来ないらしい。ちらりと時計を見ると、まだ五時になっていない。

「えつと名前は…」

その子の名前を思い出しながら近づこうとした時――

それは風だった。

一陣の疾風がシャルの“股下”を駆け抜けていく。

ふわりとシャルが履いていたスカートが舞い上がり、中にあった翡翠色のショーツが飛び込んできた――俺の目に。

「きゃああ!?! ふえ? あ…十四郎さん!?!」

シャルルの目の前には、黒い髪に瞳孔開き気味の目の男——土方十四郎が立っていた。鼻血を垂らしながら。

「ナイスパンツ」

パチイイイン！

「もう、知りません！」

顔を耳まで赤くさせたシャルルはプンスカと小さな怒りを顔にさせていた。

スカートを捲つたのは土方ではなく男の子——サスケくんだったのだが、そこは乙女。咄嗟のこととはいえ目の前にいた土方をビンタ。サスケと遊ぶシャルルの横には頬を赤く腫らせた土方。

なんだこの“いちご”な役得野郎

「にしても……」

シャルルと遊ぶサスケを見ながら土方は思う。

（あのガキや、シャルルのスカートを————だー！何くだんねエこと考えてんだ俺は）

頭を掻きながら部屋を出る土方。

「あ……」

部屋を去っていく土方に目をやりながら小さく声を洩らす。
サスケはそんなシャマルの顔を見上げてスカートの裾をぎゅっと握った。

土方が園内の外に出てタバコを吸っていると、こちらに向かって一人の女が走ってくる。

その修道服に身を包んだ風貌から聖王教会のシスターであろう。近づくにつれて半袖の修道服と水色の髪が見えてくる。

（あれは確か…）

聖王教会に度々訪れる土方は何人かのシスターとは面識があった。彼女もその一人である。そんなことを考えていると、彼女が声を掛けてきた。

「あ、土方さん！ シャマルは中にいるか？」

水色の髪のシスター——セインは慌ただしく土方に詰め寄る。

「あ、ああ」

「ありがとう！」

その勢いに押されて頷くことしか出来ず、園内に駆け込んでいくセインの背中をぼんやりと眺めていた。

「どうしたんだ…？」

土方が首を捻っているとセインが入って行った園内から、シャマル

とセインが飛び出し、土方の下まで駆け寄ってくる。セインはサスケを抱いている。

「と、十四郎さん！　お願いがあります！」

＋＋＋

「いいから車を出せって行っただろ！」

土方が声を荒げる。

「む、無理ですよ副長！　そんな、子供１人の為に車を出すだなんて……」

山崎退が泣きそうな顔でおろおろとしていた。

セインが抱いている子供――サスケの父親が仕事場である建築現場で事故に遇い、病院に運び込まれたらしい。

ひどい重傷で命に関わる、だから病院に連れていけ……とのことなのだが

「公務以外で赤色灯を点けて走るなんて出来ませんよ」

「わーッてるよんなこたア！　始末書なら俺が書く、だから山崎、頼む……」

鬼の副長と呼ばれる土方が頭を下げて懇願する姿に、山崎は狼狽することしか出来ない。

「山崎！　齒ア食い縛れッ！」

不意に男が山崎を殴り飛ばす。

隆々とした肉体に顎髭

真撰組・局長、近藤勲（カリムをストーキングして聖王教会に居た）である。

「トシ、話は聞かせてもらった。……なあ山崎、俺達真撰組は人を助けるのが仕事だ。確かに俺らはドンパチする位しか取柄がないかもしれない。けどな、それ以外でも…血を流さず、誰かを救うってことが出来るんじゃないのか？ この坊主の父ちゃんの生死が関わっているのなら、これ以上に大事な“公務”が他にあるっていうのか？ いいか、山崎。俺はそんなことで始末書を書かせたり叱るつもりなんて微塵もない。叱るとしたら、差し伸ばされた救いの手を払い除けた時だ。……まあ、何にせよ局長である俺がやれば問題はないだろう。さ、シャルさんにセインさんも乗りなさい」

近藤は自分が乗ってきたパトカーにシャルらに乗せる。

「近藤さん、すまねエ」

「そんな顔するんじゃないトシ。お前もとつと乗れ。みんな、シートベルトはしめたな！全速力で行くぞ！」

エンジンが唸りをあげると、赤色灯が光り、サイレンを鳴らして走りだすと瞬く間にパトカーは小さくなっていった。

「局長……」

殴られた頬に手を当てて、山崎は近藤の言葉を思い出しながら呟く

「カリムさんのストーキングって私用でパトカーを乗り回すのも“公務”なんですか…？」

尚、土方と山崎の二人は、先日起きた「ふんどし紳士事件」の事後処理の為にやって来ていた。

＋＋＋

数日後、聖王教会敷地内

木漏れ日の下、ベンチに座る土方とシャマル。

彼らの前にある芝生で山崎、セイン、サスケが三人でミントンをしているのを二人は眺めていた。

「何にせよ、大事がなくてよかったな」

「はい。…十四郎さん、本当にありがとうございます」

土方らが駆け付けてからサスケの父は衰弱していた心拍数が上昇し、一命を取り留めたという。

暫らくは安静が必要とのことだが、順調に回復に向かっているらしい。

「礼なら近藤さんに言ってくれ。俺は何もしちゃいない…何も出来なかった」

「そんなことはありません！十四郎さんは、十四郎さんは私たちの為に必死に頭を下げてくれたじゃないですか！…だから、そんな事は

言わないでください」

「シャル……」

シャルが立ち上がり土方の前へ出る。

「十四郎さん……」

その顔はどこか泣きそうな、けど嬉しそうな顔――

それは風だった。

一陣の疾風がシャルの“股下”を駆け抜けていく。

ふわりとシャルが履いていたスカートが舞い上がり、中にある純白のショーツ頭にさせる。

「ナイスパンツ」

鼻血を垂らしながらシャルにサムズアップする土方。

「きゃああアッ!？」

パチイイインッ!!

嵐（後書き）

嵐と銘打ちながらもまだ見ぬヴォルケンリッター、シゲナムとザフイーラ

セイン以外にもナンバーズは登場するのか！？

次回「魔導師は銀色の夢をみるか？」

帝都^{アイカム}の街に舞い降りるリリカルは、天使の慈悲か悪魔の破滅か

魔導師は銀色の夢をみるか？

雷が鳴り響く。

海鳴の空を黒く厚い雲が覆い尽くしていた。

ゴウウ　ゴウウ

魔界の獣の呻き声の様な轟音。

雲を光らせる紫色の閃光。地面へと落ちていく雷が浮かび上がらせたのは、四つの影。

両手に拳銃を握るツィテールの少女、リボンを着けたロングヘアの女性、自分の身長程もある大剣を担いだ男、ショートヘアにハチマキを巻いた少女。

「ここは…？」

ツィテールの少女が辺りを見回す。彼女達の知らぬ街の姿に困惑の色を見せる。

「……ダメ、通信ができないわ。スバル、そっちは？」

「こっちもダメだよギン姉」

ロングヘアの女の質問にショートヘアの少女がため息をつきながらぶりを振る。

「……ここは——」

大剣の男は困惑というよりも驚きが混じる視線を街に向ける。
三人の少女と違い、まるで何かを“知っているような”そんな視線

を――

＋＋＋

同時刻、坂田探偵事務所内

「ぬうオオオウツ！！」

坂田銀時がトイレの個室で唸っていた。
ガリガリ君が8連チャンで当たりが出たが為にトイレと仲良くなっている。

「銀時、煩い」

こめかみに青筋を立てるフェイト。

「だから二つ目の当たりが出た時に止めとけばって言ったのに」

「バカヤロー！男には限界に挑戦しないといけない時があるうおおおオオツ！？」

「はあ……」

ため息をつけば、フェイトは書き終わった報告書をまとめ、止め帰り支度を勧めていく。

「それじゃあ銀時、私は帰るから」

「おおう、お疲れえエエツ!？」

「うん、また明日」

短い挨拶を交わし、フェイトはポールハンガーに掛けていた自分の黒いジャケットを羽織ると事務所を後にしていく。

（家に帰るためとはいえ、この裏路地を通るのには慣れないな）

フェイトは家路を歩む。

暗くなると不気味になる裏路地、ここを突っ切らなければハラウオン邸には帰れない。

いつも薄気味悪い場所なのだが、今日は特に一層不気味に感じる。空を黒い雲がベールをつくり、紫色の雷が止むことなく地上へと落下する。

——そう言えば最近、奇妙な噂が街を賑わせているのを思い出した。

“日が落ち、暗くなると『鉄の犬』が血を求めて彷徨う”
ただの噂……だが、今思い出す話じゃなかった。

「早く帰ろう」

自分に言い聞かせるように呟くと小走りで駆け出す。
グルウ……

聞き間違え? いや、あれはきつと雷だ。

フェイトは振り返らずに歩める足のスピードを上げる。

グルル……

獣の唸り声。空からじゃない……

後ろでもない……――

グルルルウウ

前方――それは犬と呼ぶには凶々しく、狼と呼ぶには荒々しい。黒光りする刺が全身を隙間なく覆いつくしている。

鉄の塊のような大きな、大きな犬の怪物。

赤い双眼は爛々と不気味に輝き、耳まで裂けた口は炎のように赤い。

「ひい……」

フェイトが小さく悲鳴を漏らしながら後退りするものの、足がもたつき後ろに転んでしまう。

「え……な、なんで……」

噂じゃ？ 怪物？

なんで……？

怪物がフェイトに向かいゆっくりと近づく。

丸太のように太い前脚を振り上げ、ナイフの如く鋭利な爪――

「きゃああああッ!？」

ドンッ

グウオオオオウツ

ザシュ……

「大丈夫か、アンタ？」

フェイトは不意に聞こえた若い男の声に恐怖で閉じた目を開く。

怪物はの前脚は左右共に欠損し、地面に伏せる。

その脳天には大剣が突き刺さっていた。

その剣を手にするのは、10代後半位の年若い男。

ツンツンに尖ったゴールドアッシュの髪、三白眼の瞳。

一番目につくのは服装……一言で言い表わすなら所謂、暴走族が着るような白い特攻服。ロングコートのように裾の長い上着を素肌の上に羽織り、腹にはサラシ。

それだけなら暴走族なのだが、手足には不釣り合いな西洋の騎士のカントレットグリーブ様な手甲と臍当靴が。

「シューゴ!？」

「大丈夫だスバル!それよりこの人を」

「うん」

“空から”ハチマキを巻いたショートヘアの少女とロングヘアの少女が光る道をローラーブーツで滑ってくる。

「ティア、サポートありがとな」

フェイトが後ろを見るとオレンジの髪をツィテールにした少女が銃を構えて立っていた。

こうしてフェイトとスバル、ティアナ、シューゴ、ギンガは出会ったのである。

魔導師は銀色の夢をみるか？（後書き）

突然のシリアス展開

特異な風貌とは言え、オリキャラの説明が長いにしても、前回に引き続いて銀時の出番が……

次回「ヤンキーくんと委員長ちゃん」

ギンガ、活躍の予感か？

ヤンキーさんと委員長ちゃん

「大丈夫ですか？」

ティアナがフェイトに近づくと、跪いて手を差し伸べる。
恐る恐る伸ばされた手を取るとゆっくりと立ち上がらせた。

「あ、貴方は…！？」

暗闇で確認出来なかったフェイトの顔が近付き、ティアナは驚きの声をあげる。

「ふえ、フェイトさん！？」

「なんで私の名前を——ッ！？」

不意に怪物がいた方が光りだした。
空に浮かぶ道の上に居る髪の毛の長い少女の周りに“光の魔法陣”が展開。

巨大な怪物を光が包み込む。

怪物は段々と小さくなり、痩せ細った犬と手の平程の小さな赤い球へ変わっていった。

「やっぱり。……この世界でも“レリック”が出るわけね」

「何かわかったのかギンガさん？」

「これ——ロストロギアよ」

ギンガは手の中の赤い球をスバルとシューゴに見せる。

『その宝、時に“力”を与え、時に“怪物”を生み出す…無限の刻の海を越えて彷徨う宝具』

そう伝えられる超高度魔法技術でつくられた時空を彷徨う“遺物”

故にロストロギア

そしてロストロギアによって怪物となってしまったものを“レリック”と呼ぶ。

「……六課には連絡はとれないし、ギン姉どうする？」

「とりあえず……」

ティアナに支えられたフェイトに視線をやりつつ。

「この“世界”の現地民の方が何で狙われたか探る必要があるかもしれないわね」

「…何で貴方、私の名前を知っているの…！？ それにあの怪物…、消えたと思ったら光出して——」

「お、落ち着いてください!？」

フェイトがティアナを突き放し信じられない眼で目の前の四人を見る。

その時だった。

フェイトの胸元辺り微かではあるが、金色の光を放ちはじめた。

「え？」

フェイトは急いでソレ——首にかけていた金三角のペンダント

を外に出す。

「……バルディッシュ——いや、“バルディッシュの形をした『魔法具』”？」

直ぐ傍にいるティアナが光り輝くペンダントを見ながら呟く。

光る道——ウイングロードからその光を見つめるスバルとギンガ。大剣を“鍵”にしたシューゴがティアナに近付く。

「まさか、さっきのレリックはコイツを狙ったのか？」

ティアナとシューゴは顔を見合せ首を傾げる。

「貴方たち、コレを知ってるの？」

一番驚いているのはフェイトだった。

他人は知るはずのない“コレ”を
アイカム
帝都と深く関わりのあるコレを

「貴方たち、——何者なの!？」

フェイトの何度目かの同じ質問

「……驚かずに聞いてもらえないでしょうか、私たちは——」

ギンガが代表して口を開いた。

「ふいー一時はどうなるかと思っただぜ」

トイレから出てきた銀時。

顔はやつれ、別人のようである。

プルプル震えながらゆっくりとソファーに腰をおろす姿は老人を彷彿させた。

「銀時！」

先程帰ったはずのフェイトが慌てながら事務所に入ってくる。

「どうした？ 忘れ物か？」

「そうじゃない！…ねえ、銀時——魔法って信じる？」

「は？」

フェイトの顔は真剣である。しかし銀時はやつれた顔のまま、突然の質問に目を丸くさせた。

「あ、入ってきても大丈夫よ」

彼女の言葉に、銀時にはコスプレの衣装を着た集団にも見えないことのない四人——ギンガ、スバル、シューゴ、ティアナが入ってきた。

「何こいつら？コスプレ軍団？」

「コスプレじゃねーよ！？」

「いや、どー見てもBLEACHの一護なヤツに否定されても…あ、それとも爆音小僧のマー坊か？」

否定したシューゴを怪訝そうな目付きで見る銀時。

確かにシューゴは髪型とか格好がパツと見、一護に見えないこともない。

「だー！一護でも族でもねエっ!？」

「シューゴ何言ってるの？」

「……何でもねエ。……てかこの世界にもジャンプとマガジンがあるのかよ……」

頭を抱えるシューゴを余所にギンガは先程フェイトにした説明を銀時にする。

フェイト曰く「頼りになるかどうかは分からないけど、何かやってくれる男」に――

「成る程、…異世界から来た魔導師ね」

ソファ―に座る銀時。

腕を組み、目を閉じる。

「って、信じられるかアアアアッ!! 中二なの? ねエ、中二なの!? 仮に魔法使えたとして三人は魔法少女だとして――おまえ! トップクのおまえ! 何? 魔法ヤンキー!? 魔法ヤンキーリリカルゾッキー? 意味わかんねーよ! 訳わかんねーよ! 佐木飛郎斗先

生も消化できねーよッ!？」

トツプク。特攻服の略。

他にマトイとも呼ばれる。

「これはトツプクじゃねエ!! はー、格好があれだつてなら」

ため息つきつつ、バリアジャケットから茶色い制服姿に変わる。

しかし、その姿は襟元は開襟し、ジャケットはボタンを止めず。ワイシャツの裾は外に出ているという“制服を着くずヤンチャな高校生”そのものであった。

「一瞬で変わった…いやいや、いやいや、信じないからね! 銀さんそんなの信じないからね! どーせトリックだろトリックうう! ? ぬうおおまた波がきたーッ! ?」

腹を押さえて悶絶する銀時。

まだ治ってなかったのかと呆れるフェイトを余所に、四人は銀時の悲鳴にキョトンとする。

「あ、あの…お腹痛いんですか？」

「そーだよ、見りゃわかんذار! お腹がディープリンパクトだよ!」

「それなら」

ギンガはトイレに駆け込もうとする銀時に歩み寄って跪き、手を銀時の腹部にあてがうと光の魔法陣が展開した。

「応急措置ですので完治はしませんが…」

「…お、おおオツ！！痛みが！ディープリンパクトが…消えた！！
すげエ、回復魔法すげエ！何今のホイミ？」

「あの、これで私達が魔導師であるって信じてもらいましたでしょうか」

「っ！か信じるしかねーようだな、えーと…」

「失礼しました。私は時空管理局・機動六課ホークアイ分隊所属、
ギンガ・ナカジマ陸曹です」

姿勢をただし、柔和な笑みを浮かべて銀時を見る。

「時空管理局？機動六課ア？お前ら全員が？」

「私とティアはスターズ分隊に所属してますけど…あ、同じく機動
六課スターズ分隊所属、スバル・ナカジマ二等陸士です」

「同じく機動六課スターズ分隊所属、ティアナ・ランスター二等陸
士です」

スバルとティアナが銀時に向かい敬礼する。

挨拶をしないシューゴに対してティアナが脇腹を肘で突き

「機動六課ホークアイ分隊所属、村菜シューゴ二等陸士であります
……っか、お前らもいい加減バリアジャケット脱げよ…」

面倒くさそうに挨拶を済ませるとバリアジャケットをまだ装着して

る三人に対して促した。

シューゴの言葉を受けて、三人もバリアジャケットを解除し、一瞬のうちに茶色の制服姿となった。こちらはパンツルックのシューゴと違い女性らしいスカートを履いている。尚、着くずしている者はいない

「それで私達、坂田さんにお願いがあつて来たんです」

スバルが拳を握り締めて語りだした。

「お願い？」

「はい！探偵の坂田さんに是非、この街の界隈にいる“呪宝具”を持つてる方を探して欲しいんです！」

銀時はフェイトを見やるとフェイトは先程光っていた金三角を銀時に見せる。

「お前、それは——」

ヤンキーちゃんと委員長ちゃん（後書き）

この作品でのレリックの呼称が怪物なのは同名の怪物映画からというのに気付く人はいないだろう…

次辺り『霸王』を絡ませたいな（願望）

次回「呪宝具」

オリジナル要素はさっさと説明するに限るとスバルは言う

呪宝具

「これは『バルディツシュ』と呼ばれる…私が子供の頃に死んだ母から譲り受けた御守り」

フェイトが悲しそうな表情を浮かべた。幼少の頃母と死別し天涯孤独の身となった彼女はハラウオン家に引き取られた過去を持つ。

「これが何なのか、前に気になって調べてみたことがあるんだけど…結局、この街に伝わる御伽話に出てくるものを型どったアクセサリー位しか分からなかった——その時は」

しかし、今日突然に光りだした。

「フェイト、おとき話ってのはまさか…」

「うん。“帝都大戦”だよ銀時」

「“帝都大戦”？」

シューゴらが首を傾げた。

銀時の話によると、この街に住む者なら誰もが知ってる「悪い陰陽師に帝都^{アイカム}がブツ潰されようとした時に、正義の陰陽師が退治して平和にした」というものだという。

「えーっと、雷を呼ぶ印に光を放つ玉、あと魔法の本だから悪の陰陽師を——まさか」

「うん。その中の雷を呼ぶ印…“旧神の印”『金色の半月角』が…」

「このトライフォース擬きが？…いやいや、たまたまだって偶然だって。これを持ってたからって怪物に——」

「偶然ではないかも知れません」

銀時の言葉を遮ったのは意外にもティアナだった。

「フェイトさんが持つ『バルディッシュ』は微かな魔力を放ってますので魔法具であることは確かです。魔力がないこの世界では他の魔力を呼び寄せる呪宝具であるかと…」

「ンな厄介なもん捨てちまえ！」

「そりや無理な話やで銀ちゃん」

「だよなア、形見だもん——で、はやてええ！？ 何故いる！？」

突然乱入してきたのは神出鬼没の八神はやて嬢。

「散歩しとったら事務所の方に“光の道”が出来ててその道を歩くフェイトちゃんを見たから」

「現地民に見られてた…スーバールう！？」

この事務所に来るのに“ウイングロード使えばいいじゃん”と言った人物を睨むティアナ。基本、魔法がないと思われる世界で魔法を使用する際は現地民に目撃されないように配慮するというのが暗黙のルールである。

「暗くて天気も悪いからばれないかと……スミマセンデシタ」

「まア、話半分で聞いてたからあれやけど。魔法の本ならうちにもあるで」

「ホントかよ!？」

どう考えても胡散臭い。

「本当に本当や!八神家に代々伝わる、捨ててもいつのまにか手元に戻ってくる曰く付きの魔法の本、『夜天の書』が!」

「“帝都大戦”に出てくる“ネクロノミコン”『夜天の書』の名前と一緒に……」

「まア、ものは実物見てから疑ってや。——で、銀ちゃんこの人達は誰なん?」

「あとで説明する……つか、俺の車は四人までしか乗れないぞ。こんな大人数どうするんだ?」

「はやてちゃんに任し時♪銀ちゃん電話借りるで」

はやてはそう言うつと事務所に備わってる黒電話のダイヤルを回しはじめた。

「さて、はやてん家行く前に正露丸でも飲んどくか……あれ?どこにやったっけか?」

「銀時、正露丸は——」

そう言つて隣に移動する二人。どうやら隣は台所のようなのである。銀時らが姿が見えなくなり、スバルらはこそそこそと小声で会議を出した。

「にしても驚いた、まさかフェイトさんだけじゃなくてはやてさんもあるとは……やっぱりシューゴの言う通り“並行世界”の可能性があるみたいだね」

「てか、よく分かったわね……シューゴのくせに」

「最後の一言はどう云う意味だティア！？……なんでコイツはいつも突っ掛かってくるんだよ……とにかく、俺の出身が第98管理世界の地球つてのは知ってるよな？」

「ええ。確かシューゴは私とスバルの先祖に縁がある国に住んでいたのよね？」

ギンガの言葉に頷き言葉を続ける。

「ああ。日本っていう国なんだが、日本とこの世界は似ている。正確には明治から大正、昭和初期つて過去の日本の街並みって感じなんだけど」

「じゃあ、過去の世界なんじゃないの？」

「ソレがどうも違うみてエなんだ。街を走ってる車や、あの天パの会話の中に出てきたジャンプつて漫画は俺が生まれた時代の代物。時間と技術がバラバラ、街の名前は帝都だしな……」

見てきた街並みを思い出しながらシューゴは語る。初めてこの世界に降り立った時に目に入ってきた看板には「帝都警察」と書かれていた。

「シューゴ知ってるの？」

先ほどからスバルが目をクリックさせ興味津々といった様子で質問を投げ掛ける。

「帝都ってのはさっき言った明治や大正時代の首都の呼び名で、今は東京って呼ぶ。何より帝都をアーカムなんて呼ばないからな。…ま、決定打はあのフェイトさん達だけだな」

台所に立つフェイトと電話をするはやてに視線を向けた。

「そうね。はやてさんもいた…この先私達の知ってる人物に会うかもしれない。けれど“並行世界”である以上は——」

“並行世界”に存在する、その世界での“本人”——“同位体”と呼ばれている

「完全な他人、ってことですよねギンガさん？ スバル、なのはさんがいても驚かないですよ」

「わかってるよティア…さすがにははやてさんが出てきた時は名前呼びそうになっただけ…」

スバルの言葉にギンガが「確かに」と小声で賛同したことには誰も触れようとしなかった。

そうこうしてるうちに、正露丸を飲み終わった銀時らと、電話をし終わったはやてが戻って来た。

「銀ちゃん、シグナムが車出してくれるって」

「なら大丈夫か。一応、俺のミニも出すからお前ら好きな方に乗れ」
スバルが銀時を見ながら手を上げた。

「あの、好きな方って何か違いとかあるんですか？」

「いい質問だなショートカット。銀さんの車はミニクーパーで、はやてんとこの車の運転手は巨乳メイドのシグナムだ」

胸を張って質問に答える銀時。違い以前の適当な答えだったがそんなことよりも……

「……………間違いなく此处は“並行世界”のようね」

「ああ。…シグナム副隊長がメイドって…」

「……………ある意味、見ものよ」

自分達の世界ではライトニング分隊の副隊長として剣を振り、自分達を指導してくれているシグナム。

そんなシグナムがメイドと聞いて、ティアナ、シューゴ、ギンガは啞然とするしか出来なかった。

「で、銀ちゃんこの子らは誰なん？」

呪宝具（後書き）

シャマル↓保母さん

ヴィータ↓タバコ屋の看板娘

と続いてシグナムのジョブはまさかのメイド。

『霸王』…絶対に出してやる！そのうち。

次回「本とメイド」

なのはが空気だとか、言うてはいけない…

本とメイド

低く唸るエンジン音。

翠屋の前に大きな箱型の黒い車——ハマーH2が停車した。

因みに、ハマーは軍用車ハンヴィーの民間モデル。かなりゴツイ。

「な、何？ 軍隊！？」

窓から見える異様な威圧感を放つ車——自家用車にはまるで見えな
いに、なのはは驚いた。そして更に驚く。

運転席から降りてきたのは、所謂ヴィクトリアンメイドと呼ばれる
質素なロングスカートのメイド服。

足元には茶色のブーツ。

ピンクブロンドのポニーテールにフリル付きのカチューシャを身に
つけた長身の女性…はやての専属メイド、シグナムだ。

「シグナムさん！？」

なのはも見知った人物。

はやてのメイドであるのは知っているが、その格好といいゴツイ車
といい喫茶店の前には異質である。

例えるなら、和食にコーヒーといった組み合わせ。

しかし…和食にコーヒーは意外とイケる組み合わせなんだよね。そ
う思うと、ウチの前に停まってる車とメイドの組み合わせも有り？
なんてことを考えていたら、階段を降りてくる人が見えた。

「銀さん…にあの人たちは誰だろう？」

上からぞろぞろとやってきたのは、よく知る人物（銀時、フェイト、

はやて」と見知らぬ人物（ミッドチルダ勢）達。

いてもたってもいられなくなり、なのはは店の外へと出ていった。

＋＋＋

「それじゃあ、俺の方はフェイトと魔導師姉妹担当な」

銀時の愛車、銀色のミニクーパにフェイト、スバル、ギンガが乗り込む。

「わかりました、はやてお嬢様とその他に白い悪魔もこちらですね」

「白い悪魔？ガンダムでも乗せる気か？」

銀時が首を傾げつつ、ハンマーを見ている。

「銀ちゃんに話は聞いたで。シューゴ君にティアナちゃん、ここでは私が引率の先生や。質問あったら何でも聞いてな」

「先生、おやつは何百円までツスカ？」

「300円まででシューゴ君！ちなみにバナナはおやつに入らんから注意せなあかんよ」

「…スバル以上に馴染んでんじゃないわよ、アンタは」

すっかり打ち解けたはやてとシューゴ。それにティアナが後部座席へと乗り込む。

「あのヤンチャくん、はやてのボケに食い付きやがった！そーいうキャラだったの！？」と銀時が驚いていると、助手席にちゃっかり

と座るなのはの姿が。

「おいしいイイツ!? そこの三半規官が絶望的なヤツうう!?」

叫ぶ銀時を余所に、なのはは親指をグツと立て「私、やるわ! やつてみせる! この戦い、必ず乗り越えてみせる!」といった決意の表情で窓越しの銀時を見る。

その姿、正に戦場に赴く歴戦の戦士のそれ……

彼女こそが、“エース・オブ・エース”

乗り物酔いの女王、高町なのは。

「シグナム…大変だと思うけど、あのバカのこと頼んだぞ」

「わかりました。酔い止めの薬もありますので、しこたま飲ませときます。それでは、私の後ろに着いてきて下さい」

ペコリと頭を下げ、ハンマーに乗り込むシグナム。

それを見やると銀時も急いでミニクーパに乗車した。

＋＋＋

「なアな、シューゴ君はどない人が好みなん?」

「は、はやてさん…。あ、あの——当たってるのですが…」

赤面するシューゴ。それもそのはず、隣に座るはやての胸がシューゴの腕に押し当てられていた。

「もーシューゴ君たら。……当たてんのや」

シューゴの狼狽する様を見ながら、イタズラっ子な笑みを浮かべるはやて。今作のはやてはイタズラっ子属性を持ち合わせていた。そんな様を真後ろの特等席で面白くなさそうに見る人物はというと……

「あ、あのティアさん…当たってるんですけど……」

青くなるシューゴ。

それもそのはず、後ろに座るティアナがクロスミラージュの銃口を頭に押し当てていた。

「当ててんのよ——外さないように」

邪悪な笑みを浮かべるティアナ。

気のせいかな奇妙なチャージ音も聞こえてくる。

天国と地獄を一遍に味わうシューゴは心の中で泣いていた。

賑やかな後ろの様子を気にすることなく悠々と運転するシグナム。

横に目をやると、助手席に座ったのはが白い顔をしながらカタカタと小刻みに震えていた。

ダッシュボードの上には空になった大量の酔い止めの薬の箱。

「……………」

見なかったことにして運転に集中。

用法容量は守って使用しよう。

よい子とシグナムお姐さんとの約束だ

八神邸。

人気のない山の中腹に建てられた白い大きな洋館。

その巨大さからさながら城のようにも見える。

フェイト曰く「ゾンビが出てくるゲームの舞台になった洋館に環境がそっくり」らしい。

見た目に違わぬ絢爛豪華な内部。

「…全く、絵に描いたみたいなお邸だな…ズズッ」

紅茶（砂糖水仕様）を飲みながら銀時は誰に言うでもなく呟く。

広間に通された銀時ら一行。

柔らかなソファーや豪華な椅子に座り、件の本を取りにいったはやてを待っていた。

その間、客人に対して甲斐甲斐しく世話をするメイド・シグナムを見ながら啞然とするミッドチルダ勢。

改めて見ると破壊力が凄まじい

「…本物のメイドみたい」

「そうね。夢かしら？スバルちよつと頼った叩いてもいいかな？」

「ギン姉！グーはダメだよグーは！ちよつ、シューゴ、ヘル、ヘルペスミー！？」

「それを言うならヘルプミーな。……シグナム副隊長もだけど、なのはさんも凄いことになってんな…」

スバルの救援を華麗にスルーしたシューゴは、目の前で真っ白になっているのはをぼんやりと眺めていた。

「お前ら、フェイトだけじゃなくてコレ（なのは）やアレ（シグナム）も知ってたのか」

「え、あ…はい。正確にはよく似た他人ですが」

銀時の質問に答えるティアナ。

その横ではギンガが「あらあら、うふふ」と言いながら爽やかな笑みでスバルをしばいている。

「なんでギンガちゃんがスバルちゃんをどついてんねん!？」

本を小脇に抱えて現れたはやてが怪訝そうな顔でナカジマ姉妹を見やる。

「大丈夫だよはやて、多分ちょっと錯乱してるだけだと思うから…」

苦笑するフェイト。ティアナとシューゴに至っては頭を下げてはやてに謝っている

「そ、そうか…まあ二人のことは見なかったことにしてコレが噂の八神家に代々伝わる“ネクロノミコン”こと『夜天の書』や!」
黒い皮張りの分厚い本。それだけなら古びてはいるが普通の本。だが、特筆すべきは鎖が何重にも巻かれているのである。

「なんだコリヤ？鎖に巻かれて？プレイチュ——なぎゃ!？」

「銀時、黙ってようね」

フェイトが銀時に裏拳をかまし黙らせる。

シューゴ・ティアナ（こ、こっちのフェイトさん恐エエッ!？）

「何でこないグルグル巻きにされてるか、私も知らんのやけど。まあ、オシヤレ感覚？もつとシルバー巻くとかさ的な」

どこの遊戯王!？と本来なら突っ込むはずの人間がフェイトの手により撃沈しているので、言ってみたもののなんだか淋しいはやてであつた。

「ちよつと見せて貰つてもよろしいですか？」

スバルを解放したギンガがはやてに歩み寄る。

「構わへんよ。…てか、スバルちゃん大丈夫なん？」

「ええ、戦闘機人ですからこの位じゃ死にません」

にこやかな笑みを浮かべ、ギンガは『夜天の書』を受け取ると真剣な表情になり。

「……やっぱり。微かだけど魔力を感じるわ」

フェイトが持つ『バルディッシュ』同様に魔力を放つ異物、呪宝具。

「フェイトさん、『バルディッシュ』を出して貰つてもよろしいでしょうか」

「うん。——!？」

ギンガに言われるまま、首にかけている『バルディッシュ』を外に出すと、フェイトを表情を強ばらせた。

『バルディッシュ』が淡い光を放ち輝いているのである。

「呪宝具同士の共鳴？」

輝きは徐々に強くなっていく『バルディッシュ』を見下ろしティアナは呟く。だが、何かが“おかしい”。

『夜天の書』を見てみるが光ってはいない。

「———どうやらお客さんが来たらしいぞ」

異変に気付いたのは目を覚ました銀時だった。

光が強まるのと同時に、部屋が微かに“揺れている”。

「ッ！？ ティア、スバルを叩き起こせ！ギンガさんは皆の避難！早く！」

シューゴが窓を開けて外へと飛び出す。

それに続く銀時とシグナム。

「……おいおい、魔法使いの次は化け物って何でもありかよ……」

銀時は暗闇に浮かぶソレを見上げる。

ゴウゴウと赤く燃え盛る炎で出来た、5メートル程の巨大な猫の化け物。

「リボン頭ギンガに殴られるんのは勘弁だけど夢であってほしいぞ、おい」

本とメイド（後書き）

暴走してるのはギンガじゃなくて作者です。

新婚な土方シヤマルな話とか書いたりしたとしても生温かく見守って下さい

次回「この子何処の子、知らない子」

なのはやはり、空気なのかもしれない

この子何処の子、知らない子

「レリック…やっぱり出やがったか」

シューゴは炎の巨大猫と距離を取りつつ、ポケットから“鍵”を取り出しバリアジャケットを装着する。

鍵は身の丈程もある大剣型インテリジェントデバイス“ダインスレイヴ”に。

「アンタらもとっとと逃げろ！ コイツはオレ達が何とかする！」

ダインスレイヴを肩に担ぐようにしながら巨大猫へと突貫していく。

「あいつ、浮いてやがる…」

地面にふわりと浮かぶシューゴ。

彼の両足を包む、グリーヴの踝付近からは紫に輝く小さな光の羽——ホバーフィン——が生えていた。

是の魔法により、シューゴは重武装で在りながらも地面を滑って移動出来るのである。

「でやああああッ！」

巨大猫の胴体へと回り込みダインスレイヴを振り下ろす。だが、巨大猫は素早く身を翻しシグナムらへと襲いかかる。

「なッ！？ こっちに来やがったー！！」

逃げようとする銀時。それとは対照的に動こうとしないシグナム。

「おい、シグナム！」

炎の爪がシグナムに降り掛かる
だが……

「…紫電一閃」

スカートの中から短刀を取出し、瞬く間に爪を切り裂いた。

「「な、なんじゃそりゃアツ!?!」」

銀時とシューゴの驚きにあげた声が重なった。

シグナムの右手には逆手に握られた短い日本刀、左手には数本のクナイ。

「何、お前忍者なのツ？」

「いいえ、私は武装メイドです。あ、銀時様危ない」

「武装メイドって何ーッ アツー!?!」

抑揚のない声で銀時の名を呼ぶが時すでに遅し。

巨大猫の爪のなくなった前脚で銀時は殴られ壁に激突する。

「おとなしく…しやがれ！」

ダインスレイヴを巨大猫へと向けると、巨大猫の足元に魔法陣が展開。そこから光の鎖——チェーンバインド——が飛び出し、巨大猫を絡めとる。

「ナゴオオツ！！」

巨大猫は唸りをあげ身をよじる。炎が咆哮に同調するかのように激しさを増していく。

「おいシグナム、何か武器はねエのか！」

片手で頭を押さえつつ銀時は立ち上がりシグナムの方を向くと、細長い棒状のものが飛んできた。
よく見ると木刀。柄には「洞爺湖」と彫ってある。

「コラアア！ お前、これ武器ってか、完全に悪ノリで買った修学旅行のお土産だろオオ！！」

涙目の銀時を余所に、チャンスとばかりに巨大猫に斬り込んでいく
シューゴとシグナム。

「こうなりややけくそだ、往生せいやアアツ！！」

飛び上がった銀時は目の前にある巨大猫の眉間めがけ木刀を勢い良く振り下ろす。

巨大猫は一際大きな声で鳴き、地面に伏せてしまった。燃え盛っていた炎の勢いも徐々に弱々しくなっていく。

「どうやら終わったみたいね」

バリアジャケット姿のティアナとギンガだ。

スバルはなのは達の護衛に着いている。倒れている巨大猫「レリック」を確認すると、ギンガは直ぐ様に魔法陣を展開させてレリック

が取り組んだロストログアを封印した。

＋＋＋

碧銀の髪を二本の尾のように垂らした少女がモニターに映る映像を見ていた。

とある格闘の試合。肩までボサボサに伸びた髪の方が放った一撃により、対戦者は崩れ落ちる。

たったそれだけの5分にも満たない映像を少女は繰り返し繰り返し見ていた。

「…足先から練り上げた力を拳足から打ち出している…やはりこれは“断空”」

でも、何で“カイザーアーツ”の技を？彼は一体…？

少女——アインハルトは、モニターをじっと見る。

停止された画面の中に立つ男。

ゴールドアッシュの髪に三白眼気味の瞳をした精悍な顔と

そして『SHUGO MURAMATSU』と映し出されたテロップの名前をアインハルトは目に焼け付けていた。

この子何処の子、知らない子（後書き）

ついに登場したVividからの刺客、アインハルト・ストラトス！

次回「ドキッ 男だらけの宅飲み大会」

タイトルが既に出オチ

ドキッ 男だらけの宅飲み大会

「エライ目にあっただぜ、全く…」

レリックを倒した銀時達は、再び八神邸の広間へと戻ると今後のことについて話し合っていた。

お茶請けに出されたショートケーキを食べつつ、銀時は思案する。

呪宝具を持つフェイトとはやては、今後も化け物―レリック―に狙われるかもしれないらしい。はやての話が本当ならば呪宝具を手放すことは出来ない。

レリックが出たなら戦えばいいだけなのだが…
先程の様に武装メイドであるシグナムや俺でも“戦う”ことは出来た。

だが、どうしてもレリックが取り込んだロストログアの封印――『魔法』の存在が必要となる。

しかもその封印の魔法が使えるのはギンガだけという――

「まあ、んなことよりも一番の問題はお前達の寢床だよな」

色々と考えないといけない事はあるが一番はこれだろう。

「んー、ソレならウチに住んじやええんやないの？無駄に部屋余つとるし。私は全然構わへんよ」

そんなことなかったぜ！

一番の問題ははやての一言により解決した。

「それでは、はやてさんの言葉に甘えて…。はやてさん、お願いいたします」

年長者のギンガが代表して礼を述べる。

こうして、はやてとミッドチルダ勢との共同生活の幕が開けるのであった——かのように見えた……

「——って、ちょいちょいちょい！　いくら何でも女だらけの中に年頃の餓えた野郎を投げこんじゃまずいだろ！？　ツンデレ優等生に元気少女、先輩系お姉さん、関西弁悪戯ツ子お姉さんに巨乳メイドと一つ屋根の下でイチャイチャイチャイチャ……T O L O V E してもラブひなでもないんだぞ！　真中か！？　お前は真中なのかツ！！　…全く、羨ましいツ！！」

『え、えエエ！？　後半、妬んでるだけじゃんツツ！？』

銀時以外の全員が心の中で叫んだ。
まあ、確かに年頃の男女が共同生活するのもアレだしてことで血の涙を流した銀時の抗議によってシューゴは彼が預かることとなった。

＋＋＋

そして次の日

「えー、では新しい住居人であるシューゴくんの歓迎会をしたいと思いまーす」

歓迎会と称した飲み会が開かれることになった。

飲まなきゃやってらんねーつつーの！とは銀時の弁だ。

何でも本日、八神邸で「男子禁制。女の子だらけの歓迎会　おいでませ八神邸」というストロベリーイベントが絶賛開催中だという。気になるメンバーは…

なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、ギンガに加えてシグナム、シャマル、ヴィータ、更にカリム、セイン、本編未登場のデイドといったドリームチーム。

そりゃ飲まなきゃやってらんないわ。

まあ、残念ながら今回はストロベリーなドリームチームではなく薄汚いドリームチームの話。

あーん

時刻は零時過ぎ、犬の遠吠えが寝静まった海鳴に響き渡る。

お馴染み、翠屋二階。坂田探偵事務所の明かりはまだ灯ったままで。

部屋の蛍光灯が映し出したのは、缶ビール、缶チューハイ、洋酒、日本酒、ビールといった多種多様の酒、そして大量のつまみ類が、応接間のテーブルに並べられている。

「…シューゴはいいよ、主役（飲む為の言い訳）だもん」

缶ビール片手に銀時はテーブルを囲む面子を確認した。

居候であるシューゴ。

酒とつまみを持ってきた長谷川と近藤（案の定、カリムのストーキングをしていたがドリームチームにばこぼこにされて泣きながら玄関に立っていた）。

缶ビールを煽る土方、同じく日本酒をおちよこで飲む沖田。
そんな沖田に酒を注ぐ桂。
つまみを人数分の小皿に取り分けるエリザベスと山崎。

「……まア、ここまでは予想の範囲内だ」

彼女にはぶられたマヨ。

それを嘲笑う為にやってきた沖田。

そんな二人に連行された山崎。

銀時はこめかみを押さえつつも渋々納得する。

近藤がやって来た時点で金魚のフンが付いてくるのは予想していた。
ついでにロン毛バカが沸くことも。

はい、問題はコイツら！

悠々と酒を飲むフェイトの兄クロノとその親友ヴァイス（ロリコン）。

「呼んでねーよテメエらは！　つか何でこのタイミングうー！？」

「探偵、何だその口は。気に入らないのか？」

「気に入らないね！サラサラヘアーもお前の声も！……何か似てんだよ、声」

銀時とクロノが睨み合う。

クロノにとって最愛の妹フェイトが訳のわからない天パの探偵なんて怪しい職種のもとで働いているのが何よりも気に食わなかった。
時折フェイトに「やっぱり、クロノの声って銀時に似てる」なんて言われたりして兄として色々複雑な気分。

まあ、そんな経緯で二人は会々と喧嘩ばかり。
あれ？ポジシヨンマヨじゃねコレって？

「まあまあ、落ち着いて二人とも。今日は無礼講つてことで」

「無礼講つてかテメエはすでにブラブラじゃねーか！」

近藤（全裸）がハイボール片手にゴールデンボールを揺らして二人を宥めている。

その横では

「で、どうなの？俺好みなのはいるわけ？ タバコ屋のヴィータちゃんとかチンクちゃんみたいなさ〜」

ヴァイスが土方に酒を注ぎながら嬉々として尋ねていた。

というのも原始の姿になつてるゴリを除けばミッドチルダ勢を見ているのは、八神邸にシャマルを送っていた土方のみなのだ。

「黙れロリコン。未成年者略取の疑いでしょっぴくぞ。てかチンクつて誰だよ…」

瞳孔開き気味の目でヴァイスを睨み返す。

シャマルと飲めず（建前）にいるのがちょっと寂しく（建前）、虫の居所が悪い土方。完全に八つ当たりですどうも有り難うございました。

「うわッ、シロちゃん敵しい」

「シロちゃんって言うんじゃねエよッ！！」

その向かい。山崎は沖田に恋愛相談をしていた。

本当は土方にしたいのだが現在アレ（→）な状況なので仕方なく沖

田にしている。

その沖田の横でチーママの如くウンウン頷き話を聞く桂

「——そう言う訳で、今セインさんに告白しようか迷ってるんですが……沖田隊長どう思います？」

「告白云々は置いていて、なんで近藤さんといい、土方さんといいウチの隊のヤツらはこぞってシスター萌なヤツらばかりなんかねエ？」

「ほう。じゃあ、貴様はシスター萌じゃないと」

「よしてくだせエロン毛の旦那。俺、こー見えてもノーマルなんでてか旦那どつかで見たことあるよーな……」

「……隊長、この間金髪の女の子に首輪とリード付けて歩いてましたよね」

「あり、見られちゃったか。あ、ロン毛の旦那。これが今仕込んでる犬でさア」

懷から一枚の写真を見せる沖田。

山崎と桂は覗き込む。

そこに写っていたのは

つり目で金髪のセミロングヘアの女性。

しかし問題なのは——首には革で出来た赤い首輪、それに繋がる鎖。コレだけで既にアレなのだが極めつけはその少女は何も身につけておらず犬の——

「アウトオオオーツ!!」

写真を沖田からぶん獲りビリビリに破りながら桂は力の限り叫んだ。

「あり、アリサは気に入らなかったか。じゃあコッチのすずかは…
趣向を凝らして牛の——」

「どこがノーマル？ ねえ調教だよね？ もうエロゲの域だよね？」

桂は沖田の襟首を掴みガクガクと揺さ振る。

ダメだこの人。しかし、そう山崎のバベルの塔はほんのり硬くなっていたのは、また別の話。

「……なんなんだこの白いの？」

コーラの瓶を片手に物珍しそうにエリザベスを見ているのはシューゴだ。

「ああ、そいつはあそこのロン毛の相棒のエリザベスだよ」

シューゴの疑問に答えたのはマダオ・オブ・グラサン、長谷川。エリザベスからつまみが分けられた小皿を受け取りウィスキーでチビチビやっていた。

『宜しうな坊主』

「よ、宜しく…」

魔法が使えるシューゴが書き割りで挨拶されたのはさすがに生まれて初めての経験である。

「そういえば、あつちでも盛り上がってるみたいだけどさ、兄ちゃんは結局誰かと付き合ってるの？」

「ブフウウーッ！？ げほっごほっ…な、何だよオッサン急に！？ コーラ吹いたじゃねエか…」

長谷川のカウンターパンチに盛大に吹き出す。

シューゴはエリザベスと共にコーラを拭き長谷川をきつと睨んだ。

「お、その反応は脈ありか？ ハッハッハッ若いね。俺もハッと出会った時を思い出すなア」

『それは気になる話ですね』

「ったく、最後のコーラ無くなっちゃったじゃねーか。…うわっ、ノンアルコール全滅かよ」

「はあゝ」と溜め息を吐き立ち上がる。仕方ない、買ってくるか。

「ちよつと飲みもん買ってくる……て誰も聞いてないな」

出来上がり話に華を咲かせるマダオ（マジでダメな大人）達を背に、シューゴは坂田探偵事務所の外へと出ていった。

＋＋＋

「やべエ、そーいやこの『世界』の金持ってねーよ」

出てきたはいいが重大なことに気付く。そして店もわからないのに

適当に歩いてしまい路地裏へと来てしまっていた。
来た道を引き返そうとしたその時である。

ゴロゴロゴロ……

辺りに獣の唸り声に似た轟音。

それが聞こえたかと思うと闇夜に一筋の光が通った。

紫色の閃光——雷がシューゴの足元目がけて落ちてきたのだ。

「ッ!？」

咄嗟に目を背け顔を両手で覆う。

落雷の衝撃が地面を揺らがした気がした。

光が収まり顔をあげると目の前には——

「くっ……ここは? !？」

跪いていた少女が立ち上がると二つの尾のような髪がふわりと揺れる。

暗闇に浮かんだ瞳は、左右異なる光を宿す。その眼差しは真つすぐシューゴに向けられていた。

「貴方は、村菜シューゴ——!？」

半歩後ろに下がる腰を浅く落とし拳を構える。

自分の名を呼んだ少女の動きに迷いはなく、シューゴも警戒する。

「貴方にいくつか伺いたい事と確かめさせて頂きたい事が」

車のヘッドライトだろうか、路地裏に一瞬の光が差し込んだ。
光が浮かび上がらせたのは、碧銀色の髪。虹彩異色の瞳。

そして――

「テメエ……何者だ」

彼女が身につけているのは只の服ではなかった。
バリアジャケット。

「カイザーアーツ正統。ハイディ・E・S・インクヴァルト。……
『霸王』を名乗らせて頂いています」

ドキッ 男だらけの宅飲み大会（後書き）

何故女子を出さないのか？

コレをやリたかつたから。

そして女子回はやらない

だって今回以上にゲスになりそうだもの

次回「お兄ちゃんて呼ばないで」

次回も既に出オチな題名

お兄ちゃんて呼ばないで

霸王イングヴァルトとは、ベルカ戦乱期……諸王時代にオリヴィエ聖王女、冥府の炎王イクスヴェリア、竜眼の邪王ヴラディスラウスらと並ぶ英傑のことである。

そんな大層な名前を名乗っているとは知らない第98世界出身者のシューゴ。

彼は少女が身に纏うソレ——バリアジャケット——を確認すると、自分達と同じく“来訪者”なのではという思いが浮かんでいた。とにかく、訳もわからず喧嘩を吹っ掛けられた今はそれに対応しなくちゃいけない。

『霸王』を名乗る少女が地面を蹴り、シューゴに向かい拳を振るった。

飛んできた右ストレートを紙一重で避ける。

「ちッ…苦手何だよ！女とやるのはッ」

次々に繰り出される拳と蹴りの猛襲を捌き、避け、時には受ける一方で反撃を出そうとはしない。

「女だからと甘く見られては困ります——私は、列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です、だから！私は確かめたい！——強さを！」

迫りくる拳をバックステップで避け距離を取ると、少女は拳を打ち込むのをピタリと止める。

だが、終わった訳ではなかった

彼女の右手に魔力が収束し、まばゆい光を放ち出す。

「……ベルカつてなア、異世界に来てまで訳のわかんねーこと吐かしてんじゃねエ！」

光りだした右手の魔力に無手では防ぎきれないと感じ、瞬時にダインスレイヴを起動させ柄を握りしめ横に構えた。……どうやら本気でヤバいかもな。——仕方ねエけどやってやるよ！

そのまま地面を蹴り、お互いに距離を一気に縮める。

「弱い拳では……誰の事も守れないからツツ……！」

天に上げられた拳がシューゴ目がけ垂直に打ち下ろされる。対するシューゴも横薙ぎにダインスレイヴを振るった。

——！！

衝撃が轟く。

土煙の中に立つのは、二つ結びの髪を揺らした少女だった。

「はアはア……彼の一撃……」

横腹を押さえ倒れているシューゴを見下ろす。

凄い剣撃だった。

危なかった。

けれど、あの一撃は——

この体は間違いなく強いのに
私の心が弱いから

「武装形態……、解除……」

バリアジャケット解放と共に少女の姿が縮んでいく。

そこに現れたのは、あどけなさを残す12歳位の少女、アインハルト・ストラトスである。

いかついバリアジャケットとは打って変わり、白いブラウスに赤いリボンを巻き、深緑色のスカートといったSt・(ザンクト)ヒルデ魔法学院中等科の制服姿。

少女——アインハルトの小さな体から力が抜け、がくりと崩れ落ちる。

「だめ……こんな所で倒れたら……」

そこでアインハルトの意識は途絶えていった。

「……ふう」

地面に寝転んでいたシューゴはゆっくりと体を起こすと傍らのダーインスレイヴを鍵へと変えて握り締める。

「あいつら起きてるかな？」

デバイスの通信画面を空に浮かび上がらせティアナを呼び出す。…

…。出ないorz

なんか凄い嫌な予感がする。

念の為ナカジマ姉妹にも通信を入れるが応答はない。
仕方ない明日の朝また連絡するか。
頭を掻きながら再び溜め息を吐く。

「……にしても、弱いと誰も守れない、か」

横たわったアインハルトに目を向ける。

バリアジャケット装着時は自分と同じ位（シューゴはティアナと同じ年）か年上かと思ってたのに、その正体はどい見ても年下の少女。

「まだガキじゃねエか。……誰かを守る、か」

気絶したアインハルトの傍によると、彼女の小さな体を背負う。

「……軽いな」

アインハルトは見た目にそぐわず軽く、背負って歩くのは苦にならなかった。

＋＋＋

その頃、通信に出なかったミッドチルダ三人娘はというと――

「にやはははははは、このコーラ美味しいねティア、ギン姉」

スバルの手に握られているのはコーラとウォッカを割ったお酒の缶。
横には空になった同じ缶が山積み。

完全に出来上がったスバルは壁に話し掛けてはゲラゲラと楽しそうに笑っている。

「シューゴのバカあゝゝ！死んじゃえ！ 私なんか、私なんか…うエエえん、フェイトさアゝん、どう思いますか？」

同じく缶力クテルを大量に空にしたティアナが、顔を赤くしたフェイト（片手にもったワインボトルをラッパ飲み）に抱きつき、わんわんと泣く。

「ティアナ、良い事を教えてあげる。――襲え、そして食え」

悩む少女に助言をするフェイトの目は完全に据わっている。きつと反論したら死を見ることだろう。

「あらあら、何だか新しく来たお客様は私とキャラが被ってますわね」

「そんなことはありませんよ騎士カリム。私なんか貴方の足元に及ばない程に純粹ですから」

カリムとギンガが一升瓶を抱え、ニコニコしながらお互いの黒い腹を探りあっている。穏やかながら静かで恐ろしい戦いが八神邸で静かに繰り広げられていた。

ストロベリーっつーか地獄絵図だよ、コレ。

「なアな、銀ちゃんトコに電話してみーひん」

「ヒック。さすがアゝはやて。むっさい男共が羨むのは見て楽しむ

んだな。ヒック」

「おーし！はやて、やっちゃえやっちゃえ！」

「び、ヴィータちゃん！？　なんか黒いわよ！？」

「シャマル、ヴィータは元々こんな感じだっただろ。あ、デイド
済まないな酒を注いで貰って」

「構いませんよシグナムさん。私、お酒飲めませんので」

ヴィータとセイン、はやてがはしやぎながら坂田探偵事務所にダイ
ヤルを回す。

それを止めようとするシャマルを淡々とお猪口で日本酒を飲むシグ
ナムが嗜める。

デイドは下戸の為、酔っ払い達の世話を甲斐甲斐しくしているの
であつた。

＋＋＋

「……落ち着いて考えるべきだつた」

アインハルトを背負うシューゴは翠屋の上を見上げて呟いた。

そのまま放っておくのは人として間違つてるのはわかるよ。

けど、あの男の園に幼女（つーか中学生って幼女？）を連れ込んだ
ら何を言われるか……。寧ろ、何て言われるんだらうか！？

考えただけでも恐ろしい。

「マジ、どうしよう」

「…あれ？ シューゴくん？」

名前を呼ばれて振り返ると、茶色の髪をサイドポニーにした女性が。

「な、なのはさん！？ 何で？ 飲んでるはずじゃ！？」

「明日の仕込みがあるから一足早く帰って来たんだ。所でその子…」

怪訝そうにシューゴの顔を覗き込む。

「ち、違いますよ！そんなんじゃないんですよ！ この子は――」

経緯を説明するにしても何て言おう。

同じ『世界』からの“来訪者”だとしても連れて帰ってくる理由にはならないし

……！

「い、妹なんです。買い物をしに出かけたら、目の前に紫色の雷が落ちてきて。目を開けたらコイツが」

出だし声が上ずり怪しさ爆発。

「本当に？」

予想通り疑われる。それもそうだろう。

おろおろとしていたらアインハルトのスカートから何かが落ちた。

「何か落ちたよ」

なねはが落ちたもの——アインハルトの顔写真が入ったIDカードが手帳に入ったものを拾いあげる。

「身分証明書：学生証かな？」

手帳の表紙には校章。

その下には英文に似た文字で何か書かれているものの、なのはにはソレが何て書いてあるのか読めなかった。
しかし…

「ザンクトヒルデ魔法学院…」

横から覗き込んでいたシューゴが文字を読み上げた。

「え？」

「あ、いやソコに書かれてるんで」

なのはは思う。妹云々はウソにしろどうやら本当にシューゴ達と同じ世界からやってきたらしい。

「とにかく、私の家に行こうか。詳しい話はそこでしようか。それにシューゴくんも服ボロボロだし着替えないとね」

アインハルトを今は使われていないという部屋にあるベッドに寝かせるとなのはは「ちよつと待ってて」と一言残しどこかへ行ってしまった。

シューゴはぼんやりなのはが用意してくれた椅子に座りながら、ベ

ツドに眠る少女と手の中にある学生証を交互に眺める。

「アインハルト・ストラトス」

それが彼女の本名のようなのだ。

なんたらイングヴァルトってのは偽名だったらしい。

ミッドチルダにある魔法学院に通う一年生。学生証から分かったのは名前と所属以外に、もう一つ意外な事実が判明した。

「…まさか、“未来”から来たとは」

『新暦79年度』

発行された学生証の年。

シューゴ達がいたのは新暦75年。

“3年も先”からやってきた少女。

「……ん！？」

目を覚ましたアインハルトが見慣れぬ風景に跳ね起きた。

「よう、やっと起きたか」

「……あの、ここは……？」

目の前にシューゴがいると思わず、恥ずかしさに跳ね除けた布団を引き寄せる。

そうだ、あの後倒れてしまい…

「ここは知り合いの家。なあ…えーっとアインハルトでいいんだよね名前？　とりあえず俺も管理局員だから保護させてもらったぜ」

「はい…」

「で、心して聞いて貰いたいんだが…いいか？」

こくりと無言で頷く。

「あんな、実は…ここ、ミッドチルダじゃないんだよ」

「え…？ それじゃ、ここは！？」

予想していなかったシューゴの言葉に驚きを隠せないアインハルト。

「残念ながら管理外世界だ」

「そうですか…」

見知らぬ世界。その言葉に不安になり、表情が曇る。

「それと…追討ちをかけるようでアレなんだが——お前は何で俺のことを知っていたんだ？ 3年の間に何かあったとか？」

「へ？ さ、3年？ 意味が？」

「しまった」と呟き頬を掻く。…いきなり3年とか言われてもわかんねーよな…。

そういう訳で順を追ってここにいる村菜シューゴは新暦75年の村菜シューゴであることを説明していく。

「そうでしたか…。通りで」

シューゴに説明され、アインハルトは納得したような顔をする。

（雰囲気が違う…。髪も伸びてないし、何だか少し幼い）

「それじゃ、次はアインハルトの番だぜ。何で俺のことを知っていたんだ？」

「それは…。あの、村菜さんはカイザーアーツ霸王流をご存知でしょうか？」

「お前が使っていた技か？ いや、全然」

彼が嘘をついているようには見えない。

アインハルトは目を伏せ手元をじっと見つめる。

「何にせよ暫くは一緒にいることになるから、またあんなことは勘弁な」

「許して、貰えるのですか？」

信じられないといった目でシューゴを見上げると不意に、頭に手を置かれた。

その顔は不器用ながら何だか微笑んでいるように見える。

「今回だけだからな。……にしても…コレから本当にどーすつか…」

何やらブツブツと一人こちるシューゴの様子から彼が悩んでいるように見えた。

「あの、何か問題があるのですか…？」

「あ、いや。ここに連れてくるのに俺の妹って言ってしまっただけ。まあ、嘘だってバレてると思うんだけど絶対」

……。
ぎゅっと布団を小さな手で握り締める。

「お、お兄…ちゃん」

後半につれてどんどんボリュームが下がったが、確かに彼女はそう言った。文字に表すと上のようになる。まさにそんな感じ。

真っ赤な顔を伏せ、アインハルトは極力そう呼んだ人物の顔を見ようとほしない。

いや、恥ずかしくて見れない。

試しに呼んでみたが恥ずかし過ぎる。

ドサッ

「……………そうだったの」

シューゴとアインハルトは不意に聞こえてきた物音と声の方を向く。そこには、部屋の入り口で呆然と立つなのはがいた。

「ごめんねシューゴくん、疑っちゃってて。…そりゃちよつとは信じていなかった訳じゃないんだけど。…そっか…その子、生き別れの妹さんだったのね」

何か設定付け足されてるううう！？

「銀さん達まだ起きてるみたいだから私、知らせてくるね！」

「待つてエエ！お願いですから！後生ですからアアッ！？」

シューゴの悲痛な叫びも虚しく、なのはは制止を振り切り坂田探偵

事務所へ。

「銀さん聞いて！ シューゴくんの妹さんがこの世界に來たみたいなのッ！」

なのはは上がり込み、応接間のドアを開けると叫んだ。

「はい？」

銀時かというと、はやてからかかってきた電話に出ている最中であつた。

『はいいいイイツツ！！？』

坂田探偵事務所にいた全人物と受話器の向こう側にいた全人物の聲が重なつた。

お兄ちゃんて呼ばないで（後書き）

最強のコックが乗る列車のように暴走は止まらない。アインハルトが妹になってしまったシューゴにさらなる衝撃が！
どうなる、主人公・坂田銀時！

次回「君は誰とキスをする？」

きつと次回のテーマソングは「トライアングラー」

銀時「まだラブコメ編続くのかよ！？」

君は誰とキスをする？

「まあ、何はともあれめでたい！今日はガンガン飲むぞ！とにかく無礼講だ、乾杯！」

『乾杯ッ！』

近藤がパンツ一丁で乾杯の音頭とった。

先ほどまでバベルの塔丸出しだった彼が何故パンツ一丁かと言うと、八神邸で飲み会を開いていた女性陣が合流した為、土方に無理矢理パンツを履かされたからである。

シューゴの生き別れになった妹の時空を越えた再会という吉報を聞いた高町夫妻がケーキを焼いて参戦。涙ながらに祝ってくれた。そんなことで翠屋も解放した盛大な歓迎会が今ここに開催されている。

「死ねえ天パ探偵！宇宙人とか未来人とか超能力者でも探してる小娘に振り回されて死ねエエ！」

「うるせえ、てめエが死ねシスコン！てめエこそ人型パソコン拾ったりして死ねエ！」

銀時とクロノが罵り合いながらボコスカウオーズを展開。ここだけ暗黒武道大会か天下一武道会が開かれている。

「ちょ、銀さんもクロノも止めなよ！てか何後半のは！？」

「あかんで、なのはちゃん。男には殴り合わないといけない時って

のがあるもんなんや」

止めようとしたのはをはやてが嗜める。

「それに、今止めたら折角の賭けがパアになってしまふもんな。行けえクロノ！銀時なんてぶっ殺せエ！」

「そこだクロノ！もつと左を使え、左を！だー！反撃モロに食らってんじゃねーか！？探偵なんてハンバーグにしちまえよ！」

「銀ちゃん何やってんのや！そんな拳でタマなんか取れんで！ブチかませたりッ！」

（既に賭けの対象になってるーッ！？ しかも銀さんへの声少ないし！？）

クロノに声援を送るのはヴィータ、ヴァイス。銀時に賭けているのは大穴狙いのはやてのみだった。

「セインさん、会う度に足蹴にされ、何かあれば足で踏まれ、何も無くても踏まれ踏みにじられ！ そんな…そんなアナタが…“たまらん”なくなつてしまいました…！ セインさん、す、好きですッッ！」

（たまらんなくつて…大丈夫この人！？）

山崎のとんでもない告白に、直ぐ近くで聞いていたデイドは心配してしまう。

告白された当のセインはと云うと、ニヤリとした笑みを浮かべ――

「へえ、山崎は踏まれるねが好きな変態なんだな。ならお望み通り……うりゃ！これが好きなんだろ？ほら、鳴きなさい！豚みたいに鳴きなさいッ！」

「おっふう か、快感フレーズッ！ ブヒッ！」

「ちょ、セインお姉様ツツッ！？」

「おお、あの水色髪の姉ちゃんスジがいいな。ちゃんと踏む足に腰が入ってらァ」

恍惚の笑みを浮かべてセインに踏まれる山崎。

山崎の性癖もあれだが、姉・セインの性癖も随分あれだ。そんなセインの踏み方に関心を示す沖田も……
まともな人はいないのか……デイドは怖くなって、泣きながらその、知りたくなかった世界から逃げ去っていく。

「カ~~~~ムさ~~~~——ぶべらッ!？」

「あら、虫かしら？それともゴリラ？」

自分に飛び込んできた近藤の顔面に右コークスクリューを叩き込むも、何事もなかったかのように差し出されたケーキを食べる。

「あらゴリラが出てたとは掃除ちゃんとしてるはずなのに？ あ、カリムさん、どうですこのケーキ？ よければその長髪のお兄さんもどうぞ」

「奥さん、これはかたじけない。……エリザベスよ、クロノ殿の母上であるリンディ殿もたまらないが、なのは殿の母上である桃子殿もたまらないな……くそう、どっちのルートを進めばいいんだ俺は！？」

『桃子さんは無理だと思いますよ、さすがに』

エリザベスの的確なツツコミは彼の耳に届いておらず、桂は悶々としたピンク色の視線で桃子を見つめている。

——その頃、妻がそんな目で見られてると知らない旦那・士郎はというと…

「だから～ウチのハツが～」

「いやいやウチのだって」

マダオと妻帯者同士で惚気あっていた。

そして暫くして、銀時とクロノの殴り合いが両者ダブルノックアウトとなった頃、事件は起きた。

「銀ちゃんらがダブルノックアウトになってもうてつまらんア…
そや！シグナム、シグナム！」

はやてがシグナムを呼びつけ何やら耳打ちをする。

「わかりました、はやてお嬢様。直ぐ様ザフィーラに手配させます」

シグナムはそのまま翠屋の外へと出ていく。

「あれ、シグナムどこに……」

「さあ……？」

外に非難していたマヨネーズと保母のバカップルは、夜闇に消えていくシグナムの背中を見送ったのであった。

一方、シューゴらはどういうと……

アインハルトが寝ていた部屋に集合しており。

「この子がシューゴの妹さん？」

ギンガがアインハルトの顔をじーっと見る。

現在、部屋の中にはシューゴ、アインハルト、ギンガの四人しかない。

スバルはトイレと仲良くなり、ティアナはというとフェイトに抱きついたまま彼女の“一種”有難い話を事務所で聞かされている。
ボロボロじゃんミッドチルダ勢。

「いや、その、なんてゆーか——」

「ここにおったか！」

シューゴの言葉を遮ったのは、神出鬼没のお嬢様ことはやてだった。しかし、先程までの服と違い——頭にリボンの付いた黄色い力チユーシャ、水色のセーラー服。左腕には「団長」と書かれた赤い腕章

——何故かハルヒスタイルで。

「その子がシューゴくんの妹ちゃんか。よろしゅうな〜 … ふふ〜
♪ ほなら、妹ちゃんにはアレになってもらおかね♪ ギンガちゃんは何がええかな〜」

SOS団の団長はアインハルトを抱き抱え、ギンガの襟首を掴むとシューゴを置いて立ち去って行った。

途中スバルの悲鳴が聞こえた気がする。

暫くすると、シューゴを向かいにハルヒが再びやって来てた。

「ふっふっふ シューゴくん、見て驚かんといてな！」

厨房（居住地と繋がっている）から、そのまま翠屋の店内へ通される。

シューゴは言葉を失った。

「どうやー！」

誇らしげに胸を張るはやての奥には——

みつくみくなボーカロイドになったアインハルトが。

「……………へ？」

「何じゃこりやアツ！？」

呆気にとられていると、入り口から入ってきた銀時の叫び声が。そちらを向いてみると

P i a キャロつとに登場するミント色のウェイトレス服——フローラルミントタイプ——を着たなのは。

機械の体をタダ貰える星に連れてってくれそうな黒い帽子に黒い服を着たメーテルなフェイト。

それだけではない。

セインはチルノでヴィータはシャナ、デイドは私服の秋葉である。

「カリムさん！なんてゆーか……ムラムラします」

「こんなこと滅多にないんだからね！」

ノリノリのカリムはシェリル・ノームのコンサート衣装（青くて帽子被ってるヤツ）を着ている。

「ま、まさか！？」

シューゴがもしやと思い彼女達の姿を探す。

「……………やっぱり」

うなだれる彼が観たものは……

赤いプラグスーツのティアナ、白いプラグスーツのスバル。体操服のギンガ（これがクラ○ドの杏のコスプレなのはシューゴにはわからなかった）

「何やってんだお前ら！？」

「私だってわからないわよッ！ はやてさんに連行されたと思ったらいつの間にかこんな格好になってたのよ！」

ティアナは両手で体を隠しながらなる。さすがに体のラインがぴつちりと出てしまうプラグスーツは恥ずかしいらしい。顔がスーツと同じ赤くなる。

「あ、あの…どうでしょうか十四郎さん」

部屋の隅では一際目につくバニー姿のシャマルがもじもじしながら土方に問い掛けていた。

「ナイス、バニー」

冷静な顔でいつぞやのように鼻血を垂らして親指を立てるマヨラー。尚、数十分後にバカップルが二時間ほど姿を消してしまうのだが、銀時達はそれに触れないでいた。それが大人の優しさだと私は思う。

「おい、はやて」

銀時がはやてに詰め寄る。その顔は真剣そのもの。

「こんだけ古今東西の萌キャラがいて何でジャンプキャラがいねーんだよ！」

怒るポイントが違った。

「大丈夫やで銀ちゃん！シグナム、カモン！」

はやての声にT.O. LOVEのララのコスチュームを着たシグナムが入り口から入ってきた。

「ぐっじょぶ」

銀時ははやてにサムズアップする。

「はやて殿、桃子殿の姿が見えないようだが…」

「ん？そこにおるよ」

はやてが指差した方向に、StrikerS時の娘のバリアジャケットを着た桃子が士郎とイチヤついていた。

「原作うう！？ てかフラグ折れたああアツ！！！？」

『言つたじゃないですか桂さん』

「それにしても…いいな、君、凄くいいなア」

「あ、あの、その…ちよつと…」

みつくみくアインハルトを見て鼻血を垂らすヴァイスに、アインハルトは涙目になりながらスカートの裾をギュツと握りしめる。

ティアナとぎやぎやあと言い争っていたシューゴがアインハルトの異変に気が付いた。

「ちッ」

「ちょ、ちよつと！」

駆け出していく少年の姿を呆然と見送る少女。

「おい、オツサン…コイツに何か用？」

ヴァイスの肩に手を置き振り返らせる。

「何だよ…ひいイツ！？　ご、ごめんなさーいッ！？」

“静かな怒り”の形相でヴァイスを睨むと小さく悲鳴をあげ壁添いに逃げて行った。

「大丈夫か？」

怯えるアインハルトに上着を脱いで羽織らせてやる。

「何だよ…」

「ティア？」

小さく呟いた親友は肩を小さく震わせて顔を伏せた。
床にポツリポツリと雫が落ちる。

ギンガはティアナの震える肩にそっと手を置いた。

君は誰とキスをする？（後書き）

すれ違う心

それは女と男だからか

次回「少女T」

銀時「にしてもカップル多くないか作品」

フエ「銀時羨ましいのもしかして？」

銀時「…まあ、俺も男だし〜…けどな」

はや「なんや？」

銀時「この作品、否カップルに口クな女いねエじゃん。三人娘とか」
なの「銀さん…ちよつと頭冷やそうか」

銀時「ちよ、待て！？　まずは話合おう。な？　話せば分かる！　ぎ
やアアアッ！！？」

少女T

最後はコスプレ大会となった“混沌の饗宴”カオシック・シユンボンオンが開けて数時間。

笑っているとも！も終わり、ごきげ○のようなサイコロを転がす軽快なリズムが何処から聴こえてくる。

ティアナはそれをベッドの中でそれを聞いていた。寝転がる彼女の顔は青白く、更に頭の中でガンガンと鐘を鳴らされるような頭痛が止まない。

「うーん……水ウ…… うーん……もう、飲みませエん……」

唸り声をあげたのは隣のベッドに横たわるスバルである。大量に飲んだ結果がコレだ。

「……頭がガンガンする……ウ○ンの力飲んどけばよかった……」

二人ほど飲んでいなかったギンガも、怠そうに重い頭を片手で支えてソファ―に身を投げ出して座っている。

ティアナの重い頭の中で、グルグルと回るものが――

昨夜、彼が見知らぬ少女に優しくしてる姿を見てから胸の中にモヤモヤとしたものがなくならない。

あの時、涙が溢れて――

「……………はあ」

ベッドの中にいた所でコレが無くなるわけじゃない。

ティアナはゆつくりとした動作でベッドから這い出ると、下に行くため部屋を出た。

三人は八神邸の二階、陽当たりの良い部屋を貸してもらっている。それだけではなく、いつまでも管理局の制服ではいけないと、はやてには衣類の面倒までみてもらって折、ティアナは今、オレンジ色のパジャマを着ていた。

「はやてさんは…まだ部屋か」

はやてさんも大分飲んでたからなあ。

一人、広いリビングに設置された豪勢なソファーに腰をおろす。

「私のバカ……」

額に手の甲を付けて、小さく呟いた。

＋＋＋

「ううウ…死ぬウ…」

応接間の机に顔寝かせ、うなだれる銀時。その顔は何倍にも腫れ、さながら天パのアンパ○マンと化している。

「だらしないな銀時。お酒弱いくせに飲むから」

原因↓クロノと殴り合ったから。因みに、あんなに飲んでたはずのフェイトが何故二日酔いになってないかというと、ウコ○の力を事前飲んでいたので。出来る女は違いますな。

「はあ…仕方ない。シューゴ、銀時の代わりに聖王教会の屋根の修理頼まれてくれる？」

「え？…まア、別に構わないツスよ」

居候してる身なので断る理由もない。どうやらフェイトはフェイトで手が離せない案件があるらしい。

「それじゃあ、アインハルトと一緒に行ってきて貰えるかな。足はこっちの方で用意しとくから。あ、バイクって運転出来る？」

そう言われてやってきたのは聖王教会。

ドドドドド……スン

エンジンを切ると低く唸りをあげていた轟音が静かになった。

シューゴは、シート高の低い黒いバイクにまたがっている。

フェイトが手配してくれた足——なのはの父・士郎に貸りたドラッグスターというアメリカンタイプのバイク。

「まさかこの世界でヤ○ハのバイクに乗れるとは」

ゴーグルを外しながら呟いた。どうやらこの世界ではヘルメットを装着しなくてもいいらしい。

「さてと行くか、アインハルト」

後ろに座っていたアインハルトに声を掛けるが一向に降りようとしていない。何故なら——

「ガチガチガチガチガチッ」

歯を鳴らし、腰に回された手までも寒さにブルブルと震わす。バイクというのは想像よりも寒い乗りものだったりする。下手に薄着で乗ってしまうとこんな感じになったりするのだ。

「アウアウアウ さ、寒イ、冷イ、寒イよ、お兄ちゃん」

とりあえず、あまりの寒さに固まったままのアインハルトを腰に引っ提げたまま教会の中に行くことにした。

「ちわゝ万事屋銀ちゃんです 頼まれてた屋根の修理に来やした」

「あら、遅かったですね。さすが野蛮人」

出迎えたのは修道服姿のデイド。

「来た瞬間に罵倒かよ。…帰る」

「う、嘘ですわ！そんな帰らないで下さいな」

踵を返し帰ろうとしたら服の裾を捕まれ哀願された。

「…なあアインハルト、こいつどう思う？」

「ガチガチガチガチ」

「だよな」

アインハルトはまだ固まっておりますまともに喋れないでいた。というか、意識がはつきりしてるのかどうか怪しい感じ。

「今ので会話に成り立ってるんですかッ？ 流石は兄妹！？」

「だから血は繋がってねーっての。ンなことはいいからとつと壊れた屋根まで案内しろや」

「……………もしや、血を繋がってないことをいいことに、毎晩、アインハルトさんを　　し、自分のいきり立った　　を　　して……え？ そんな、私まで！？ ……けど、ちょっとだけなら……せめて優しく——しびゃっ！？」

R18な妄想を突如繰り広げたデイドの脳天にチョップをかます。
…今の内容は意識があるアインハルトには聞かせられない。

「ンなことするかアアッ！！ 何勝手に他人様をエロひどい妄想に登場させてんですかデメエは！？ カチューシャ取っちゃうぞ！」

「カチューシャを！？ 何て破廉恥な！ ……けど、あなたになら……」

「面倒くさい！ コイツすげエ面倒くさい！」

「乙女心のわからない方ですわね。こちらです」

頬を膨らませ、ぷいっとそっぱを剥いたデイドが二人を案内する。その間に固まるアインハルトに温かいお湯をかけてシューゴからひっぺがし、屋根の依頼へと取り掛かっていく。

トンテンカンカン

大した破損もなく、30分もしないで修理は完了した。
その後、二人は紅茶とクッキーをご馳走となりクッキーのお土産まで貰った。

帰り際。

「あ、そうだ。デイド服貸してもらえないか？」

「！？ よもや私の服の匂いをくんかくんかして慰めるのですね！
？ それでしたら今、脱ぎたての黒タイツをご用意致しますので、
それをオカ——ずにヤッ！」

履いているタイツをいそいそと脱ぎだしたデイドの頭をガシリと
わしづかみにし

「ちょっと待てや、ソコのカチューシャ。誰が何時ンなこと言った
？ ああン？」

「そ、そうでしたわね」

青筋をたてたヤンキー顔で睨みをきかせると、デイドは何故か頬
を染め目線を反らす。

「……とりあえず何か羽織るもん、コイツ用に」

デイドはポンと手を打った。

「本当に借りてもいいんですか？」

「ええ。返却はいつでも結構ですので遠慮なさないで下さいな」

アインハルトはデイドに厚めのジップアップパーカーを借り、今はそれを着ている。

これで帰りは来た時みたいなことにはならないだろう。

「返される時は洗わなくて構いませんので、アインハルトさんの残り香とシューゴさんの匂いを——」

「必ず洗ってご返却致します」

シューゴはデイドの言葉を遮ると、ドラッグスターのアクセルを回し足早にその場を去るのであった。

シスター・デイド。

恐ろしい敵だった…

シューゴは流れる景色を見送りながらボンヤリとそんなことを考えていた…

一方。

カリム 「んア…頭がアア頭がア」 シスター・シャツハ、辛いよゝ 重いよゝガンガンするウ」

シャツハ「全く、あれ程ウ〇ンの力をお飲みになるよう言ったのに飲まなかったからです。酔い醒ましのグレープフルーツジュース、ここに置いておきますからね」

騎士カリム、二日酔いの為本日休み。

少女T（後書き）

……あれ？デイドってこんなお嬢様口調だったっけ？
……ま、まあいいや。キャラ付けに！ほら、妄想お嬢様キャラってことで

次回「少女と怪盗」

銀時「うう…シスコンとボスカウオーズがましたせいで、また出番が…」

フェ「まあま、台詞があっただけいいじゃない」

なの「そうだよ銀さん」

??「そんな時は私にお任せッ」

銀時「だ、誰だ！？　つか、その声はーッ！？」

桃子「翠屋の女将さんは夜を忍ぶ飯の姿…その正体は！魔法賢母リリカル桃子！」

なのはB J姿の桃子登場。

なの「お母さん！？」

??「ふッ、甘いわよ…私の飲む緑茶のように！」

フェ「まさか…」

リン「同じく、魔法賢母リリカル　リンディ、見参！キラッ」

フェイトのB Jを着たリンディ登場。但し…

フェ「そ、そのバリアジャケット、THE MOVE版のヤツ…」

母さん、色々とアウトだよ…食い込み具合とか…」

リン「そうかしら？イケると思うんだけどな」

銀時「……母ちゃんがさ、娘の服を着た時の感覚って、なんでこ
うも居たたまれない気持ちになるんだろっな…」

なの「だね……」

少女と怪盗

子供達の間でまことしやかに囁かれてる噂が一つ

海鳴の町外れの森にある白い小さなポストに奪^とられたものを書いた手紙を入れると、取り返してくれるという。

そのポストの名は――

「怪盗さん、怪盗さん。お願いします。私の大事な……取り返して下さい」

ピンク色の髪の少女は、やっと探した古ぼけたポストに手紙を投函した。

「大丈夫……かな？」

不安そうに辺りを見回すと、少女はその場を駆け出した。

それを見つめる影が二つ。

「行ったか。……最近はこの噂が広がってしまって困っていたが、あの少女の目、あの目は――」

『久々にお仕事ですか？』

「手紙を見てからだな」

影はポストに近づくと、中を開けると、

ざらー

大量に出てきたのは殆んどが手紙っていうか「○○ちゃんに彼氏を取られました」とか「私のリコーダーがなくなってしまいました。多分、犯人はケツ毛が濃いゴリラだと思います」とか「あの方に心を奪われてしまいましたわ。あの三白眼、ゾクゾクしますわ」なんて書かれたノートの切れ端やチラシの裏を有効利用したものばかり

「ぬうぐああア!? 色事なら自力でなんとかしろオオオツ!!

“怪盗ポスト”は恋愛目安箱じゃないのだぞ! 全く、どいつもコイツもラジオの深夜番組みたいな相談事を! 腹立つ、あー腹立つ!!」

『桂さん、落ち着いて。さっきの子の手紙を』

書き割りで会話をする白い謎の生物(?) エリザベスに宥められる怪盗力ツラの中の人(?) こと桂小太郎が叫び声をあげる。

「そうだ、今は先ほどの少女の手紙——あ、このハガキ間違ってるよ。ポストに入れちゃってるよ。締め切り明日じゃん。出してあげないと」

明日締め切りの懸賞への応募ハガキと手紙を発見することが出来た。てかまともな手紙は一通しか入っていなかった。可愛らしい便箋。それが先程の少女のもの。

『取り敢えず読んでみましょうか』

エリザベスに促されて手紙を開く。

「どれどれ——これは……ッ!？」

『なんとッ！？』

手紙を読み進める二人の背景に稲妻エフェクトが走る。
尚、応募ハガキはちゃんと出しておいた。当たつてるといいな。

＋＋＋

その晩

「怪盗さん読んでくれたかな…」

ピンク髪の少女——キャロは二階にある自室の窓から星空を眺めていた。

「やア、サンタクロースだよ（裏声）」

シルクハットにタクシード、マントにマスクとどつかのセーラー服
美少女戦士に出てきそうな格好の男がキャロの目の前に現れた。

「きゃアアッ！？ ママー！お外に変な人ーッ！」

屋根からロープを垂らしぶら下がっている不審人物。

「お、落ち着いてくれないかキャロちゃん！」

「何で私の名前を…まさか怪盗ゾラー？」

「ゾラーじゃないカツラだ。…とにかく手紙、読ませてもらったよ」

「それじゃあ！」

「……残念ながら」

「ママー！外に変質者がー！」

「ちょ、テメー!? 変質者? やだな、違いますよ奥さん! ……いや、お姉さんでしたか? え? お母様? 美し過ぎるので、つい……。どうやら私は、貴方に心を奪われた存在のようだ」

一階から顔を覗かせたキャロの母——ウーノをロープの上から口説く怪盗。実にシニールである。

尚、ウーノがキャロの母なのはここが並行世界だから。

じゃあ父親はスカリエッティかって? そんなことは今語る問題ではない。

「おつとそうだった。キャロちゃん、約束は必ず守る。君が奪られたものは俺が取り返してみせる——それではまた明日の晩に会おう! フツハツハハツハ……!」

桂は不愉快な笑い声と共に何処かへと去って行く。

「怪盗さん……」

＋＋＋

「いいか、おめエーらア! リトルバスターズの名は伊達じゃないこ

とを見せてやれ！まずはファーストおお！」

グラウンドに立つ銀時は、傍にいるシューゴから放られたボールを受け取るとファースト目がけて打ち込む。所謂ノックだ。

「ちょ、銀時君！？ リトルバスターズって何！？ てか何で野球の特訓ッ！？」

「自分、球技は野球のルールしか知らないの。キャプ翼よりキン肉マンのが好きなんで」

「キン肉マンと野球関係ないじゃん！」と士郎に突っ込まれるも胸を張る銀時。

これぞ友情パワー。違うか

「お父さん、銀さんに頼んだのが運の尽きだよ。これじゃあサツカ―は無理そうだね」

そう、ここは士郎がコーチをしている少年サッカーチーム翠屋JFの練習場である。

道路に飛び出した子犬を救うべくトラックに衝突し、両足を複雑骨折してしまった士郎の頼みで、銀時が臨時コーチをしているのだが…

「…やっちまったなア、やっちまったよ…何でこーなっちゃうかなア…」

心配になり車椅子に乗ってやって来たのだ。
なのは、フェイト、アインハルトらと共に。

「たまにはいいんじゃない？ ほら、みんなあれはあれで楽しそう

だよ」

はしゃぐ子供達をなのはが指差す。しかし――

「……なのは、父さん店に帰るよ……一人で帰るから、ゆっくり見てて構わないからな」

泣きながら士郎が翠屋へと帰って行ってしまった。

「行っちゃいましたね、おじ様」

アインハルトが小さくなる士郎の背中を眺めながら呟くと、なのはは立ち上がり背伸びをし腰を回す。
そして軽くシャドーボクシング。

「大体予想通りかな。さーてと、準備運動も終わったし、みんなに混ぜってドッチボールでもしようか」

「なのはッ!? てか今、野球やってるんだよ!？」

ちょうど今、銀時が「ジャコビニ流星」などと叫びながらホームランを放った。
ノックなのに。

「私、ドッチボール以外の球技って知らないんだよね」

につこりとフェイトに笑いかけるとノックをしているグラウンドに駆け出していった。

「知らないからドッチボールをやるって……」

さすがなのは、わがま——恐ろしい子とは口が裂けても言えないフ
ェイト。

そうこうしてるうちにドッチボールが開かれた。

銀時が「かゝめゝはゝめゝ」と有名漫画の必殺技の構えでボールを
投げたり、なのはが「ディバインバスター」や「スターライトブレ
イカー」なんてとんでもシヨットをかましたりと皆楽しくドッチつ
てる。

それを眺めるフェイトとアインハルト。

「本当、皆楽しそうだね」

「そうでもないみたいですよ、アレ」

アインハルトが指差す先、グランドの隅にはユニフォームを着た赤
毛の少年が。

「ユニフォーム着てるってことはチームメイト…混ざらないのかな
？」

「他人と違うことがカッコいいと思つての単独行動ですかね？」

それはないんじゃないかと苦笑しながらフェイトとアインハルトは少年に
近づいてみる。

「こんにちは。君は皆と混ざつてドッチしないの？」

「うるせえ、黙れよ部外者」

赤毛のカウンターパンチ。

漫画みたいに笑いながら怒りマークを浮かべるフェイトに構わずにリフティングを始める。

「子供だと大概のことは許されると思ってるのでしょう。私がやります」

「アインハルト？」

フェイトの後ろにいたアインハルトが少年の前に出ると、しゃがみこむと

「お兄ちゃんッ！コイツが私をいじめる〜！〜！」

「……悪いごはいねエがア！？」

パキパキッと指を鳴らす音と共に、某北斗真拳的闘気を身に纏ったシューゴが、秋田名物なまはげの如く鬼の表情でアインハルトの後ろに。

少年の後ろには白い魔王と白夜叉までもが――

「よしなのは、ディバインバスターだ！」

「ちょっと…頭、冷やそうか」

銀時が少年を羽交い締めにし、なのはがボールを構えたので、フェイトは慌てて制止する。

後ろを振り向くとシューゴがバットを構えていた。

「ストップストップ！三人止めストップ！シューゴもバット下ろし

て！」

「わかりましたか？これが“強さ”です」

アインハルトにくくくくと涙目で頷く少年——エリオ。少年は真の強さの意味を知るのであった。

「で、毛も生えてないガキンちよがウチのアインハルトをイジメた理由は何だ？恋か？愛か？俺を倒してからにし——るアぼッ！？」
質問しながら銀時が拳を構え始めたのでフェイトは後頭部をどつく。暫くはおとなしくしてることだろう。

「で、君は何で皆とドツチしなかったのかな？…私とやりたくなかったのかな？…少し…頭、冷やそう——きゃわ！？」

同じく暴走しそうなのはの頭をどつく。
あと、事前に暴走しそうなシューゴを黙らせといた。
改めてフェイトはエリオをに顔を向ける。

「で、なんで君は1人でいたのかな？」

「サッカーをしたいのに…ドツチなんて出来るかよッ！」

エリオはそれだけ言い残し、その場から駆け出していく。

「……確かにその通りですね」

「あ、アインハルト…」

サッカーがやりたいのに、野球やらドッチやらしてたら怒るのも当たり前… 実にシンプルな理由だ。
けど、何だかそれ以外の理由もあるような… フェイトは何となくそう感じたのであった。

＋＋＋

「やったー！ やったよトシイッ！！ 水樹奈○のシークレットライブのチケット当たったよオオッ！！」

「…… なんの懸賞に応募してんだよ、近藤さん」

「きつとあの白いポストに出したのがよかったんだな、うん。さて、ペア一組だから早速カリムさんに連絡しようつと」

「……」

少女と怪盗（後書き）

少女が怪盗に託した願いとは？

次回「夜のお友達」

尚、近藤さんの応募したライブは架空のものであり実際にそのようなものがあるのかどうかなんて作者は全く知りません。

近藤さんが当たったのは、もしかしたらアメリカの警察で実在にあった、身を隠してる極悪犯を懸賞に当たったとおびき出して逮捕するってゆーのかもしれない。ほら、近藤さんストーリーだし

近藤「ちょ！？ええええッ！？俺、警察の人間なんだけど、ちょ、ええええッ！？ 何でも有りかよオッ！？」

沖田「何でも有りでさア」

近藤「総悟おお（泣）」

土方「ま、コレに懲りたら近藤さんもちつとはおとなしくしてくれ」

近藤「畜生ッ、俺は信じないぞ！例え太陽が凍りついてても愛のままに我儘に俺はカリムさんだけを傷つけない！！」

土方「何でB・Z？ ねえ、何でB・Z！？」

沖田「けど、傷つけられてんのは近藤さんの方ですよネ？」

近藤「ゴリラ・ゴリラ・ゴリラをコレ以上イジメないでくれエエゝ助けてお兄ちゃああーんッ！！？」

アイ「あ、お兄ちゃん、あそこでゴリラが喚いてる」

シュ「アインハルト見ちゃいけません！」

閑話休題（前書き）

ツラメイン回はちよいとお休み。

今回は、劇中詳しく語られてないアイツの説明

閑話休題

唐突に人物紹介

・村菜シューゴ

所属：時空管理局本局古代遺物管理局機動六課　ホークアイ分隊
階級：二等陸士

出身：第98管理世界「地球（日本・東北地方）」

使用魔法形態：近代ベルカ式、一部ミッド式

髪の色：アッシュゴールド（地毛）

瞳の色：ブラウン

素行不良気味な三白眼のツンツン頭。

アイカム

帝都に来てからBLEACHの一護、とらドラの竜児、ワールドエ
ンブリオのタカオに似ていると言われて戸惑っている。

ダメ称号「ツンデレキラー」

『ダインスレイヴ』

シューゴが使う大剣型インテリジェントデバイス

カートリッジシステム搭載。最大装填数は6。鰐の下にあるバイク
のアクセルバー似たトリガーを握る事でカートリッジを装填する。
刃渡り200メートルもある光の刃を“砲撃”に見立てて仕様する、
集束斬撃魔法「リヒトグロウスバイル」（カートリッジ6つ使用）
が最大の必殺技。通称「仏血斬り砲」

《解説》

もとは別の魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次創作小説のキャラクター。

坂田探偵はその作品のスパインタウトな位置だったりするのはどうでもいい事実。

原作なのは「地球」とは違う「地球」出身だったり、何故魔導師になったのか等のシリアスな設定はちゃんとあるが坂田探偵じやきつと語られない。

その一部←

「ホークアイ分隊」機動六課戦術顧問の神威キョウセンが隊長を勤める。

隊員はギンガ、シューゴの三名（例外的に副隊長はいないがギンガが事実上の副隊長である）

ホークアイ分隊は分隊そのものとして行動するよりも、他の分隊の補助要員として活躍することが多い。

コールサイン

ホークアイ01：キョウセン

ホークアイ02：ギンガ

ホークアイ03：シューゴ

閑話休題（後書き）

劇中じゃミッドチルダ勢のことはまず説明しないだろうから、こちらで保管を。

坂田探偵くは一応はコメディーが本流なんで堅苦しい部分は省いて外堀だけの説明ですが、まあ大体こんな感じで。

スピニアウト前の話ことシューゴ、ティアナ、スバルが主軸の「魔法戦記リリカルなのはS・T・S」の掲載予定はないですが、「本編」のなのはさん（9歳）が——おっと、次の話もまだ掲載してないからコイツあ言えない。

次回は続きをちゃんと更新します。

夜のお友達

前回のあらすじ
ただサッカーがしたかっただけのエリオは変人達を振り払い走りだしたのであった。

「エリオ君だね？」

後ろから声をかけられ振り向く。

そこには、喪服みたいな黒スーツにサングラスといったメン・イ○・ブラックな格好の長髪とずんぐりむっくりした白い生き物。
まあ、言わずもがなあの二人。

「な、何……!?」

「別に俺たちは怪しい者ではない。ただ、いくつか質問があつてだね。同じクラスのキャロちゃん……知ってる？」

こくりと頷く。

「ちょっと、その子について話を伺いたくてね。彼女、クラスじゃどんな感じなのかな？」

長髪がサングラスをずらしてエリオを見る。
その瞳は常人のそれではなかった。触れれば切れてしまう刃物のように鋭く、そして何よりも“冷たい”視線——ただ見られているだけなのに、全身を捕らえられる感覚がエリオを襲う。

「あ、あの…それは…」

冷や汗が頬流れた。

先ほどとは違う、暴力とはまた違う確かな“畏怖”が、この男から感じられる。

何か答えないと…

しかし、体は一步、また一步と後ろに下がっていく。

「し、知らない！何も知らねーよッ！」

目を瞑り、脱兎の如く逃げ出した。いや、逃げ出せた。

「行ってしまったか…逃げるといことは何かしら後ろめたいことがある証拠」

「…何か違う気もしますが、恐らくはそうでしょうね」

「早速調べてみるぞエリザベス」

『合点！』

とうとう〜♪とうる〜♪

とうるる〜♪

とうるるとう〜とうとう〜♪

（捜査のBGM・太陽○吠える。演奏者：桂）

小説という文字だけの媒体じゃわかりづらい音楽を口ずさみつつ、桂とエリザベスはエリオとキャロの関係を洗っていく。友人、知人、親戚のおばさん…多岐に渡る人物から聞き込みを行い様々のことを調べあげた。

趣味、好きな食物、好みのタイプ、将来の夢…だが調べれば調べる

ほどわからなくなっていく。

「何故だ！？ 下着の好みまで調べたというのに、二人の関係性が一向に見えてこないとは…エリさん、この事件、最早迷宮入り確定ですよ」

あんばんをもしゃらもらと頬張りながら苦悩する桂。
エリオの下着の好みはブリーフであった。

『桂さん、あなた本当に言ってるのですか？』

「こんな時に冗談など言ってられるか！一刻も早くキャロちゃんの奪われたものを取り戻さねば、ゲットバック奪還屋の名が廃れてしまう——あ、因みにお前が雷帝ね」

『やってる場合ですか！？』

『それに、答えは出ているでしょう』

「うーむ…」

聞き込みの末に導かれた答え——
それは——

＋＋＋

夜。キャロ宅。

「……………はあ」

何度目になるかわからない溜息を吐くと、やってくるはずの人物を待っていた。

果たして彼は来てくれるだろうか？

「はろーお嬢さん」

声に振り向く。

先日とは違う、白いシルクハットに白いタクシード。

顔にはモノクルと頭脳は大人な小学生探偵に出てきそう格好の桂が。

「今日はこないだと違う格好なんですネ」

「ああ、クリーニングに出していてね。あ、ところでんまい棒食べる？」

フリスク感覚でんまい棒（明太子）を差し出されるが丁重に断るキヤロ。

サラダの方が好きなキヤロであった。しゃくしゃくとんまい棒を食べつつ夜空を見る。

今日の天気は晴れ、雲はなく星が輝いている。

「なあ、キヤロちゃん——」……………わかってます」

桂の言葉をキヤロが遮った。

いつになく真剣な桂の声にキヤロは目を伏せ、言葉を繋げる。

「…私の我が儘なんです、私の…」

大きなアーモンド型の瞳から雫がこぼれ落ちる。
雫が止むことなく、ポロポロと流れ落ちる。

「怪盗さん、ゴメンなさい——私は何も“奪われていない”のに」

桂は星を眺めたまま、少女が書いた手紙を思い出していた。

『友達がいなくなっていました。——友達を返して下さい』

そう書かれていた紙面はところどころ、水で濡れたあとがあった。

——涙を流して書かれていた手紙。

キャロのことについての聞き込みの結果、桂は辛い事実を知ることになった。

「発端は些細なことだったんです——」

キャロのことが好きな男子がいた。

だが、その男子が好きな女子がいた。

その女子はクラスでも女子を纏める、いわば総締め…ヤンキー用語で言うところの“頭”であった。

その女子は頭の権力を使い、キャロをのけ者にしていた。

しかし、キャロはめげなかった。

隣のクラスには親友のルーテシアがいたからだ。
彼女がいるから頑張れる。

そう思っていた

——ルーテシアが転校するまでは——

親友ルーテシアの転校、加速するいじめ。

キャラの心はいつしかぼろぼろになっていき、次第に学校を休むようになっていったという

語り終えた後、キャラは大きく泣いた。

「…すまない、キャラちゃん。俺には友達を…ルーテシアちゃんを取り返すことは出来ない」

泣くキャラの頭にそつと手を置き、桂は言葉を続ける。

「しかし、友達になることなら出来る。…この怪盗力ツラ、今日みたいな晴れて星が見える夜に会いに来ると約束しよう。それではダメ、かな…？」

キャラは桂の顔を見上げた。
真つすぐに、星を見上げる顔の横顔を。

「……怪盗さん…あゝいゝ」
泣きながら桂の言葉に頷く。
一端目を閉じると、キャラの方を向き、

「怪盗さんじゃない…“桂”だ。——友達ならそう呼んで貰いたいな、キャラ“殿”」

「うん……!!」

桂の首筋に抱きつく。

キャラの顔は、涙に濡れつつも微笑んでいた。
新しく出来た友を迎える為、夜のお友達を迎える為に

桂をぶら下げたロープを調整するエリザベスは、葉巻を吹かしながら星を見上げていた。

『親子丼って、美味いよな……』

「うえーんとしい」

「どうしたんだ近藤さん…いや、言わなくても大体分かる」

「カリムさんが、カリムさんがあ」

（ああ、やっぱり…大方、例のシークレットライブだかのチケットだけを取られて一緒に見にいけなかったんだな）

「一緒に行ってくれるって…ッ、トシい…やったよオオ」

「予想の斜め上ッ!？」

「一時はチケット取られるだけかと思ったが…ん？　ぬがあアッ!？」

「なんだ近藤さん、変な声あげて…俺の顔になんか付いてたか？」

「か、か、顔じゃない…」

「あ？　じゃあ何処に何が付いてるって言うんだ」

「ひ、ひ、ひひひ左手の薬指に指輪がアアッ!？」

「あ、ああ…近藤さん、言い忘れてた。近藤さん、俺——婚約が決まったから」

「なんですとオオオオオオオオッ!？」

↓ to be continued

夜のお友達（後書き）

久方ぶりの更新です。

遅くなつてしまい本当に申し訳ありません。

内容が内容なだけに、かなり削ったり修正しながら現在の形になりました。

エリオが噛ませ犬になってますがエリオなのでry。

次回「エンゲージパニック」

甘々砂糖空間に君は耐えられるか！？

はや「ここは乗っ取らせて貰うで！シグナム！」

シグ「はッ」

はや「ふっふっふっふっ…次回より後書きは、はやてちゃんの質問コーナーにしたる！“神出鬼没のお嬢様”は伊達やないことを証明させたるッ！てな訳で、私らに質問がある子達はどんどん送ってくれな」

銀時「なあ、それって普通、銀八な俺がやるんじゃないの？」

はや「黙らっしやい天パ頭！銀八気分なら31人+αで十分味わつてるやないの！…くそオ、ホンマ羨ましいわ…私かてあっちの

世界に行けたなら魔法先生に――」

銀時「おっと、この小説の悪口はそこまでだ」

はや「（咳払い）……そないな訳で、はやてちゃんの質問コーナーは次回から開始やからよろしゅう頼むな！」

銀時「不定期更新、魔法先生ぎんぱち！もできるだけ宜しくな」（宣伝）」

エンゲージパニック

「聞いたか？ 副長が身を固めるってよ」

「ああ。相手は、あの時々パトロールで立ち寄る保育園の保母さんだろ？ どんだけマニアックなんだ副長、夜の先生とエプロンでレツパーリイって」

「なんだよエプロンでレツパーリイって。いや、言わんとしてることは分かる、分かるけどよ」

「副長が結婚か、何だか信じらんねーよ。毎晩マヨネーズプレイとかしちゃうんだろーなア…」

「ああ。信じられないのはお前の発想力だと思う」

なんて会話が隊士達の間で交わされていた。

勿論、この男もそんな話を聞いていない筈がない。

「土方さん、聞きやしたぜ。何でもマヨネーズプレイをしてるって話じゃないですかイ 具体的に、マヨネーズはかけるんすか？ 入れるんすか？ …どっちにしろ、恐ろしいツスねエ さすがの俺も思いつきませんよ」

「総悟、俺アお前の発想の方が恐ろしいと思うぞ…何だマヨネーズプレイって…」

「え？ あの金髪の姉ちゃんにマヨネーズをかけて美味しくいただいてるんじゃないんですかい？ 『独眼竜が食らうまでよ』とか言つて。さすが土方さん。筆頭の勢いは止まらねー」

「切り殺すぞデメエっ！」

＋＋＋

……何がどうなつてこうなつたんだ？

土方は頭を押さえつつ、自宅であるマンション——土方は屯所近くのマンションに住んでいる——のエレベーターに乗り込んだ。

先日、近藤に左手の薬指にはめた婚約指輪を目撃されてから一気に波紋が広がった気がする。主にマヨネーズ方向に。
今朝なんか松平のつつあんが押し掛けてきて――

「トシい水臭エじゃねえか、何で教えてくれなかったんだ……ついに、ぐす……おめえも……。こいつア少ねエが結婚資金の足しにして、嫁さんの為にも立派な式を挙げてくれ！」

なんて泣きながら札束を渡してくれた。

……とつつあん、少なくともいよ。寧ろ多いくらいだ――等とは言えず、入り用になることだし有り難く貰つといた。

（……つか、とつつあんには言うつもりだったんだが――アイツを連れて。改めて礼を言う時に連れていくか）

等と考えている内に、部屋の前まで辿り着く。
ポケットから鍵を取出して扉を開けると味噌汁の匂いが漂ってきた。

「お帰りなさい、十四朗さん」

フリルの付いた可愛いエプロンを掛けたシャルが、土方の帰宅に気付き台所からかけてきた。

彼女の左手の薬指には、土方と揃いのリングがはめられている。土方が贈った婚約指輪だ。

「お疲れ様です。今、ご飯の支度をしてるから先にお風呂に入ってもらってもいい？」

「ああ、わかった」

それから暫くして――

風呂上がりの土方の前にシャルの手料理が並ぶ。

今日のメニューは

千切りキャベツが添えられたトンカツ、豆腐と揚げの味噌汁、ほうれん草のおひたし、ポテトサラダ。

二人は手を合わせると、トンカツとポテトサラダにマヨネーズをぶっかける。

「うん、さすがシャル。ポテトサラダがマヨネーズの味を引き立てる」

「褒めても何も出ませんかよ……んーやっぱりトンカツは十四朗さんが作る“土方スペシャル”の方がいいわね」

マヨネーズが掛かったトンカツ……いや、マヨネーズと化したトンカツを一口頬張りながらシャル悔しそうに語る。

そう、何を隠そうシャルルはあのマヨラーと互角に渡り合える味覚の持ち主だったのだ。

シャルルがまだ八神邸で暮らしていた頃、家事は全て当番制であった。

掃除、洗濯を難くこなすシャルルであったが唯一苦手（本人は苦手と思っていたらしい）だったのが炊事。

見た目こそ“わりかし”普通であるが、その真価は味にあった。

能調味料マヨネーズ説を信じて止まない彼女が調理当番の日に出されたご飯と味噌汁等の汁物を除く食材は、全てマヨネーズ等の何らかの調味料塗れであったと言う。

さすがに命の危機を覚えたはやてが調理当番制を廃止し、家長であるはやて自らが包丁を握りあたしらは命を取り留めた——と、ヴィータは語る。

「…それにしても、夢みたい…」

箸を止めシャルルが呟いた。

「十四朗さんと家族になれるなんて」

「シャルル…」

口のまわりにマヨネーズをべったり着けた土方がシャルルの横顔を見つめる。

「ありえねーよ！マジありえねエ！？ あのマヨネーズが結婚？
どーせ着け忘れだろ、出したら入っちゃったーとかそんなんだろ？
そうなんだろ！！ 嘘だと言ってよバーニィッ！？」

「坂田、私はバーニィなどではない。ザフィーラだ。それと残念ながらショットガンマリッジではない」

とある居酒屋。

銀時はザフィーラの肩をガクガクと揺らしていた。
珍しくザフィーラが銀時を誘い呑んでいた。

「私も信じられん…しかし、あの男の拳は“効いた”ぞ」

何でも、自分の妹分たるシャマルを嫁に出す条件としてはやての後
見人たるギル・グレアムとかってオッサンが

“シャマルは我が娘も同じ、シャマルが欲しければザフィーラ、シ
グナム、そして私に拳で勝つことだアアッ！！”

という条件を出したらしい。

条件というか悪ふざけにしか聞こえない。

銀時はグレアムとかってオッサンに会ったことはないが…

武装メイド（てかくのいち）のシグナムと筋肉隆々なザフィーラと
素手で戦って勝つのが条件だとは…

「あははは、ないわ。うん。ないわ…逆にベタ過ぎるって」

乾いた笑いを浮かべつつお猪口を一気に煽る。

「……っち、きしょーッ！あのマヨネーズが妻帯者だと…嘘だッ！
！」

「坂田、お前もそればっかりだな……ほら、空いているぞ」

「あ、すまないね〜…んぐんぐ…つぶはア〜、ホント呑まないとや
ってらんねーぜ」

「ふ…全くだ」

銀時に頷くものの、ザフィーラの表情は何処かにこやかだった。

（シャル、おめでとう）

「……………問題は…」

色モノ揃いの妹達の中で、色んな意味で心配なのが…

「あいつ嫁にいけんのかな…」

ザフィーラはシクシクと涙を流すのであった。

「つくしゅん」

「ん？ シグナム風邪かや？」

エンゲージパニック（後書き）

はや「はやてのごとく！（タイトルコール）」

はや「前回の予告通り、後書きは我ら“我らゴリラギャング団”が乗っ取らせて貰った！…って、なんやねんゴリラギャング団って！？ マッハボーイ（黄色い鷹）のネタなんて、一部の人しか分かんやろが！」

フエ「ま、まあまあ、はやて落ち着いて」

松平「そーだよ、お嬢ちゃん。とおりあえず、一端落ち着こうじゃないの」

はや「…マッハボーイやから、あんたらが来たんか？ そうなんか？ 教えて、シンイチ、まだ少ししか喋れない！？」

フエ「ミギーストップ！ それこそ分かる人いないよ！」

松平「…まあ、ね。取り敢えず質問はまだないみたいだからア、あ、次回予告いっちまうよつと」

次回「予定は未定」

はや「…うエエエ！？ シャマルと土方さんの結婚式の話とかやないの！？」

フェ「作者が砂糖空間に耐えられなくなっただって。このままラブリケーンの話が続けたら『少年ジャンプがヤングジャンプに…いや、ヤングアニマルになってしまう！俺のジャスティスがツダみたいに空中分解してしまうッ!?』ってナナとカールを片手に叫んでたよ」

松平「さすがにイ、〇たり〇ツチ化はまずいもんなア…母ちゃんに怒られる」

はや「…あかん作者や、せめてプロット位ちゃんと組めよ。ほなら、次回『予定は未定』。気のみ気のまま書くってことで！」

松平「宜しく頼むズラアアアッ!!」
フェ「宜しく願います」

はや「……バラバラやん、二人とも……」

Begins Night

墓標の前に長髪の男が1人立っていた。
男は墓標に添えられた花を見つめる。

「……ッラか」

名前を呼ばれ長髪の男が声の方を振り向くと、そこにはサングラスをかけた癖毛の男が立っていた。

「…辰馬か」

「その花はおんしが？」

「いや…きつと“彼女”の妹さんだろう」

「妹…ああ、そうえば確かにいたのう。……なんじゃ、おんしでなければ銀時かと思ったが…」

「……アヤツがこんな真似ををすると思うか？」

「アハハハッ…確かに。あの銀時がこげん真似するようには思えんきに………お、雪は降ってきちよったな」

いつの間にかハラハラと、真つ白な雪が振ってきていた。
雪は墓標に添えられた花の上に落ちるとゆっくりと溶けていく。

「通りで寒い筈だ。……あの夜も、雪が振っていたな」

「ああ、忘れもせんよ…あの夜のこととは——」

坂田探偵事務所リリカル奇譚

【B e g i n s N i g h t】

・ 予告編

これは、始まりの物語——

桂

「ヅラじゃない、桂だ」

坂本

「アハハハッ…死んでいい？」

銀時

「ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー、発情期ですかコノヤロー」

高杉

「甘くなつたなア、銀時」

四人は出会い、やがて——

彼は“彼女”と巡り逢うこととなる…

「私は好きだぞ、銀時の癖毛」

しかし……

「何でも、そげんはまるで生き物みちよーだって話じゃ」

「高杉がッ!？」

「俺はただ壊すだけだ、この腐った世界を!」

「いつから違った、俺達の道は——」

「銀時…すまない…約束は、守れそうにもない——」

「高杉イイイイツ!？」

雪が降る、聖なる夜

哀しい別れ――

「駄々っ子は友人に嫌われるぞ、銀時」

「銀時――ありがとう」

「そして…さようなら」

「リインフォースうっ!？」

坂田探偵事務所リリカル奇譚

【B e g i n s N i g h t】

銀時

「まあ、ウソなんだけどな」

B e g i n s N i g h t (後書き)

すみません、突発ネタですッ

劇場版予告風で銀時の過去を。

高杉、銀時、初代リインフォース…みたいな感じのを。

すみません、もうやりません……

短編、男達の挽歌（前書き）

銀時からのお願い

銀時

「今回、短編つつーことで書き方を実験的に変えている！
あと、ちよっとした飛び込みゲストがいるけどお遊びみたいなもん
だから、今後の活躍とか期待しないよーに！」

なのは

「読者の声次第での登場は？」

銀時

「さアな。作者はノリと勢いで書くバカだから可能性はなくてはな
いけど、あまり出したくないって話だ。
まあ、その辺は察してやってくれ」

なのは

「計画性がないのは相変わらずなんだね…。
……だから風呂敷を畳めず…ブツブツ」

銀時

「おいおい、あいつの頭ン中、チーズ蒸しパン位の容量しかねーん
だから、無駄な期待はよしとけて」

——さて、そろそろ時間だから、タイトルコールすつぞ」

なのは

「うん！」

銀・な

「『短編、男達の挽歌』、始まります！」

短編、男達の挽歌

銀時とザフィーラが居酒屋にて、続き。

ザフィーラがトイレに席を立ち、残された銀時は「何でマヨネーズが結婚出来るんだ！」と愚痴をこぼしながらお猪口を煽っていた。

銀時

「ちきしょオ、納得いかねエ」

桂

「何を嘆くことがある銀時」

銀時

「ああン？…って、ヅラあ！？ 何でデメエが！？」

桂

「ちょっと呑みたくなつてな。聞き覚えのある声だと思ったが…やはりオマエだったか」

ザフィーラが花柄のハンカチで手を拭いながら戻ってくる。

ザフィーラ

「ん？ トイレから戻って来たら何やら人が増えているな」

桂

「これはザフィーラ殿、…久方ぶりで」

ザフィーラ

「桂か…ああ、あの時以来か」

二人の間に静かな沈黙が走る

銀時

「あーにしても、パツキンで保母さんで、スタイルよくて癒し系な嫁さんで…羨ましい訳じゃねーけど、土方死んでくれねーかなアゝ…別に羨ましい訳じゃないんだけどッ！…あ、お姉さん一本追加」

ザフィーラ

「…坂田、土方が羨ましいのか？…シャルはあれで料理が…」

空になった徳利を傾けながら銀時が店員に注文をする。

桂

「喜ばしいことじゃないか。また一組、夫婦めおととなる男女がいる。…つまり、人妻が増えると言うこと！人妻で新妻…素晴らしい、実に素晴らしいぞ銀時！このまま人妻が増えればカツラキングダムカトラキングダムの建国も夢ではないッ！銀時、お前もあの三人娘の誰かと…面倒臭い！三人と一辺に結ばれてしまえ！そしてカツラキングダムカトラキングダムの国民を提供しろッ！——ぬばらッ！？」

銀時

「長たらしいことをグダグダ語ってんじゃねエぞ、コラアッ！……つたく、何が悲しくてあの三人と一辺にくっ付かないといけねーんだよ…」

ザフィーラ

「坂田、何か不満でもあるのか？ 三人とも…特に我がお嬢様は美人で器量もいい上に家事万能だぞ。しかし嫁にはやらんッ！」

銀時

「黙れ筋肉ダルマ。…考えてもみる、なのはは自転車でも酔える極度の乗り物酔いなうえに黒い。フェイトは暴力的なツツコミキャラだし、はやてに至っては神出鬼没のお嬢様。お嬢様って時点で中の人ネタじゃん！ “ハヤテ” じゃん！ ……俺だって他の銀魂・なのはクロス作品みたいに原作キャラとイチヤイチャしてエエんだよオオツッ！！」

桂

「メタな発言はよせ銀時！ただでさえ少ない出番が減るぞ！」

銀魂

「おつかしーな〜 俺、主役なのに。主役のはずなのに………どっかにスタイルよし！ 器量よし！ 家事万能なりリカルキャラはいねーかなア〜」

桂

「ふむ…桃子殿とか？」

銀時

「人妻じゃねーかよ！ しかもあれは攻略対象外キャラだ」

桂

「そうになると、やはり狙い目はリンディ殿か…選択肢次第じゃ親子井EDも——」

銀時

「誰か、このバカ幻〇郷にでも連れてってくんねエ？」

???

「その願い、叶えてあげようかしら？」

銀時らの後ろにスキマが出現し、スキマから金髪の女性が上半身を出して桂と談笑をはじめてしまう。

ザフィーラ

「なあ、坂田…今、なんかスキマから声が聞こえなかったか…？」

銀時

「き、気のせいだ！？ スキマに帽子被った金髪の姉ちゃんがいて
ヅラと話してるなんて気のせいだ！」

ザフィーラ

「…気のせいって、完全にそこにいるよな？ 存在してるよな？」

銀時

「ならあれは妖怪だ、スキマから出てくるスキマ妖怪だ！ ……あ、
これじゃまんまか」

???

「——ね？ 幻〇郷に来れば貴方の望む“王国”だって手に入る
かもしれないわよ？（ただし人外の）」

桂

「……………なんと！？ そちらに行けば——痛い、銀時何をする、
止める」

銀時、桂をグーで殴る。

銀時

「バカ！ そっちに行ったら帰って来れなくなるぞ！ 俺も文や永琳は好きだが早まるんじゃないやねエ！」

桂

「銀時、分かりにくい中の人はやせ！ フリーダム過ぎるぞ！」

???

「あら残念ねえ。まあ、気が向いたらいらっしやい。その時は銀髪の方のお気に入りも用意しとくわ——じゃ、また逢いましよう」

スキマが閉じ、???は何処かえ消えていく。

ザフィーラ

「……何だったんだ、今の胡散臭い女？」

銀時

「忘れる。ザフィーラ、俺達は八雲紫なんて知らないし話もしていない！ たとえ出会っても八雲紫を見ることができない！ あ、????ってなつてたのに名前言っちゃった」

ザフィーラ

「あ、ああ……」

桂

「……銀時、世界には不思議が満ちているな」

銀時

「不思議なのはテメーの頭の中だけだ！　ひとりでミステリーハントでもしてる！」

ザフィーラ

（そういえば、シグナムがクリス〇ルひとしくんを欲しがってたな――）

シグナム（回想）

『ザフィーラ、クリ〇タルひとしくんて何処に行けば買えると思う？』

ザフィーラ（回想）

『あれは売ってないと思うぞ…』

シグナム（回想）

『そ、そうか…（´・ω・´）』

ザフィーラ

（シヨボーンとしてな…あいつは本当に嫁にいけんのかなア）

泣きながら酒を煽るザフィーラ。

ザフィーラ

「なあ坂田…お前、シグナムもらってくれない？　あいつも悪いヤツじゃないんだよ…ただちよつとアレなだけで。ほら、ただちよつとアレなだけで…（シクシクシクシク）」

坂田

「はい？」

桂

「ザフィーラ殿も苦勞してんるんだなあ…ザフィーラ殿、今日は呑もう」

ザフィーラ

「桂…すまない…」

——こうして男達の夜は過ぎていくのであった…。

シグナム

「!？」

はやて

「どないしたシグナム？」

シグナム

「何だが寒気が…」

はやて

「さっきくしゃみもしたし風邪かもしれへんな…今日はもうええからゆつくり休んどき」

シグナム

「……それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

はやて

「あんじょゝ休んどきィ」

短編、男達の挽歌（後書き）

はや「後書きコーナー、はやてのごとく！」

はや「本日は質問が届いておるよ」

監督提督さんから

『初代リインフォースでこの作品内ではどーなってるの！？色々と！』

監督提督さん、ありがとうございます。ズバリお答えしましょう！
…って、言ってもあたしじゃ答えられへんのでスペシャルゲストを呼んどります！ カモン、スペシャルゲストう！」

桂 「ちょりーす」

はや「ずばり、どないな？」

桂 「初代リインフォースことリイン殿——あ、俺達はリインって呼んでいるのだが——はだな、ずばり！」

——銀時の元カノだ！」

はや「な、なんやてエエエツ！？ それはホンマかキバヤシ！？」

桂 「キバヤシじゃない、桂だ。ああ、詳しくは言えないのだが…
…出会いは高校時代、俺達とリイン殿は出会った。はじめこそは性格の違いで睨み合っていた銀時とリイン殿だったが、ひかれ合い、やがて交際に至った。それから数年、ヤツはリイン殿にプロポーズをしたのだが、クリスマスの夜に高杉に——」

はや「わーわー！ 詳しい言ってるから！ 答え全部言っちゃってんよ桂さん！ …ん？ てなると、あの嘘予告編はダイジエストってことやったんか？」

桂 「ああ。そう思っただけで構わない」

はや「にしても盛大なネタバレしよったな… …さすが桂さんや」

桂 「伊達に八雲殿にヘッドハンティングされてる訳ではない」

はや「… …まあ、それは置いといて次回予告！」

桂 「八雲殿に導かれ、幻想郷へと辿り着いた俺と銀時。安息も束の間、ミスターブシドーが迫り来る。だからE缶だけは最後まで取って置く！ 果たして、伝説の樹の下にあの子は来てくれるのか？ 次回力ツライダーW『ひらがなみつつでことみちゃん』」

はや「んな訳あるか！ ツッコミどころが多すぎて捌ききれんわ！ 次回は銀ちゃんメイン回を予定してるらしいで。ほなら、お楽しみ〜」

桂 「ガイアが俺に囁いている…」

ある日どこかで #・1

「だあるウエドウああああッ！！！！？」

シューゴは憤慨していた。

バリアジャケットを展開し、片手に愛剣ダインスレイヴを握り締めて叫ぶ。

その姿、正に鬼神の如く。

「正直に話せええ、今なら半全殺しにしてやる。…どいつだ？どいつがやりやがった！あアン！？」

血走った目で部屋の中を見渡す。

アインハルトとティアナがソファーに座りテレビを見ていた。

フェイトは机で事務処理をしている。

「ど、どうしたのシューゴ…？」

フェイトが恐る恐る尋ねる。

「…お兄ちゃん…半全殺しってほぼ全殺しってことだよね…？
確かに虫の息だよね…？」

シューゴの形相に怯えるアインハルトはティアナの服の裾をぎゅつと握り締めて尋ねた。

「……で、何でバリアジャケット展開してんる訳？」

最後はティアナが呆れた様子でシューゴをじと目で見る。

「俺のぷっちんプリン食ったのはどのどいつだアアア!!!?」

シューゴの答えに三人が呆れるが、三人とも妙に納得していた。

“冷蔵庫のプリンは勝手に食べてはいけない”

家主である銀時とシューゴが洒落にならない大喧嘩をしたことから決められた、坂田探偵事務所の暗黙のルール。

これを破った者の末路は――

「犯人はどいつだああああッ!?!」

ダインスレイヴの刀身が魔力を帯び、紫に輝く。

「……………あそこ」

ティアナがドアを指差すと、今にも部屋から逃げ出そうとする口元にスプーンをくわえたスバル。

その手の中には、ぷっちんプリンの容器が――

「俺のプリンが……………」

楽しみに取つといたBIGぷっちんプリン。

今日の仕事が終わったら食べようと決めていた、黄色いいなせなあんちくしょう。

それが無残な姿（半分程食われている）で目の前に…………

「死にさらせエエッ！！」

「にぎやーッ！」

ドアを開けると、バリアジャケットを素早く装着して光の道——ウイングロードをマツハキャリバーで駆け抜けて行くスバル。それをホバーフィンで追撃するシューゴ。

今、壮絶な戦いが幕を開けた！

「今日も平和だねエ」

天空に消えていく二人を見上げ、なのはは呟く。

見上げた空は快晴。

これなら洗濯物が早く乾きそうだ。

＋＋＋

その頃、坂田探偵事務所の所長、坂田銀時かというと——

「なーんで、こんなことになっちゃったんだろーね」

嘆いていた。

シグナムから借りた木刀『洞爺湖』に保たれかかり嘆いていた。

………整理しよう。

久しぶりに“探偵の方”の依頼が舞い込み、港町に来ていた。
依頼内容——失踪人の搜索。

在り来たりな仕事だった。

実際、町に着いて半日程で件の搜索人は見つかった。

なのに……

「あの野郎、何処に行きやがった!？」

「そんな遠くにや行ってる筈はない…探せ!」

“いかにも”な黒服数人に追われ、朽ち果てた倉庫に身を隠す——
何が起きたのか未だに理解しがたい。

……いや、原因は分かっている。

思い当たる節——銀時は横を見た。

少女が膝を抱えて座り込んでいる。

栗色の髪を二つに結び、特異な白い服を着込んだ小学生位の女の子。

「すみません、私のせいで…」

大きな瞳を伏せ、少女が銀時に謝る。

「私が貴方達を巻き込んでしまったから…私、やっぱり行きます!」

「お待ち下さい」

少女が立ち上がるのと、彼女が現れたのは同時だった。

ロングスカートのメイド服、足下は不釣り合いな軍靴の様なブーツ。一房に束ねたピンクブロンドの髪を揺らして、シグナムが姿を現した。

「今出ていきますと確実に奴らに捕まります」

シグナムが少女を見ながら語る。

その口調は極めて冷静で、宥める為の言葉ではなかった。

「ならどうするんだシグナム？ 忍者なお前なら何か考えとかあんだろ？」

「忍者ではなく武装メイドです。———そうですね……」

シグナムは少女と銀時に交互に見比べると

「私と銀時様で奴らを蹴散らします。勿論、二人では限界があるのでしょう。」

そこで、貴方の力が必要になります」

少女は手に持つ“杖”をぎゅっと握り締める。

「無論、貴方が“私たちの思っている通り”であれば、ですが」

銀時はシグナムが何を言いたいのかその言葉で理解した。

少女の身に付けている特異な衣装には見覚えがあったから。

胸に大きな赤いリボン、白を主体としているその服は、どこことなく

“アイツら三人のバリアジャケット”に似ている。

だから———

「出来ますか——“魔法”を使うことは？」

シグナムの“魔法”という言葉に目を丸くさせて驚くが、直ぐ様表情は真剣なものへと変わり。

「やってみます！」

少女は力強く頷く。

そんな少女の頭に手を置きニヤリと笑う銀時。

「決まりだな。遠慮なく派手にぶっ放しててくれ……え」と――

「なのはです。私の名前は高町なのはです！」

少女の名を聞き魔法という言葉聞いた彼女以上に驚いた表情をする銀時とシグナム。

だが、今はお互いそんな時ではない。

聞きたいことがあるなら、終わったあとにじっくりと聞けばいい。

「……………まさか、こんなところで会うなんてな」

「え？」

銀時の呟きになのはが首を傾げた。

「何でもねーよ」

「あの、一つお聞きしてもいいですか？」

「おう、何だ？」

「お兄さん達の名前…教えてもらえませんか？」

「そーいや、名乗ってなかったな。」

あっちのはシグナム。で、俺は――」

シグナムがスカートに隠していた愛用の忍者刀を引き抜き、目標を見据える。

「坂田銀時」

銀時もシグナムをならい、木刀を握り目標の黒服を眼前に捕らえる。

「銀さんて呼んでくれ。」

…そんじゃ、でっかい一撃、頼んだぜ　なのは！」

「はい、銀さん！」

なのはが飛び出し、杖――レイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！ レイジングハート、お願い！――」

こうして、魔法少女と銀髪の探偵の短く長い一週間が始まりを開ける。

「……何あれ？ メガ粒子砲？　魔法てか魔砲少女だぞ、ありゃ」

「ですね」

ある日どこかで #・1（後書き）

はやて「…あれ？　今回、銀ちゃん回ちやうかつたんか？」

長谷川「何だか新しい子が増えたみたいだね」

チンク「それにシグナムも……作者め、相変わらず何も考えてないな。

全く、この姉の様に計画性を…そう思わぬか、新八？」

新八「姉上！　それは色々と——って、本編出てないのに出ちやったよ！

しかもチンクちゃんが姉…え、ちよつと…姉EEEEEEEE！
？」

チンク「煩いぞ新八」

長谷川「新八君、初登場ではしゃぐのは分かるけど迷惑考えようね」

メガネ「えEEEEEE！？　僕だけ雑な扱い！？」

はやて「名前も『メガネ』になつとるしね」

メガネ「はやてさん、それはさすがに——何じゃこりやあああああ！？　ありえないだろ！　メガネって、人を特徴だけで呼ぶなアツ！！」

長谷川「まあまあ。ところで、新八君。

チンクちゃんファンに殺されないようにだけ隠れてなくて大丈夫？」

メガネ「え？ 何ですか？ てか、僕とチンクちゃんてどんな関係なんですか？」

チンク「そんなことも知らずに姉を姉呼ばわりしてたのか？
全くお前というヤツは……」

はやて「えーつと『タカ坊とタマ姉の関係。けど扱いは雑』やってさ」

メガネ「その説明がすでに雑ウツ！？」

長谷川「まあ、よーするに幼なじみってことだね」

チンク「ただの！ 幼なじみだ。ただの！ な」

はやて「えらい強調してんな」

ま。そないな雑な感じが如何にもな感じやで」

長谷川「さてと次回、新八君の登場はなし！」

はやて「謎（笑）の少女とあの子がついに会おう！

……を予定しとります」

チンク「因みに私は花屋で働いているぞ」

ある日どこかで #・2

「どりゃアツ！」

銀時が木刀『洞爺湖』を振るう。

横薙ぎに振られたその一撃で、黒服の最後の一人が倒される。

「ふいーこれで終わったな」

額の汗を拭い、銀時は辺りを見回す。

黒服の男達がそこかしこに倒れている光景が広がっていた。

「……派手にやってしまいましたね」

シグナムがスカートに付いた埃を払いつつ、しれっと言う。

それとは対称的なのが、少女——なのはであった。

「大丈夫なのでしょうが……」

非殺傷設定で放ったとはいえ攻撃魔法だ。

それに彼女以外は全て物理攻撃…ようはガチンコである。

「骨の2、3本は折れてるだろーが命に別状はねーだろーよ。ま、正当防衛、正当防衛」

「悪が栄えた試しなしともいいます。あからさまな黒服を撃退したところで問題はないでしょう」

「そ、そうなの…かなア」

なのはは嫌な汗を流し、倉庫の壁に空いた穴を眺めていた。

＋＋＋

あれから三人は小さな喫茶店へとやって来ていた。

テーブル席に、シグナム・銀時とバリアジャケットを解除し、私服となったなのはが対面するように座る。

注文を済ませ、店員が立ち去っていくのを確認すると、銀時は口を開いた。

「——で、これからどうするかが問題な訳だが…まず、現状を把握しとく必要がある。

が、その前になのは」

「何ですか、銀さん？」

「生憎、俺の知り合いにも“高町なのは”ってのがいるんだよ。

……ややこしくなるから“このは”って呼ばしてもらってもいいか？」

「小さいから“このは”…成る程、B E O K みたいですね」

「ええ、それは構いませんよ（B O C K って何だろう…？）」

シグナムの呟きに訳が分からず苦笑するのは——改め、このは。さすがの銀時も呆れ顔である。

そんなやり取りをしていると、注文した物がやってきた。

銀時はいつも通りにチョコパフェ、シグナムは緑茶、このははオレンジジュースだ。

「…はむ…取り敢えず、さっき言ったみたいに現状を把握しとくぞ。過去を振り返って未来を考える。これって大事なことだよ…にしてもこのクリームうめエな」

「説明的な解説ありがとうございます銀時様。そして少しください」
(話がちつとも進まないなあ…)

このはが日課となった“魔法”の早朝トレーニングをしていたら、突然“ここ”にやって来てた。

突然見知らぬ土地へと飛ばされる——このはの言葉に、銀時の頭にあの四人の姿が思い浮かぶ。
原因はさて置き、このはは彼らと同じ境遇なのは間違いなさそうだ。その事について説明すべきかどうか迷っていると、シグナムが銀時に質問を投げ掛けた。

「ところで銀時様、何で“カタギじゃない人”に追われていたのが分からないのですか…」

「ああ、それはだな——」

このははこの『世界』にやって来た時、銀時はそれに出くわしていた。

彼女が、空から降って来たのだ。

銀時の言葉を借りるなら正に「ラピュタ状態」

ゆっくりと羽毛が落下するように堕ちてくるのは。

その軌道上にはご丁寧にヤクザな黒塗りのリンカーンが停車していた。

「そりゃあ、もう直下コースでしたよ…後はご想像通り。

今思えばあん時、「親方、空から女の子が!」とか言ったら助かったかもな」

リンカーンの屋根をベコベコにし、何が起きたのか確認しに外に出てきたハゲ頭のオッサンが何やら騒ぎ立て、煩いから顔面を蹴ってやったら、傍に停車してた車から黒服がぞろーりと

「おんしゃ、オヤジ狙うヒットマンか!？」

「任侠と書いて、にんぎょと読む。おんどれ! インスマス組ば舐めんやないきに!」

なんて訳の分からないことを言っただけで銀時達を追ってきた。

「そこで、偶々クリス・オルひとし君を探しにこの町にやって来た私と逃げ回ってる銀時様達に遭遇したのですね」

この話を抱えて逃げる銀時を発見したシグナムは、銀時達を追いかける黒服達の最後尾にいたハゲ（以下略）に「そのメイド服自前? ワシんところでご奉仕せん? ワシの息子と言う名の魚肉ソーセージに?」等と言われ、シグナムは極めて冷静にハ（以下略）を――

「気持ち悪くて触りたくなかったからロープで締めあげたのがまずかったでしょうか…」

さすがに殺しはまずいので気絶だけに止めたのですが…」

口元に手をあてがい、眉を八の字にさせるシグナム。

「——過ぎたことはこの際仕方ない。寧ろよくやった。オマエは頑張ったよ、うん」

後は「ヒットマンはメイドじゃあ!」とか「ポニーテール万歳!」とか「オヤジのくあとううアキイイ」等と叫ぶ黒服の集団から逃げ回って、先ほどの倉庫へと行った……とのことである。
以上、経緯終わり、まる。

「あの、それで、私はどうしたらいいんでしょうか?」

「そーだなア、取り敢えずはうちに来てもらった方がいいか?」

「そうですね。銀時様の処には魔法の専門家もいますし、このはさんに関する適切な処理をしてもらえると思いますと、シグナムは結論づけます」

＋＋＋

「——つー訳で、シグナム妹からの提案で連れてきた。ついカッとしてやった、今は後悔……は別にしていなア、うん」

「高町なのはです! このはって呼んで下さい!」

このはがぺこりと頭を下げる。

銀時らが事務所に着いたのは、日が沈んでからで営業時間も終了し

てしまい、フェイトは既に帰宅していた。

事務所に居たのは居候のアインハルトと本日は泊まることとなった
ティアナのみであった。

「は、はイイイイイイ!?」

ティアナが驚きの声をあげる。

アインハルトはぺこりとお辞儀を返す。

「…サンライズ繋がりで中の人繋がり…二重にかけるとはやりませ
ね、ティアナ様」

「シグナムさん、意味分かんないです！ それと妹って何ですか妹
って！」

「ビリビリです。…何となくキャラが通じるところがあつたので使
わせて頂きました」

「あーもう、そーじゃなくて！ …取り敢えずギンガさんに連絡し
ないと！ ったく、こんな時にシューゴとスバルは何やってんのよ
ッ！」

その頃

「うええん」 私のプリンをプリンにされちゃったよー ギン姉エ
」

「よく分からないけど、よくやったわシューゴ」

「覚悟完了」

「スバル、プリンの恨みは怖いんやで」

途中から、自称『超絶“プリン”セス』なはやても参戦した壮絶な戦いも、捕まったスバルが『プリンプリン物語』なる拷問を受けて幕を下ろす。

今ははやての勧めで、八神邸ではやてがつくった夕飯を食べている最中であつた。

「……うう、もうお嫁にいけないいよオ」

「今日の煮付けは最高ね」

ある日どこかで #・2（後書き）

はやて「はやてのごとく！　今回はちゃちゃっといくで」
烈火竜さんから

『せっかくのシューゴ登場なのに、シスコンネタが出なかったのは残念だった。』

ミッドチルダの人々は土方スペシャル食べますか？』という御便りを頂きました。

烈火竜さん、ありがとな

では、早速！カムうオン！ミッドチルダふあいぶ！」

シュー「俺は別にシスコンって訳じゃねーンだけどなア…（シクシク）」

ティア「はいはい、泣かないの」

はやて「取り敢えず、土方スペシャルいつてみよか！」

ギンガ「ミッドチルダ出身とはいえ犬の餌なんて食える訳ないじゃないですか（井を逆さまにして中身を捨てる）」

スバル「え？　結構イケるよ！？」

マヨネーズだらけで口のなか物凄いことになるけど」

ティア「……それは普通イケるって言わないわよ、スバル」

アイン「（土方スペシャルをじーっと見つめ）………これ、無理」

シュー「つつー訳で、烈火竜さん結果は——犬の餌なんか食えるか
!!!」

はやて「続きまして」

監督提督さんから

『新八キターー!』

しかもまさかのフラグ付きww『

って御便りを頂いたんやけど…」

セイン「はあ？ あのメガネの場合、フラグ立たせるよりも自分の
モンたたせるだけで精一杯だろ。

童貞なんてそんなもんだって退も言ってるぞ」

山崎「言ってますん！——もしや、是はご褒美フラグでは!？」

——言ってます。言ってますともマイ・ロード!？」

セイン「不正解。よってご褒美なし。退、残念だったね」

山崎「ほうちぶるええ!？」

はやて「——新八君のフラグ問題はこの際、白紙に戻して次回予告
いったって!」

ティア「このはちゃんは私達の知るなのはさんなのか？」

ギンガ「それとも、“おもちゃ箱”を改竄して現れた『真祖なのは
なのか!？」

シュー「次回『ある日どこかで #・3』」

スバル「——シューゴ、私のプリンの責任——取ってくれるよね？」

アイン「スバルさんのセリフはカットをお願いします。

——お兄ちゃん、ちよっと断空拳いってみようか………霸王断空——」

はやて「ほな次回………あゝあ、ありや死んでもうたな」

ある日どこかで # 3

「えっと…このはちゃん——でよかったかしら？」

「はい。銀さんもそう呼んでいるので、皆さんもそう呼んで下さい」

ちっさいなのはこと、このはが坂田探偵事務所にやって来たことをティアナから聞いたギンガとシューゴは時空管理局員として対応を余儀なくされていた。

秘密事項もある為、銀時、アインハルトには別の部屋へと行ってもらっている。

因みに、スバルは未だ「プリンプリン物語の刑」から立ち直れず今回は、膝を抱えて部屋の片隅、不安で震えながらお留守番をしている。

「このはちゃんが“時空管理局”を知っていて助かったわ。
あなたの現状を簡単に説明すると“漂流者”と言って——」

ギンガがこのはに説明をしている横で、未だに信じられないという表情で彼女を見るシューゴと冷静さを取り戻したティアナが念話で会話をしていた。

（…なあ、やっぱり過去の世界のなのはさんなのか？）

（その可能性は否定出来ないわね。

“シグナムさんのこと”を知らないって話だから、八神隊長達と出会う前の『世界』からやって来たのかもしれない…）

等と話していると、ギンガ達の方も話が終わったみたいだった。

「…そうですか…」

親友達は勿論、両親や家族のいない世界。

ギンガの話では、いつ元の世界に戻るか分からないという…。

9歳の少女には辛い現実だろう。

顔を伏せ、自分の説明に落胆した——ギンガはそう思っていた。

「…：けれど、考えようによつては現状を理解出来たのはよかった
かもしれません」

「え？」

このはの言葉にギンガが驚く。

「改めて、お話有り難うございますギンガさん」

「え、ええ…」

（なんか、なのはさんみてエだったな…今の言い方…）

（確かあの子って9歳よね…）

（（何か、子供っぽくなくないッ！？））

普段なら「なくなかないって意味わからないわよ！？」ツッコミを
入れるはずのティアナでさえ驚く位のこのはの冷静っぷり。

このはは確かに9歳である。

どこか達観し、原作での精神年齢も「おま、ホントに小学生かよ」

と言いたくるが“9歳の子供”だ。
子供のはずなのだが――

「所で、私はこの『世界』では何処に暮らせばいいんでしょうか…？
それとこの『世界』の通貨も持っていないせんし」

「ええつとそれは…――」

「ぎぎぎぎぎ銀時君ッ！…！？」

なのは子供らしくない現実的な質問に答えようとしたギンガの言葉
を遮ったのは意外な人物だった。
部屋の外にいたのは――

「どうしたんだ士郎の旦那？
てか両足複雑骨折してなかったっけ？」

「あ、忘れてた。てか忘れる位大変なんだ！？」

「だから何が？」

「……銀さん、あれ」

「何だアインハルトうう！？」

「外が煩エな…」

シューゴが部屋の外に出ていく。

「銀さん、一体何におどろうおおおおッ！？」

て、ティア！ ギンガさん！ たたたたいふえんだ！」

「シューゴ、落ち着いて。大変がたいふえんになってるわよ」

「コラー！ 私を置いていくなー！」

ティアナ、ギンガを引っ張りだしていく。

「ててててーふえんだあああッ！？」

このはの元に取り敢えず、何やら大変なことだけ伝わってくる。
気になるのでこのはも自分で確かめて見ることにした。

「ふえ？ この子だーれ？」

「……………」

このはの目の前には形容しがたいが、聖祥大付属小の制服（丈が短くて七分でミニスカ気味になってる）を身につけ、髪を今の自分のように二つ結びにした、成長した自分——高町なのは（20）がいた。

「な、なのはー！？ お、落ち着けエエエ！」

いくらロリキャラ発進でＣＶ田村だとしてもソイツは無しだー！」

銀時が泣きながら叫び声をあげる。士郎に至っては壁に頭を打ち付け

「夢だ、夢だ、夢に決まってる。起きろ！ 起きろ、俺エエエッ
！？」

必死に現実逃避している。

幼児趣味に走りだした成人女性の痛さに皆が皆、必死に耐えていた。
ある者は血を流し、またある者は現実逃避をし…

そんな阿鼻叫喚の地獄絵図の中、冷静さを失っていないのかったのが

「皆さん落ち着いて下さい！」

……なのはさんが幼児退行している原因は、恐らく私にある筈です！」

こののである。

『な』

『なんだってエエエ！？』

皆の声が一樣に重なる。

「それは本当かキバヤシ！？」

「銀さん、私はキバヤシじゃありません」

「なのはが幼児趣味に走った訳じゃないんだね、お嬢ちゃん

…あれ？　なんかちつさい頃なのはがいる。——覚めるオオオ、
覚めるんだ俺エエツ！？

「お父さん、落ち着いて！」

「ちょ、なんかやたら懷かれてるんだけど！　色んなとこ出っ張ってるから破壊力がパないんだけど！」

「なのはさん、シューゴさんに無闇に抱きつかないで!」

「――生は謳歌したかしらシューゴ?」

「ティアナさん、物騒なものを下げて下さいッ!」

「このはちゃん大変そうね」

「……そうですね」

「そう思っならちよつとは手伝って下さい!」

あゝもっツ!――皆、ちよつと…頭冷やそうか」

『は、はい……』

怒涛の連続ツッコミ

それは、魔王誕生の瞬間だった。

十十十

「さつき、このはが原因とか言ってたが心当たりがあるのか?」

落ち着きを取り戻した一行は、取り敢えず事務所の応接室に思い思いに座りアインハルトがいれてくれたコーヒーを飲んでいた。

「はい…恐らくは私が来たことにより、同位体であるのはさんと私の精神が反転したんだと思われます」

銀時の質問に、このはは自分の膝枕で眠るなのは——疲れて眠ってしまった——の頭を撫でてやりながら答える。

「反転…ねえ…。けど、ウチのなのは今のこのは程大人びちゃいねーぞ。なあ、士郎の旦那」

「ああ。少なくとも、ウチのなのはもう少しアッパパーだぞ」

士郎が自信満々に頷く。

（……確かに、こっちのなのはさんて直ぐに乗り物に酔って吐いたりするしなァ）

（私達の知るなのはさんに比べると、修羅場を経験してない分ちよつと精神年齢が幼いかもね）

と、念話で同意するミッドチルダ勢。

「もしかして——“同位体”だから性格はそれぞれの『世界』でのなのはさんのまま“精神年齢”だけ反転したんじゃない」

「…恐らくギンガさんの言う通りかも知れません。寧ろその方が納得がしやすいかと…」

「めんどくせえ設定だなオイ　ロリで精神年齢大人ってコナンかよ」
考えることを放棄しだした銀時がジャンプを読み始めた。

「……けど、なのはさんがこのままだと、精神的にキツイんじゃない」

『あ』

「……………い、一時的であることを願うしかねエな」

「……………そ、そうそう。寧ろこのはちゃんはこのままで、なのはだけ元に戻って貰えれば精神衛生上何も問題はないんだし」

「…ダメだこのオッサン達」

「マジ、ダメなオッサン——略してマダオね」

シューゴとティアナは呆れるしかなかったのであった。

その後、このはは高町家に居候となることが決まり翠屋の手伝いをしている。

——なのはの変わりに。

「フェイトちゃん、フェイトちゃん！ フェイトちゃんも髪の毛二つに結ばーよ」

「な、なのは！？ ちょ、マジ勘弁してください！？
にぎやあああッ！！」

なのはの精神年齢が戻ったのは、それから2日経ってからだった。

「……なあ、シューゴこのまま、なのはが増えたらどうなるんだろーな？」

「はあ？ 銀さんどうしたんだ？」

「いやな、今9歳のなのはと20歳のなのはがいる訳だけどさ——
——15歳のなのはや22歳のなのは、はたまた25歳のなのはなんかが来たら……」

「銀さん、何を言ってるんだかさっぱり……」

「夢をよー見ちまつたんだよー」

15歳のなのはは……まあ、割と普通なんだけだよオ

22歳のなのはつてのがお前らんとこから来たみたいでシューゴ達のことを知ってるんだよ」

「そりゃ、俺達の世界から来たんだつたら知ってる筈だわな」

「怖いのはココからなんだ——22歳なのは……腹ア、膨れてるんだよ」

「怖エエツ！？ ちょ、誰の子！？ 思い当たる節なんて——
あ」

「あるのか！？」

「いや、ないない……あの人に限ってないって……なんかそれクサイ雰
囲気醸し出したりしたけど……——嘘だと言ってよキョウセンさん
ッッッ！……！？」

「キョウセンって誰エエツ!!!?」

「俺とギンガさんが所属してるホークアイ分隊の隊長さん」

「……そーいや、そんな設定もあつたな」

「で、25歳なのはさんはどうなの?」

「それがよー、シューゴなんて知らねエって言ってるンだよ。
オマケにガンダムみたいな装備してるし——意味わかんねエよ!!」

「俺を知らないって…アツハハ、俺が存在してない並行世界から来
てるみたいじゃないか」

「……シューゴ、冷や汗流れまくりだぞ」

「銀さん、それ…夢、だよな?」

「…ああ。夢であつて貰いたいな…実に」

「ドリいいいムキヤツチャあああ!!」

「ぬうおお!? はやてエエエ何してやがるウウ!?」

「やめてエエ!! 俺達のライフは0よ!!」

ある日どこかで #・3（後書き）

はやて「後書きコーナー はやてのごとく！」

はやて「さあさ、やって来ましたはやてのごとく。

今回は烈火竜さんからこんな御便りを頂いておるで
『プリンプリンの拷問は気になりました。』」

ギンガ「…で、今回、部屋の片隅で膝を抱えていたスバル。
答えてくれるわよね？」

スバル「ぎ、ギン姉の鬼ーっ！

あれを話せって言うの！？

はやてさんが私のプリンをいきなり しだきだして、更にスプー
ンで いた拳げ句、最後はシューゴと一緒に——うわあああん
！」

はやて「……大丈夫やで。世の中にはお嫁さんを三人まで持てる国
があるそうやから、シューゴにはそこに行ってもろうて責任取って
もらおうな」

スバル「ぐす…あい…」

ギンガ（よく分からない所でよく分からないフラグが立っちゃった
わね…てか、これってカウントされるのかしら？）

はやて「そない訳で、次回予告」

ギンガ「ある日どこかで #・4は、なのはさんがいっぱい——
には期待しないで下さい」

はやて「確かに、なのはちゃんがいっぱいおったら誰が大魔王でバ
ーンなのが見当もつかへんな——あ、スバルがいないと思え
たら、あないなとこで“コンビ・ザ・ツインテール”に砂にされ
るな…南無」

ギンガ「次回も、また見てぎあす（……ホント狸だわ）」

ある日どこかで #・3・5

「ドリいいいムキャツチャあああ!!」

はやてがそう叫んだのと同時刻、某所――

「フハハハハ！ ついに手に入れたぞ『魔導書ナコト写本』……これで、我が積年の夢が叶うというもの！」

怪しげな男――飯に已厘野道満としよう――が、床にでかかと書かれた魔法陣の上で、古ばけた本を手には歓喜の声をあげていた。

「――どれ、早速始めるとしよう――えーとマンマンテロテロ

……長いなこの呪文。

来たれ！ “呪札^{カード}を役し桜なる少女” よ……」

本を広げ呪文を唱えると、魔法陣が怪しげに光り出す。

彼はこう見えても、この世界でも珍しい陰陽師だったりする。決してオカルトマニアの怪しい人ではない。

魔法陣の光りが一気に部屋全体を包み込む。

――成功か!?

「……あれ？」

光りが止み、辺りを見回してみるが召喚したモノが見当たらない。

「失敗か……いや、あんだけ光ってたんだ、失敗の筈がない！」

ならば、もう一度マンマン――いや、次は『セラエノ断書』を試してみるか――」

別の本を開き、呪文を詠唱する。
再び魔法陣が光りだし、部屋が閃光に包まれるものの、またもや召喚した筈のモノはいなかった。
だが、道満は諦めていなかった。
三度、古ぼけた本を広げ

「ええい！『金枝篇』ならどうだ！全力だ、全力でやってやる！レガシイイオブウゴオオウルドオオオオツ！！！！？」
これ以上ない程に魔法陣が輝く。
気のせいだろうか、どこからか「ヴルアアア！」や「フーグウタクーン」という叫び声が。

——しかし、結果は彼が望んだものの存在はなしというものだった。

「どうだ——！？

……あーもう、なんでだよ！ 光ってるじゃん。ビガーって！……くそつ、こーなったら気分転換にラブプラスやってやる！ 凜子でさくら分補給してやる！」

——なんて事が起きていた等露知らず。

「ぬうおお！？ はやてエエエ何してやがるウウ！？」

「やめてエエ！！ 俺達のライフは0よ！」

銀時とシューゴが叫ぶのと同時に、彼らの目の前に閃光が瞬く。

「もう、はやてちゃんたら——て、あれ？」

「病院にいたはずなのに……？」

「……ここは！？」

三人の前には、どこかで見たことあり、尚且つ“限りなく似ている顔の女性が三人”立っていた。
一瞬にしてそこに現れたのだ。

「やっちまった、やっちまったよオオオ！？」

ドクラー今すぐデロリアンで迎えに来てよオオオ！？」

「おお、まさか私にこない隠された力があつたとは——もしや英霊召喚で聖杯戦争ルート！？」

「ンなこと言ってる場合ですか！ あれ！ あの“なのはさん達”どーすんだよッ！？」

銀時達三人は目の前にいる三人の“なのは達”を見る。

“なのは達”は三者三様の顔を浮かべ、無言のままお互いを見比べている。

「と、取り敢えずこのはとウチのなのはも連れて来てみるか……」

【ある日どこかで #・3・5】

「じ、じゃあ、まず自己紹介してみよつか。あ、年齢忘れず」

銀時が引きつった笑みを浮かべて進行をする。

きつと銀時でなくともこの状況には啞然とするだろう。何故なら――

「高町なのは9歳です。ここではこのはって呼ばれています」

「高町なのは15歳……えーっと、取り敢えずここどこでしょうか？」

「高町なのは20歳。翠屋で看板娘やってまーす。苦手な物は乗り物全般です」

「神威なのは22歳。ミッドチルダで主婦をしています。……あ、現在6ヶ月です」

「高町なのは25歳。時空管理局 航空戦技教導隊所属。階級は一等空尉です」

「おお、なのはちゃんが勢揃いや……取り敢えず乳比べを――」

「てかさ、1人名前違うくない？ お腹もおつきいし……」

「………うん―― “神威” って……やっぱか、やっぱりか………キョウセンさんアンタって人はッ！？」

驚愕の事実を突き付けられたシューゴに、妊婦なのはが歩み寄る。

「えっと……もしかして、シューゴ……だよな？」

「ええ、そうツスよ、シューゴツスよ…“はじめまして” 未来のなのはさん」

「未来？」

ポカンとする妊婦なのは。

「——つまり、私達は漂流者であり此処は管理外世界…と」

25歳なのははシューゴの説明を聞き復唱した。

俄かに信じがたい説明だが、今置かれている「複数の自分がいる状況」

「“同位体”に私達の世界とは意味が違う“レリック”…“帝都・^{べっせかい}海鳴”に住むはやてちゃん——どうやら信じるしかないみたいね」

はやてとシューゴを見比べて25歳なのはは溜め息を吐いた。

「それに、何よりの決定打は“結婚して妊婦さんになってる私”かな」

15歳のなのはが続き、苦笑する。

彼女の視線の先にいる人物——妊婦なのはは、なのはとこのはに囲まれ、もう一つの生命を宿したお腹を触られていた。

「男の子ですか？ 女の子ですか？」

「男の子よ」

「わゝ…あ、今動いた」

「きつと、このはに挨拶してるんだよ」

「……………な、なのはちゃんが“お母さん”しとる…」

「なんか言葉使いもお母さんお母さんしてないアレ？
ものすごく良いお母さんっぽくないアレ？」

「せやなア…。なあ、銀ちゃん、私の気のせいやといいんやけど2
5歳なのはちゃんよか落ち着いてみーひん？」

「ああ。なんてーか小学生位の子供を既に持つてるレベルだわ」

「銀さん、基準がよくわかんねエよソレ」

銀時のそれは実際正解だったりする。

妊婦なのはは、小学三年生になるヴィヴィオという女の子の親でもあるのだ。

「なのはさん、なのはさんの旦那さんてどんな人？」

「あ、それは私も気になるかな」

20歳なのはの言葉に25歳なのはが食い付いた。

別の世界で結婚をし、子供もいる自分。

妊婦なのは同様、ヴィヴィオの母でもあるがそこは矢張り気になるようだ。

「私の旦那さん——キョウセンさんっていうのだけれど……元教官

で同じ部隊に所属していた同僚——いつもムズかしそうな表情をしてて、見た目は少し怖い感じだけど、本当はとっても優しい人で……」

「やめてー！ 鳥肌がー！ 鳥肌がー！」

「……………身内みたいなヤツの惚気話って破壊力凄まじいからなア」

「妊婦なのはさんの旦那さんはシューゴさんの身内さんなんですか？」

身悶えるシューゴを眺めていたこのはが銀時に質問する。

「俺も聞いた話なんだが、そのシューゴの隊長——妊婦なのはの旦那——ってのは、シューゴの恩人で保護者みたいな人なんだよ。要はアイツの親みたいなものじゃねエのか？」

「……………それは確かにキツいかも……………」

自分の両親が惚気合っているのを想像し、このはは納得した。なんとゆつか、凄くむず痒い。そして居たたまれなくなる。

「ふえー先生と生徒の結婚かーなのはさんやるー！」

なのはが別なことに感心していると、15歳なのは訝しげな表情をし

「カムイキョウセンなんて名前の教官なんていなかったと思うけど……………」

「どうやら私とあなたは別の世界の高町なのはみたいだね。…案外、私にとっての過去の私だったり」

25歳なのはが15歳なのは向かい微笑む。

そのやり取りを見ていたはやてはポンと手を叩き

「てーなると…」

・このは↓今のところ不明

・妊婦なのは↓シューゴと同じ世界のなのはちゃん

・15歳なのは、大人なのは↓シューゴにとって別の世界のなのはちゃん

・なのは↓うちのなのはちゃん。乗り物酔いの女王
てな感じがや？」

「お、大人なのは…最年長だからってことだよね？」

「なのはさん、いいじゃないですか。私なんて“妊婦なのは”よ」

「私だけ普通に15歳呼ばわり…なのはさん達だけ何だか呼び方違う」

なのは達は、ついつい年上なのはをさん付けで呼んでしまうが、全く持つて誰がどのなのはを指しているのか理解しがたかった。その問題に対し、一人の男が立ち上がる。

「だー！なのは、なのはってどれがどのなのはなのかわっかんねーよ！

てめーらの呼び方は、

・大人なのは↓おとは

・妊婦なのは↓かは

・15歳なのは↓いちは

にする！このはとなのは今のまま。いいな、コレで呼び合え。

文句のあるやつア“田村”って呼んでやるからそのつもりでいろ！」

『は、はい…』

銀時の半ば強引な提案で、ややこしかったそれぞれの呼び方を整理することに成功。

以後、それぞれのなのはは銀時が提案した呼称を使用する事となる。

「なあ、銀さん、妊婦なのはさんは略したら“にのは”じゃねエーのか？何で“かのは”になんだよ？」

「神威なのはを縮めてかのはだから」

「……なら神威で区別すりゃいいじゃん」

「シューゴ、そいつはNGだ。銀魂的にNGなんだ…分かってくれ……」

その後、このはとなのはを迎えに来た桃子によってなのはは「世界が違かろうと、貴方達は私の娘にかわりはないわ」と強制的に連れ去られ、翠屋の看板娘「なのはファイブ」として、元の世界へと戻る間、働かされたという。

「かのはさん、休んでて下さい！　ここは私といちはさんがやりますから！」

「大丈夫よ、このはちゃん。少し位体を動かさないと」

「なのは、そっちのテーブルの片付けは？」

「今終わります おとはさん。
いちはゝさばってないで手伝ってよ」

「こつちの世界のシャルさんて結婚してるの！？ てか、お兄さんが旦那さん！？」

「トシ、何だか翠屋のお嬢ちゃんがいつぱいるよ……これが多重影分身の術ってやつなのかな！？」

「近藤さん、それは多分違うんじゃないか……」

—— つづく？

ある日どこかで #・3・5（後書き）

はやて「いやゝなのはちゃんがギョウサンおると、やっぱり圧巻やっ
たなゝ

ガン〇ムが全部揃ってる的な」

フェイ「私的には、“なのは五姉妹”みたいで面白かったかな」

はやて「そうになると、おとはちゃんが長女でかのはちゃんが次女。
なのはちゃんが三女でいちちゃんは四女。
このはちゃんは末っ子の五女ってところか」

フェイ「私達の世界のなのはが真ん中つてもスゴい話だね」

はやて「しつかり者だけど仕事好きな長女、そんな長女を差し措い
て結婚した次女。

乗り物酔いの女王な三女、恋に恋する四女、少し人見知りな五女。

……同じはずなのに皆キャラが違うのは何でなんやる？」

フェイ「個性…かな？」

なのはでコレだから、別な世界の私達なんて想像出来ないね」

はやて「せやなゝ。

……特にシューゴの世界なんて…あかん、全然思いつかへん…

フェイトちゃんが傷心した〇しみたいに一人旅してる場面しか思
いつかへん！」

フェイ「は、はやて!？」

はやて「その点、私なんか何処の世界やろーと大方変わらんやろな」

「???」「さて、それはどうかな」

はやて「あ、アンタ誰や!? もしや噂の…」

フェイ「はやて誰と話してるの?」

はやて「へ? いない…誰やったんや、今の黒髪長髪の眼帯着けた兄さんは…?」

「—てか、コレだけやと思いつきし厨二なキャラやな、かのはちゃんのだ那さん…」

フェイ「? はやて、それより大変なことが——」

はやて「どうしたん?」

フェイ「本編に未だ登場してないツツコミメガネさん…どうやらパンデモニウムさんが彼女みたい…ほら」

フェイトが指差す先にはパンデモニウムを抱き抱え、仲睦ましく歩くメガネが

はやて「……是で本編登場はなくなったも同然やな…惜しい人をなくしたものだ…」

ある日どこかで # 3・7くらい（前書き）

銀時

「謝罪のコーナー」

なのは

「また唐突に始まったね」

銀時

「本当、何カ月ぶりな上に短編…てか短編？な感じでホントすいませんッ、ってバカが全裸で土下座しながら言ってた」

なのは

「そこは服を着ててもいいんじゃない…」

銀時

「そーいう訳で、暫くぶりの“坂田探偵事務所”なんだが…」

なのは

「だが？」

銀時

「暫くぶり過ぎてキャラの性格崩壊が大変なことに…」

なのは

「それってマズいんじゃない？ただでさえ“ユーなの”派の人から抗議があったりしてるのに」

銀時

「ま、まあほら、そこは大人な対応で。デリシャスポイントキャッチな感じで」

なのは

「なにデリシャスポイントキャツ…おいしいとこどり!? どんな英語!? どこらへんがつ!?!」

銀時

「あーもう、うつせーな。じゃ、始まりますってことで」

なのは

「投げ遣り過ぎだよ銀さん!?!」

ある日どこかで # 3・7くらい

雨が降る。

地上にあるすべてを洗い流すかの様に、雨は降り続ける。

「どうしてこんなことになっちまうんだ……」

雨に濡れるのも構わず、男が一人立ち尽くしていた。

銀色の髪は顔に張りつき、着ている一張羅のスーツも既に雨水と泥とでぐちゃぐちゃに汚れていた。

「俺はいつもそうだ——あの時も、あの時でさえも……」

空の掌を握り締め拳をつくるも、彼の手には何も握られてはいなかった。

「ちくしょう……」

呟いた声は雨音に掻き消され、ただそこには濡れ鼠となった男が一人立ち尽くしていた。
それだけだった。

＋＋＋

坂田探偵事務所、銀時の自室。
ベッドに横たわる銀時を囲む様に、フェイト、なのは、はやて、テ

イアナ、スバル、アインハルトが。

フエイト

「で、風邪を引いたと」

ティアナ

「馬鹿ね」

はやて

「馬鹿やね」

スバル

「馬鹿だね」

アインハルト

「……………馬鹿ですね」

銀時

「だー！ 馬鹿馬鹿つつさいよ！ どうせ馬鹿だよ、あー馬鹿だよ！ 雨の中ファミコンジャンプのリメイク買いに行って風邪引くんだもん馬鹿以外のなにものじゃねーだろーな！ しかも売り切れで買えなかったし」

なのは

「だから予約しとけばって言ったのに。いくらリメイクとはいえ出荷数少なそうって自分でも言ってたじゃん」

銀時

「だまらっしゃいなのは！ 予約をしないで買いに走るのが男の…
って、あれ？ 今日、なのは、sはお前だけ？」

なのは

「このはちゃんといちはお店。かのはさんはお母さんと病院。おとはさんはギンガとシューゴと何だかな〜を調査しに行ったよ」

銀時

「何だかな〜って何だよ？ 阿藤○か！？ ぶらり途中下車か！？
…さすがアツパッパーなのは。残念なのは」

はやて

「まあまあ、銀ちゃん。他のなのはちゃん達が利発過ぎてるだけかも知れんよ」

スバル

「だとしてもこっちのなのはさんはなににしてみればやっぱりアツパッパーだと思います」

ティアナ

「スバルは黙つときなさい」

スバル

「い、痛いよティア」

アインハルト

「……ティアナさん、お兄ちゃんがなくて荒れてるんですか？
八つ当たりですか？…これだからビッチは…」

銀時

「アインハルトが黒いいいいいっ！？」

はやて

「な、なんや！？ 誰の影響や！？ おとはちゃんか、おとはちゃんなんか！？」

フェイト

「あれ？ おかしいな、私眠ってるのかな？ あはは、起きろ、起きろ、起きろってば！」

なのは

「ふ、フェイトちゃん！ 壁にヘッドバッドしたら頭のセーブデータが消えちゃうよ！」

スバル

「なのはさん、何か違うないッスか……？」

ティアナ

「アインハルト、ちょっと面出てもらっていいかしら？」

アインハルト

「望むところですよ……」

銀時

「二人のまわりに“ビキビキ”とか“！？”って見えるよ！佐木飛朗斗先生の世界になってるよ！」

スバル

「あれ？ 銀さん風邪治ってない？」

銀時

「あ、本当だ」

はやて

「まあ、大事にならんでよかったんやない？」

銀時

「そうだな。あー銀さんなんか甘いもん食べたくなってきたよ」

はやて

「なら翠屋にでも行こか。快復祝いにはやてさんが奢ってあげよやないの」

銀時

「ごちになりまーす」

スバル

「ごちになりまーす」

はやて

「ただしスバル、てめえはダメだ」

スバル

「な、なんでー！？」

はやて

「冗談や。ほな、行こか」

ティアナ

「パンツメクレえええ」

アインハルト

「霸王…断・空・拳つつ」

——その頃、おとは達は

ギンガ

「なんなのあの“虚”みたいなのは!？」

おとは

「シューゴ、出番よ！ 斬月でやっちゃって！」

シューゴ

「いやー護じゃないからね、俺！ 正解とかでないからね！」

何だかな～な状態だった。

フェイト

「覚めろおお、覚めろ私いいいい、目覚めろ野性いい」

ある日どこかで #・3・7くらい（後書き）

はやて

「はやてのごとく！復習編…てな訳で、スペシャルゲスト「魔法戦記リリカルなのはForce」の世界からやってきた25歳の大人なのはちゃんこと“おとは”ちゃん！」

おとは

「はじめまして、高町なのは——ここでは“おとは”と呼ばれています」

はやて

「でな、復習ってことなんだけどどない意味で復習なんかな？」

おとは

「とりあえず、私達“異世界からやってきた『なのは・S』”の呼び方って私は聞いているよ」

はやて

「作者め、忘れたんやな…」

おとは

「あはは…じゃ、簡単にだけど説明するね。」

・このは↓無印終了後、A・S開始前の世界の“私”。年齢は9歳。小さいのはだから“このは”なんだね。

・いちは↓A・S最終回に登場した15歳の“私”。後述する“か

のは”さんの旦那さんのことは知らないみたいだから私^{おと}にとっての過去の私かもしれないね

・なのは↓坂田探偵事務所↓の世界の“私”。主な特徴は20歳だったり、乗り物に極端に弱かったり…あとちよつとお馬鹿さんなところがあるね。この世界の基準ってことで、銀さんはあだ名は付けなかったみたいだよ

・かのは↓シューゴの未来の世界からやってきた“私”。（彼女の世界の）元教官の神威キョウセンさんと結婚してたり、妊婦さんだったりで“別の世界感”が一番ある私かな。 “かのは”ってのは神威なのはを縮めたものだね

……こんなところかな

はやて

「おとはちゃん、ありがとな。それじゃ、次回予告」

おとは

「今回は、このは達が南の島でバカンス！な話を予定してたりしてなかったり…だそうです」

はやて

「次回またお会いしましょう」

かのはの登場と設定は一部の読者様を不快にさせてしまい申し訳ありません。此処に改めてお詫び上げます。 一二三みかる

ある日どこかで #・4

栗色の髪を二つに結わえた虹彩異色の瞳を持つ少女が、教壇に立つ。

本日は授業参観日。生徒だけではなく、生徒の保護者達の視線も彼女に向けられる。

パソコン型端末を黒板型のディスプレイに繋ぐと、そこには黒い鎧に身を包み、背中まで伸びた黒髪の男の肖像画が映し出された。精悍な顔付きをした男は画面の中で堂々と立っている。

その肖像画に皆、息を呑む。

そんな“観客達”を余所に、少女は課題の発表を始めた。

「私が調べた歴史上の人物はベルカ王朝時代に生きたトランスス国の王様、邪王ヴラディスラウスです。

この王様は聖王、霸王、冥王と並ぶ『王』の一人です。

何故彼が“邪王”なんて怖い呼ばれ方をしているかというと、ヴラディスラウスが治めるトランススは小さな国でした。攻め込まればあつという間になくなる位小さな国だったそうです。

そんな自国防衛の為に戦う姿に、トランススの民は英雄と讃えヴラディスラウスを竜公と呼びました。

しかし、一方で他国の民は彼の戦う様を――」

少女はディスプレイのパネルをタッチし、画面を切り替えると肖像画から、先ほどの男が多数の騎士達を薙ぎ払う荒々しく、そして凶々しい絵が。

長い黒髪は蛇の様にうねり、瞳は赤く輝いている。
有名な英雄叙詩『ベルカ戦記』の一場面だ。

「——えつと、“両の眼は赤々と輝かせ、黒髪なびくその姿、正に邪竜なり”と語り、竜眼の邪王と畏れていたそうです。

今でこそ英雄と評価されていますが、昔は必ずといっていい程この絵の様に“残酷な悪い王様”として物語等に登場したそうです。

私はお父さんに、ヴラディスラウスは本当は優しい王様なんだよという話を聞き、調べてみたくなり今回調べました。知らないことがわかってよかったです。 神威ヴィヴィオ」

「はい、もう一度大きな拍手をしましょう」

眼鏡を着けた女教師が柔和に微笑み手を叩くと、割れんばかりの拍手が起る。

生徒達から「ヴィヴィオすごい」等と声があがる。

これを見ていた生徒の両親達は「賢いお嬢ちゃんね」「私の子なんか管理局の“フェイトさん”のことを“けしからん、けしからん”言いながら調べてたのよ」「あらうちの上の子もあの人を見るたび“けしからん”って言ってるわ」「確かに“けしからん”からなア：あの我が儘ボデイ」等と騒つく。

女教師が静かにするよう呼び掛けた所で終了を告げる鐘が鳴った。

簡単なHRが終わり、生徒達は父兄と共に帰路へ。

ヴィヴィオも例外ではなかった。

白いシャツの上にシンプルな黒のジャケットを羽織る背の高い男。長めに伸ばした前髪が右目を隠す様に流す。

「ママ、来なかったね」

悲しげに眉尻を下げ吐露する。

「ママは病院に寄ってから来るって言うてたからな…きっと病院が混んでるだよ」

「そっか、なら仕方ないね」

手を繋ぐ父を見上げ、ヴィヴィオは残念そうに微笑む。
パパから教えて貰った今日の課題、ママにも聞いてもらいたかったなあ

校門を出た所で不安は吹き飛んだ。

優しい光に包まれて、二人の最愛の人物が立っていた。
大きくなっただお腹を片手で支え、柔和に微笑む女性。

「ママ〜」

ヴィヴィオが駆け出す。

直ぐ様発表した課題を自慢気に話す。

優しく頷きながら娘の話を聞く。

すると、ヴィヴィオに少し遅れて、父が現れ。

娘から顔を上げ、彼の方を見る。

「遅くなってご免なさい。それと——ただいま、キョウセンさん」

＋＋＋

「かのはちゃんがいなくなった!？」

「そう!いや、いなくなったというよりもパツと消えちゃったのよ」

坂田探偵事務所の一階、翠屋のカウンターでなのは母、桃子は銀時達に身振り手振りを交えて先程起きた出来事を説明する。お腹の子検診の為に行った病院からの帰り道、かのはは桃子の目の前で消えたのだという。

「案外、元の世界に帰ったのかもな。来た時も突然現れたし」

翠屋名物シュークリームを頬張りながら銀時がダルそうに言う。

「まあ、それなら問題はないと思うんやけど…確認する方法もないし、そう願おか。うん、かのはちゃんは家へ帰った。そうや、そうに決まっとる！」

はやては前向きな考えと共にシュークリームを口に入れた。

「私もそう考えることにするわ。あゝあゝ、孫の顔見たかったな…あ、そうだ銀ちゃん。桃子さんをお願い聞いてくれる？」

「この流れだと婿になれとか娘貰ってくれとか、そんな風に聞こえるんすけど」

「やーねエ、そりゃケーキとか甘味類作れる銀ちゃんがうちに来てくれるのは嬉しいけど…ウチの子、残念だからねエ……………」

桃子がこののは、いちとは談笑する娘に視線を向ける。

アホの子みたいに鼻の頭にクリームを付けていた。

「まあ、ウチのはいいとして……このはちゃんのことなんだけどね――」

「つー訳で南の島に行くことになった」

坂田探偵事務所に集まっていたいつものメンバーを見ながら銀時が吠える。いや、別に吠えちゃいけないけど。

「まあ、何だ。ガス抜きだガス抜き。原作でもあっただろ、たまの話で。あれみたいなものだ」

「銀時、何か危険な発言だよソレ」

額に絆創膏を貼ったフェイトが怪訝そうに。
だが、銀時はそれを無視して言葉を続ける。

「いいかテメエら、うちの万事屋最後の良心アインハルトが真っ黒になったり、マヨが結婚したり、更新がやたら遅くなったり…ここンところくなことがなかった。

こののは休暇も兼ねて、リフレッシュすることにした！

因みに強制参加な、参加拒否したヤツは、今回スポンサーの八神財閥の力を借りても引ッ張ってくかんな

……ま、取り敢えず」

『取り敢えず…？』

「今回はここまで。続きは次回な」

『ちょ、え？ えエエエエツ！？』

ある日どこかで #・4（後書き）

はやて

「はやてのごとく」

今回はお便りいただいています。烈火竜さんから『妊婦なのはさんに何を送ったら良いでしょうか？』：本人に聞いてみるのが一番やし来てもらいましょ。

かもーん、妊婦なのはさんことかのはちゃん！」

かのは

「お邪魔します」

はやて

「ごめんな」かのはちゃん」

かのは

「大丈夫よ、はやてちゃん」

はやて

「ほなら早速答えてもらいましょか」

かのは

「うーん、貰ったら嬉しいものか…ちょっと難しいなア」

はやて

「……やっぱ入り用だし、現金の出産祝い？」

かのは

「はやてちゃん、生々しすぎるから……けど実際はそうかも……色々揃えなきゃいけないものとかあるし……」

はやて

「烈火竜さん、だそーです」

かのは

「うう、はやてちゃんの意地悪……」

はやて

「さてさて、今回はこのはちゃんの休暇の話の続き。果たして、次に消えるなのは、sは誰だ！……にご期待下さい」

かのは

「何だかホラー映画みたいな煽りだね……」

ある日どこかで #・5

「どうして、こないなことになってしまったんか……」

八神はやては大海原を眺めながら失念と後悔に悩まされていた。

南の島へのバカンスのはずが、はずが……

ザフィーラが操舵する船の舵が折れ、それを直そうとアロニアルファを探しているところにデーパーインパクトクラスの大波。

「み、みんなああっ!？」

波に飲み込まれながら最後に見たのは、銀時が必死に伸ばした右手

現在。

ザザアアン

ザザアアン

シャザアアン

押しては返す波が憎らしい。

見るかぎり無人島に一人。

一人がなんや!寧ろ一人を楽しめ!

砂浜で膝を抱えていたはやては立ち上がる。

そうだ、一人なんだ!一人何だから水着なんていらない!

水着をはぎ取ろうと、ビキニに手を伸ばした瞬間――

「心の服をはぎ取れ！」

「へ？」

振り替えると全裸のザフィーラがいた。

ムキムキでブラブラだった。

「すみません、我がお嬢様…まさか人がいるとは思わなくて……」

「え、ええんよ……ほら、テンションが上がったらそないなこともあるって」

まさか自分も脱ごうとしていたなんて口が裂けても言えない。

「出来ればこのことはご内密に……」

「わーっとるで、ザフィーラ」

薪や果物といった食料を探すため、とりあえず森の方へと来たはやととザフィーラ。

「我がお嬢様、もしかしたら猛獣がいるかもしれないので私の後ろへ」

「さすが盾の騎士。盾になる気満々やね」

「え…ちょ、我がお嬢様!？」

「!?!? し、静かに!…今なんか聞こえへんかったか!」

ザフィーラは何か言い掛けるが、おとなしく言葉を飲み込む。

「……………っ」

何処かからか確かに何か聞こえてきた

「我がお嬢様、今のは!？」

「人の声のようにも聞こえへんかった?…もしかしたら人がおるんか
もしれへん!行くでザフィーラ!」

声の方へと駆け出していく。

もしかしたらここは無人島なんかじゃないのかもしれないかもしれへん!人がい
れば――

「かーめーはーめー波あつ!! ……なーんか違うな」 きゃー
むうえーはー……っ」

かめはめ波の練習をしている銀時でした。

「どうせこないなことやと思ったわ!どんだけベタやねん!」

「はやて、無事だったか!」

「何やその“私は何もしてないです”みたいなリアクション!」

「我がお嬢様、ここはお母さんの心です。たまたま息子がムスコを片手でピストン運動してる時を目撃したみたいに」

「ザフィーラ、ちつともわからへん！」

「ザフィーラもいたのか……みんなは？」

「……銀ちゃん、それが、わからへんのや」

銀時の問に首を横に振るはやて。

「坂田、もしかしたらそこにいるかもしれん」

そついいながら森の一点を指差すザフィーラ。

そこからは

「卍…解っ！」という声が聞こえていた。

「みんなが一護一護言うから、出来ると思って……」
シューゴが頭を押さえて三人の後ろを着いていく。

「私ら何も見てへんから……」

仲間が増え先程の浜辺に戻ると……

「とーきをーこえーきざまれーたー かーなしーみのーきおくー」
フェイトが波に向かって ETERNAL BLAZE を手拍子で熱唱していた。

「A・S は名作だから仕方ない」

銀時がフェイトの肩を叩き慰める。

そのまま砂浜を歩いていると、寝転がっているアインハルトが

「……………あの雲、中に絶対ラピュタがあります！」

「おつきい雲見たら誰だって思うよ」

フェイトが暗黒面に旅立ったアインハルトを宥める。

「なあ、銀ちゃん、もしかして皆この島に流れ着いたンかな？」

「さアな？ えーっと足りないのは——」

「ティア、スバル、ギンガさんに——」

「シグナムとこのはちゃんやな」

シューゴとはやてが指を折りながら答える。

「ミッドチルダ組はバリアジャケットもあるし大丈夫だろ。シグナムは…一人でも生きていけるさメイドだし」

「せやなメイドやもんな」

なんて話をしていると砂浜に人影が。

「坂田、あそこに誰がいるぞ！」

「何？」

影が揺らめく。

影は一つだけではなかった。

影は複数あったのだ。

「いいかお前ら！ 敵はいつ如何なる時に襲ってくるか分からない！もしかしたらこうして全身ローション塗れになっている時に教われるかもしれんッ！」

禪姿のゴリラがローション塗れになって何やら吠えていた。

彼だけではない、数十名の海パン姿の筋肉隆々な男たちがゴリラ同様ローション塗れであった。

「お前ら…いくら局長の命令だからって断っていいんだからな」

瞳孔開き気味の男——土方が疲れ気味に声をあげる。

「あれ？ 旦那、どうしたんですかアイコンな所で？」

銀時に声をかけてきたのは、パラソルの下バカンスを満喫していた
沖田だった。

「……………何でコイツらがいる訳？」

——↓ t o b e c o n t e n u e d

ある日どこかで #・5（後書き）

はやて

「後書きコーナーはやてのごとく」

にしても、なんか前回とちーとも繋がらない始まり方やな」

新八

「なんか唐突に続編がつくられた映画によくありますよね」

はやて

「……なんや、今日のゲストはメガネかい」

新八

「コラあああ！ 貴重なメガネツツコミだぞおお！」

はやて

「はいはい、せやね」

にしても、まさかあそこで真撰組が出てくるとは思わなかったわ
……。次回どないなるんやろ」

新八

「……あれ？ なんかない体で進んでない？ ちょ、ちょっとおー
っ！」

はやて

「ほなら、次回お会いしましょう」

新八

「え！？ もう終わるかよおおッ！？」

閑話休題（前書き）

銀時「ん？え？ちょ、今更復活ッ！？」

なのは「ほら、銀さん！皆さんが見てるんだからしゃきつとしてしゃきつと！」

銀時「あれからどんだけ経ったと思ってる訳？ワンピースやブリートの第二部始動に合わせて復活ですか？こちとらキャラ忘れて大変だつてーのに…」

なのは「銀さん、よく分からないからソレ。キャラ忘れたって冗談でも言っちゃダメだよ」

銀時「バカヤロー。キャラ忘れるってことはだな、銀さんが銀さんじゃなく、ただの杉田になるってことだ。ラブプラスに明け暮れたり、水樹奈々に有頂天になったりするってことだ。なのは、お前だつてそうだろ？王国民とかを手懐けてライフライナー」

なのは「違っよ！私はそんなじゃないよ！ピカルの定理なんて出てないよ！？」

銀時「人は誰だつて違っ自分——ペルソナを持ってるもんなんだ。アシユラマンみたいに、な」

なのは「なんでアシユラマン！？」

銀時「まーそーいう訳で。坂田探偵事務所リリカル奇譚、復活だコノヤロー」

なのは「銀さん支離滅裂過ぎるよオオツ!？」

閑話休題

本編とはまるきり関係のない超・短編です。本編同様、分かる人だけ分かるネタだけで構成されてますのでご了承下さい。

銀時「なあ、なのは」

なのは「なに銀さん？」

銀時「ちよつと“ずきゅゝん”って言うてみてくんねーか？」

なのは「？　ず、ずきゅゝん？」

銀時「違アう！もっと、こう、天真爛漫にコナミっぱくずきんな感じだ！」

なのは「意味が分からないよ…」

銀時「ちつ、仕方ねーな。このは！このは！…」

このは「銀さんどうしたの？」

銀時「ちよつと“ずきゅゝん”って言うてみてくれ」

このは「ずきゅゝん！」

銀時「そうコレ！コレだよ！わかったか！」

なのは「わからないよ……」

銀時「なあ、フェイト」

フェイト「何、銀時？…まさか、私もなのはみたいに何か言わせるつもりじゃ…」

銀時「ンなわけないだろつての。いやな、歌唱力に定評のあるフェイトさんにコノ歌を唄って貰いたくてよオ」

フェイト「歌？…えーっと——キャッチ、マイ、ハート」

銀時「ぶえりいいめるおん」

フェイト「！？」

銀時「……すまねエ、“フリ”かなと思って」

フェイト「やらせといて王様発言！？」

銀時「フェイト、怒る時は『私、堪忍袋の緒が切れました！』だ。覚えとけッ！」

フェイト「……何で逆に怒られているんだろう、私…」

シャル「^{ハラワタ}臓物をブチ撒けるッ！！」

土方「ただい——って、シャルうう！？」

シャル「お帰りなさい十四朗さん。今夜はモツ鍋ですよ」

土方「あ、あゝそれでハラワタね。てつきり真っ赤な誓いで核鉄か
と思った」

シャル「何の話ですか？」

土方「何でもない」

シャル「そうですか。私は等価交換で鋼な方かと」

土方「それ別な鍊金！るろうにとかフランケンシュタインとか関係
ない方！」

シャル「あらあらうふふ」

アリサ・ゲンヤ「何だか呼ばれた気が」

ギンガ「そう言えば、お父さんは初代無能でしたっけね」

特におちなし。

閑話休題（後書き）

久方ぶりの更新です。

本当に遅筆ですみません…

その上、短いし中身ないし、もうアレだして頭上がりません。

現在、本編の続きを執筆してますので

必ずや近日中に更新出来ます様頑張りしたいと思います。

ちらりと予告（執筆中の本編より抜粋）

あの髪の毛の長さは女、か。

にしても、あの“銀色の髪”どこかで……

「銀時、久しぶりだな」

「！？ な、なんでお前が——」

「なんだその顔は？ 私に逢えて嬉しくないのか？」

「そ、そんなことは——けど、お前は確かに高杉に……」

砂浜にはローション塗れの真撰組隊士が数名倒れていた。

「ちィ、何なんだありゃ…おい総悟！ そっちは大丈夫か？」

「土方さん死んでなかったですか？ さっさとくたばってくれてよかったのに」

「ンなこと言ってる場合か！ …何なんだありゃ…？」

「恐らく、この島に住む原住民だと思われます」

「ユーノ、お前も無事だったか！？」

「はい。…ただ、局長の禪は茶色に染まってますが」

「なんてこった…土方さん、替えの禪ってどこにありやしたかねイ？」

「なんでオメーらは揃って近藤さんの禪の心配なんだよ！」

「うええんトシいい！ 年甲斐もなく漏らしちゃったよおおッ！？
替えの禪ってどこにあるッツ！？」

——以下、本編へ続く

ある日どこかで #・6

「^{アーカム}帝都の海鳴：ここは私の知ってる街ではない」

高町なのは（15）——いちはは、朝靄に包まれた見慣れぬ“故郷”を見渡す。
こちらに“飛ばされて”も、いちはは朝のジョギングを欠かさず続けていた。

「あ、いちはちゃんお早う」

眼鏡をかけた眼鏡以外に取り柄のない普通で普通過ぎる少年、志村新八が声をかけてきた。

何故かは分からないが、いちはは新八のことを度々「お兄ちゃん」と呼びそうになっていたのだが、それは関係ない話。それと便座力バァ。

「今日もチンクさんのお手伝い？ 相変わらず早いんだね新八君」

「まあね。けど、それを言ったらいちはちゃんもじゃない？」

「ふふ、そうだね」

「おーい新八！ いちは」

二人に声をかけてきたのは、サイドポニーの黒髪の少女。

「あ、アイシスちゃんおはよう。今日もジョギング？」

「日課だからね」

アイシスと呼ばれた少女（貧乳。だがそこがいい）は元気な笑顔を二人に見せる。

——本当にこの世界は私の知らない世界なんだね…

いちとは確認するように二人の少年と少女を見る。

そういえば、彼女は今ごろ楽しんでいるだろうか？

いちとは一人の少女のことを思い出していた。

私たちと同じく別世界から飛ばされてきた“幼き自分”

——心配しなくても、あの人がついてるから大丈夫か。

あの、銀髪の男が

+++++

……………ここは、どこだ？

何もない、真つ白な空間……—おかしい

俺はさっきまで砂浜に居たはずだ。

なのに、なんで“こんな訳の分からない場所”にいる？

まあ、いい。こんなところにずっと居てもわかりやしねえんだ。

とりあえず、見て回ってりや何か……あれ？　こんなとこに人がいるア

あの髪の長さは女、か。

にしても、あの“銀色の髪”どこかで……

「銀時、久しぶりだな」

「！？　な、なんでお前が——」

「なんだその顔は？　私に逢えて嬉しくないのか？」

「そ、そんなことは——けど、お前は確かに高杉に……」

「……………」

“——んッ”

「なんだ…声が…？」

「どうやら時間のようだな。銀時」

「な、なんだよ……」

「今を大切にしろ。私がいたのは最早、過去だ。残念だがそれは変わらない事実」

「おい、訳がわからねエぞ」

「“このは編”が終わった頃にまたおいで。もう小さな女の子を泣かせては、駄目だぞ、銀時——」

そう言つて“コイツ”は俺の唇に自らの唇を重ねた。

最後の台詞が何で「めだかボックス」だったのかは分からないが、

俺はまた、“コイツ”に逢える時がくるのだろうか——

——さんッ!?

——銀さんッ!?

「銀さんッ!!?」

歳端もいかぬ少女——このは（幼なのは）が、横たわる銀時を必死に揺さ振る。

起きて!起きて銀さん!

泣き声混じりに呼びつづけたお陰か、銀時はまるで寝起きみたいに寝呆け眼で目を覚ました。

「なんだ…このはか」

「よかった…」

銀時は頭を掻きながら上体を起こす。頭がガンガンする。何かに殴られた様な痛みに苛まれつつ、現状を把握しようとした。

確か、真撰組の野郎共が何故か砂浜にいてローション塗れで――
―それで、

（“アイツ”に――）

銀色の髪の女が、哀しげに唇を重ねてきた。
夢か幻か、なんにせよ

ただ一つ分かることがある。

「何で俺は寝てたんだ？」

肝心な部分が思い出せないなまま辺りを見回すと、砂浜にはローション塗れの真撰組隊士が数名倒れていた。

「……なにコノ汚い絵図ら？ 野郎同士でローション相撲でもしてた訳？ 河本？」

「違うよ、銀さん。コレは――」

楽観的な銀時と違い、傍にいるこのはは悲痛な表情を浮かべていた。

「ちィ、何なんだありゃ……おい総悟！ そっちは大丈夫か？」

「土方さん死んでなかったですか？ さっさとくたばってくれりゃアよかったのに」

「ンなこと言ってる場合か！ クソッ…何なんだありゃ…？」

「恐らく、この島に住む原住民じゃないかと……」

「ユーノ、お前も無事だったか！？」

「はい。…ただ、局長が……局長の禪は茶色に染まってしまうなんて……」

ユーノと呼ばれた隊士（倒れている隊士達と違い、土方・沖田同様に制服を着ている）は涙ながらに語る。

「なんてこった…土方さん、替えの禪ってどこにありやしたかねイ？」

「なんでオメーらは揃って近藤さんの禪の心配なんだよ！」

「うええんトシいい！ 年甲斐もなく漏らしちゃったよおおッ！？ 替えの禪ってどこにあるッ！？」

土方は泣きながら自分に張り付こうとした近藤を、寸でのところで回避する。

禪が茶に染まってる云々の前に、ローション塗れで気持ち悪かったから。

「近藤さん、とりあえず黙ってて貰えないか。ユーノ、お前は無事な隊士の確認！ 総悟、テメエもユーノと一緒に……って、何してやがるウウウ！？」

土方の声に振り返った総悟は、あろうことか隊士達を次々に砂浜に

埋めていた。

「何って、コイツら寝転がっていると邪魔になるんで埋めてんでさア。ユーノ、もっと穴を掘れ。まだまだ足りねーぞ」

「え？ ほ、掘っていいんですか？ ……けど、僕は掘られる方が…ポッ」

手にしたシャベルを離し、薄紅に染まった頬を両手で押さえるユーノの姿に、土方をはじめ近藤、生存者を確認して近づいて来た銀時、反対から同じように近づいてきたザフィーラとはやては全員顔に青筋を張り付けた。

意味が分からないこのはと、知ってか知らずか平然としている総悟を抜かした野郎共は、自らの尊厳を守るかのように両手で尻を覆う。

「ま、まあ人の趣味は色々もあるもんやから、ね…ほら。…私はノーマルやけど」

「そ、そうですね我がお嬢様……我もノーマルですが」

「ほら、俺たち大人だから…そんなことカミングアウトされても…物怖じないってか…お、俺だってノーマルだ」

「近藤さん、それでこれからどうします？ 生存者は今のところ是だけみてーだけど……俺にはシャマルがいる」

「俺だってカリムさん一筋だ！」

そんな近藤に対し、誰かが

「報われねえけどな」と呟いた、それは今語る物語ではない。

+++++

「お兄ちゃん、どいてそいつ殺せない！」

アインハルトは固く握った拳を繰り出そうと、鬼の形相でティアナを睨んでいた。

「むぎいー！　むがぁーっ！」

そんなアインハルトを宥めようとすると、口に猿轡をくわえさせられたシューゴは泣きそうになりながらアインハルトにすがりつくも、その抵抗虚しく相対するティアナへと距離を縮めていく。

「シューゴ！　そんなちっぱいがいいの？　抱き締めるほどにちっぱいが好きなの！？」

「むーむーっ」↑全力で首を横に振りながら

「ティアナさん、残念ですが…お兄ちゃんはアナタの無駄な脂肪には興味がないと仰ってるようです」

「そうなの！？　くっ…、そんな夢も希望も詰まってるようなホライズン（地平線）がいいだなんて……」

「ティアナさん、あなたは間違っています。貧乳に何も詰まってい

ない？——否。貧乳は“夢を与えているからこそ小さい”のです！」

「そ、そんな……私の完敗だわ……」

打ち拉がれた少女は地面に膝を着く。それが決定打だった。決着の合図であつた。

「ところでティアナさん」

「何よ、私をまだ弄ぶ気？」

「いえ————何で私とお兄ちゃんは、こんな洞窟にいるのでしょうか？」

「は、はじめに聞きなさいよオオオツ!？」

“私たち”は洞窟にいた。

ビーチでローション塗れの真撰組と遭遇した直後、“私たち”は何者かに襲われ、気付けばこの洞窟にいた。

そこで“私たち”は遭難した仲間の一人、ティアナ・ランスターと再会を果たす。

しかし、ティアナは何故か両手両足を縛られた状態。

いや、ティアナだけじゃない”

—— “私たち” も縛られている！？

シューゴに至っては猿轡を着けられている！

いや、そんな！

あの手は何だ！

窓に！ 窓に！

—— 坂田探偵事務所秘書 フェイト・T・ハラウオンの手記
より

—— つて、感じかな」

「「今の全部フェイトさんの台詞！？」「」

「むぐうー！」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8881k/>

坂田探偵事務所リリカル奇譚

2011年5月30日07時53分発行